

工3B57

本居豐穎
木村正辭
小杉楹邨

井上賴圀
落合直文

監修

國文大觀

9 日記草子部

板倉屋書房

918
No 547
M

國文大觀日記草子部目次

土佐日記	一頁
蜻蛉日記	二三頁
枕草紙	一六頁
紫式部日記	三九頁
和泉式部日記	四九頁
更科日記	四七頁
讚岐典侍日記	四九頁
方丈記	四二頁
四季物語	五一頁
艶詞	五一頁

目次



224494

野守鏡……………六九頁

十六夜日記……………五頁

轉寢記……………六五頁

東關紀行……………六九頁

中務内侍日記……………七一頁

徒然草……………七三頁

藤河記……………六六頁

小夜寢覺……………六七頁

いほぬし……………六九頁

無名草子……………九二頁

土佐日記

男もすなる日記といふものを、女もまてみむとてするなり。その年平のまはすの二十日あまり一日の、戌の時に門出す。そのよしいさゝかもものにかきつく。ある人縣の四年五年はて、例のこといも皆まをへて、解由など取りて住むたちより出で、船に乗るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬおくりす。年をろよく具しつる人々供なむわかれ難く思ひてその日頻にとかくしつゝの、しるうちに夜更けぬ。

廿二日平、和泉の國までとたひらかにねがひたつ。藤原の言實船路なれど馬の餓す。上中下ながら酔ひ過ぎていと怪しくまは海のはとりにてあざれあへり。

廿三日、八木の康教といふ人あり。この人國に必ずしもいひつかふ者にもあらざる行なり。これぞ正しきやうにて馬の餓したる。かみがらにやあらむ、國人の心の常として今はと見えざるを心あるものは恥ぢずき行なむきける。これは物によりて譽むるにしもあらず。

廿四日、講師馬の餓しに出でませり。ありとある上下童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みて遊ぶ。

廿五日、守のたちより呼びに文もて來れり。呼ばれて至りて日ひとひ夜ひとよとかく遊ぶや

うにて明けにけり。

廿六日、なほ守のたちにてあるじまの、しりてをのこらまでに物かづけたり。からうた聲あげていひけり。やまとうた、あるじもまらうどもこと人もいひあへりけり。からうたはこれにはえ書かず。やまとうたあるじの守のよめりける、

「都いで、君に逢はむとこしものをこしかひもなく別れぬるかな」となむありければ、かへる前の守のよめりける、

「まろたへの浪路を遠くゆきかひて我に似べきはたれならなくに」。

ことひとびとのもわりけれどさかしきもなかるべし。とかくいひて前の守も今も諸共におりて、今のあるじも前のも手取りかはしてゑひごとくに心よげなることとして出でにけり。

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに京にて生れたりし女子野こゝにて俄にうせにしかば、この頃の出立いそぎを見れど何事もえいはず。京へ歸るに女子のなきのみぞ悲しび戀ふる。ある人々もえ堪へず。この間にある人のかきて出せる歌、

「都へとおもふももの、かなしきはかへらぬ人のあればなりけり」。

又、或時には、

「あるものと忘れつゝ、なほなき人をいづらと問ふを悲しかりける」といひける間に鹿兒の崎といふ所に守のはらからまたことひとこれかれ酒など持て追ひきて、磯におり居て別れ難きことをいふ。守のたちの人々の中にこの來る人々ぞ心あるやう

にはいはれはのめく。かく別れ難くいひて、かの人々の口綱ももろもちにてこの海邊にて荷ひいさせる歌、

「をしと思ふ人やとまるとあし鴨のうち群れてこそ我はきにけれ」といひてありければ、いといたく愛で、行く人のよめりける、

「棹させど底ひも知らぬわたつみのふかきこゝろを君に見るかな」

といふ間に楫取もの、哀も知らでおのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわげば船に乗りなむとす。この折にある人々折節につけて、からうたども時に似つかはしき舞いふ。又ある人西國なれど甲斐歌などいふ。かくうたふに、ふなやかたの塵も散り、空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる。今宵浦戸にとまる。藤原のとき實、橘の季術、こと人々追ひきたり。

廿八日、浦戸より漕ぎ出で、大湊をおふ。この間にはやくの國の守の子山口の千岑、酒よき物どももてきて船に入れたり。ゆくゆく飲みくふ。

廿九日、大湊にとまれり。くす師ふりはへて屠蘇白散酒加へてもて來たり。志あるに似たり。元日、なほ同じとまりなり。白散をあるもの夜のまとしてふなやかたにさしはさめりければ、風に吹きならさせて海に入れてえ飲まずなりぬ。芋しがあらめも齒固めもなし。かやうの物もなき國なり。求めもおかず。唯おしあゆの口をのみぞ吸ふ。このすふ人々の口を押年魚もし思ふやうあらむや。今日は都のみぞ思ひやらるゝ。「九重の門のしりくめ繩のなよしの頭

ひら木らいかに」とぞいひあへる。

二日、なほ大湊にとまれり。講師、物、酒などおこせたり。

三日、同じ所なり。もし風浪のまばしと惜む心やあらむ、心もとなし。

四日、風吹けばえ出でた、ず。昌連酒よき物たてまつれり。このかうやうの物もて来るひとになほしもえあらでいさ、げわざせさすものもなし。にぎは、しきやうなれどまくるこちす。

五日、風浪やまねば猶同じ所にあり。人々絶えずとぶらひにく。

六日、きのふのごとし。

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日は白馬を思へどかひなし。たゞ浪の白きのみぞ見ゆる。かゝる間に人の家徳の池と名ある所より鯉はなくて鮒よりはじめて川のも、海のも、ことものも、ながびつになひつゝけておこせたり。わかなきこに入れて雉など花につけたり付七。若菜ぞ今日をば知らせたる。歌あり。そのうた、

「浅茅生の野邊にしわれは水もなき池につみつるわかかななりけり」。

いとをかしかし。この池といふは所の名なり。よき人の男につきて下りて住みけるなり。この長櫃の物は皆人童までにくれたれば、飽き満ちて舟子どもは腹鼓をうちて海をさへおどろかして浪たてつべし。かくてこの間に事おほかり。けふわりごもたせてきたる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひひて浪の

立つなること、憂へいひて詠める歌、

「ゆくさきにたつ白浪の聲よりもおくれ泣かむわれやまさらむ」

とぞ詠める。いと大聲なるべし。持てきたる物より歌はいかゝあらむ。この歌を此彼あはれがれども一人も返しせず。しつべき人も交れ、どこれをのみいたがり物をのみくひて夜更けぬ。この歌ぬしなむ「またまからず」といひてたちぬ。ある人の子の童なる密にいふ「まろこの歌の返しせむ」といふ。驚きて「いとをかしきことかな。よみてむやは。詠みつべくばはやいへかし」といふ付八。「まからずとて立ちぬる人を待ちてよまむ」とて求めけるを、夜更けぬとにやありけむ、やがていにけり。「そもそもいかゝ詠んだる」といふかしがりて問ふ。この童さすがに耻ぢていはず。強ひて問へばいへるうた、

「ゆく人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ」

となむ詠める。かくはいふものか、うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。童ごとにては何かはせむ、女翁にをしつべし、悪しくもあれいかにもあれ、たよりあらば遣らむとておかれぬめり。

八日、さはる事ありて猶同じ所なり。今宵の月は海にぞ入る。これを見て業平の君の「山のはにげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおもはゆる。もし海邊にてよま、しかば「浪たちさへて入れずもあらなむ」と詠みてまじや。今この歌を思ひ出で、ある人のよめりける、

「てる月のながるゝ見ればあまの川いづるみなとは海にぞほりける」

とや。

九日、つとめて大湊より那波の泊をおはむとて漕ぎ出でにけり。これかれ互に國の境の内はとて見おくりにくる人数多が中に藤原のときざね、橘の季衡、長谷部の行政等なむみたちより出でたうびし日より此所彼所におひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志はこの海には劣らざるべし。これより今は漕ぎ離れて往く。これを見送らむとてこの人どもは追ひきける。かくて漕ぎ行くまにまに海の邊にとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし、船にも思ふことあれどかひなし。か、れどこの歌を獨言にしてやみぬ。

「おもひやる心は海を渡れどもふみしなれば知らずやわらむ」。

かくて宇多の松原を歩き過ぐ。その松の敷幾そばく、幾千年へたりと知らず。もとごとく浪うちよせ枝ごとに鶴を飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして船人のよめる歌、

「見渡せば松のうれごとくすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」

とや。この歌は所を見るにえまさらず。かくあるを見つゝ漕ぎ行くまにまに、山も海もみなくれ、夜更けて、西ひんがしも見えすして、てけのこと楳取の心にまかせつ。男もならはねば、^尋いとも心細し。まして女は船底に頭をつきわて、ねをのみぞなく。かく思へば舟子楳取は船歌うたひて何とも思へらず。そのうたふうたは、

「春の野にてぞねをばなく。わが薄にて手をきるさる、つんだる菜を、親やまほるらむ、姑

やくふらむ。かへらや。よんべのうなるもがな。せにこはむ。そらごとをして、おぎのり

わざをして、せにももてこすおのれだにこす」。

これならず多かれども書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども心は少しなきぬ。かくゆきくらして泊にいたりて、おきな人ひとり、たうめ一人あるがなかに、心ちあしきしてもの物し給はでひそまりぬ。

十日、けふはこの那波の泊にとまりぬ。

十一日、曉に船を出して室津をおふ。人皆まだねたれば海のありやう^尋も見えす、唯月を見てぞ西東をば知りける。かゝる間に皆夜明けて手あらし例の事どもして晝になりぬ。いましはねといふ所にきぬ。わかき童この所の名を聞きて「はねといふ所は鳥の羽のやうにやわる」といふ。まだ幼き童のことなれば人々笑ふ。時にありける女の童なむこの歌をよめる、

「まことにて名に聞く所はねならば飛ぶがごとくにみやこへもがな」

とぞいへる。男も女もいかで疾く都へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとはあらねどげにと思ひて人々わすれず。このはねといふ所問ふ童の序にては、又昔の人を思ひ出で、いづれの時にか忘る。今日はまして母の悲しがる、事は、くだりし時の人の数足らねば、ふるき歌に「数はたらでぞかへるべらなる」といふことを思ひ出で、人のよめる、

「世の中におもひやれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな」といひつゝなむ。

十二日、雨降らず。文時、維茂が船のおくれたりし。ならしつより室津に帆をきぬ。
十三日の曉にいさゝか小作雨ふる。まばしありて止みぬ。男女これかれ、ゆあみなとせむとて
あたりのよろしき所におりて行く。海を見やれば、

「雲もみな浪とぞ見ゆる海士もがないつれか海と問ひて知るべく」
となむ歌よめる。さて十日あまりなれば月おもしろし。船に乗り始めし日より船には紅こく
よきさぬ着ず。それは海の神に怖ぢてといひて、何の蘆蔭にことづけてはやのつまのいすし
すしあはびをぞ心にもあらぬはぎにあげて見せける。

十四日、曉より雨降れば同じ所に泊れり。船君せちみす。さうじものなければ午の時より後
に楫取の昨日釣りたりし鯛に、錢なければよねをとりかけておちられぬ。かゝる事なほあり
ぬ。楫取又鯛もてきたり。よね酒まばしばくる。楫取けしきあしからず。

十五日、今日小豆粥煮す。口をしくなほ口のあしければるざるほどにぞ今日廿日あまり経ぬ
。徒に日をふれば人々海をながめつゝぞある。めの童のいへる、

「立てばたつぬれば又ある吹く風と浪とは思ふどちにやあるらむ」。

いふかひなきものゝいへるにはいと似つかはし。

十六日、風浪やまねば猶同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくしていつしかみさきといふ所渡
らむとのみなむおもふ。風浪ともによむべくもあらず。ある人のこの浪立つを見て詠めるう
た、

「霜だにもおかぬかたぞといふなれど浪の中にはゆきぞ降りける」。

さて船に乗りし日よりけふまでに廿日あまり五日になりけり。

十七日、曇れる雲なくなりて曉月夜いとおもしろければ、船を出して漕ぎ行く。このあひだ
に雲のうへも海の底も同じ如くになむありける。うへも昔のをのこは「棹は穿つ波の上の月
を。船は襲ふ海のうちの空を」とはいひけむ。きゝされに聞けるなり。又ある人のよめる歌、
「みなそこの月のうへより漕ぐふねの棹にさはるは桂なるらべし」。

これを聞きてある人の又よめる、

「かげ見れば浪の底なるひさかたの空こぎわたるわれぞわびしき」。

かくいふあひだに夜やうやく明けゆくに、楫取等「黒き雲にはかに出でさぬ。風も吹きぬべ
し。御船返してむ」といひてかへる。このあひだに雨ふりぬ。いとわびし。

十八日、猶同じ所にあり。海わらければ船いださず。この泊遠く見れども近く見れどもいと
おもしろし。かゝれども苦しければ何事もおもほえず。男どちは心やりによあらむ、からう
たなどいふべし。船もいださでいたづらなればある人の詠める、

「いそぶりの寄する磯には年月をいつとも分かぬ雪のみぞふる」

この歌は常にせぬ人のことなり。又人のよめる、

「風による浪のいそにはうぐひすも春もえしらぬ花のみぞ咲く」。

この歌どもを少しよろしと聞きて、船のをさしける翁、月頃の苦しき心やりて詠める、

「立つなみを雪か花かと吹く風ぞよせつゝ人をはかるべらなる」。

この歌どもを人の何かといふを、ある人の又聞きふけりて詠める。その歌よめるも七十字の童、年よりは幼くぞある。この童、船を槽ぐまにまに、山も行くと思ゆるを見て、あやしきこと歌をぞよめる。そのうたは、

十九日、日あしければ船いださず。

二十日、昨日のやうなれば船いださず、皆人々愛へ歎く。苦しく心もとなければ、唯日の経ぬる敷を、今日いくか、二十日、三十日と敷ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいも寝ず。二十日の夜の月出でにけり。山のはもなくて海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲麻呂といひける人は、もろこしに渡りて歸りきける時に、船に乗るべき所にて、かの國人馬の賤し、わかれ惜みて、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし「我が國にはかゝる歌をなむ神代より神もよんたび、今は上中下の人もかうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かなしみもある時には詠む」とてよめりける歌、

「あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」

とぞよめりける。かの國の人聞き知るまじくおもはえたれども、ことの心を男文字にさまを書き出して、この詞傳へたる人にいひ知らせければ、心を聞き得たりけむ、いと思ひの

外になむめでける。もろこしとこの國とはことなりなるものなれど、月の影は同じことなるべければ人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌、

「都にてやまのはに見し月なれどなみより出で、なみにこそ入れ」。

廿一日、卯の時ばかりに船出す。皆人々の船出づ。これを見れば春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろげの願に依りてにやあらむ、風も吹かずよき日いできて漕ぎ行く。この間につかはれむとて、附きてくる童あり。それがうたふ舟うた、

「なほこそ國のかたは見やられるれ、わが父母ありとしおもへば。かへらや」

とうたふを哀なる。かくうたふを聞きつゝ、漕ぎくるに、くるとりといふ鳥岩のうへに集り居り。その岩のもとに浪しろくうち寄す。漕取のいふやう「黒特鳥のもとに白き浪をよす」とぞいふ。この詞何とにはなけれど、ものいふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば咎むるなり。かくいひつゝ、行くに、船君なる人浪を見て、國よりはじめて海賊報いせむといふなる事を思ふうへに、海の又おそろしければ、頭も皆おそろしげぬ。七十八十は海にあるものなりけり。

「わが髪のゆきとよそべのちら浪といづれまされりおきつ島もり」

漕取のうた。

廿二日、よんべのとまりよりことゝまりをおひてぞ行く。遙に山見ゆ。年九つばかりなるをの童、年よりは幼くぞある。この童、船を槽ぐまにまに、山も行くと思ゆるを見て、あやしきこと歌をぞよめる。そのうたは、

「漕ぎて行く船にて見ればあしびきの山さへゆくを松は知らずや」とぞいへる。幼き童のことにては似つかはし。けふ海あらげにて磯に雪ふり浪の花さけり。ある人のよめる。

「浪とのみひとへに聞けどいろ見れば雪と花とにまがひけるかな」。

廿三日、日てりて曇りぬ。此のわたり、海賊のおそりありといへば神佛を祈る。

廿四日、昨日のおなじ所なり。

廿五日、機取らの北風あしといへば、船いださず。海賊追ひくといふ事絶えずきこゆ。

廿六日、まことにやあらむ、海賊追ふといへば夜はばかりより船をいだして漕ぎくる。道にたむけする所あり。機取してぬきたいまつらするに、幣のひんがしへちれば機取の申し奉ることは、「この幣のちるかたにみふぬ速にこがしめ給へ」と申してたてまつる。これを聞きてある女の童のよめる、

「わたつみのちぶりの神にたむけするぬさのおひ風やますふかなむ」

とぞ詠める。このあひだに風のよければ機取いたくほこりて、船に帆あげなど喜ぶ。その音を聞きてわらはもおきなもいつしかとし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。このなかに淡路のたうめといふ人のよめる歌、

「追風の吹きぬる時はゆくふねの帆手うちてこそうれしかりけれ」とぞ。てしけのことにつけてゐる。

廿七日、風吹き浪あければ船いださず。これかれかしこく八字歌歎く。男たちの心なぐさめに、からうたに「日を望めば都遠し」などいふなる事のさまを聞きて、ある女のよめる歌、

「日をだにもあま雲ちかく見るものを都へとおもふ道のはるけさ」。

又ある人のよめる。

「吹くかせの絶えぬ限りし立ちくれば波路はいといはるけかりけり」。

日ひと日風やます。つまはじきしてぬぬ。

廿八日、よもすがら雨やます。けさも。

廿九日、船出して行く。うらうらと照りてこぎゆく。爪のいと長くなりたるを見て目を數ふれば、今日は子の日なりければ切らず。正月なれば京の子の日の事いひ出で、「小松もがな」といへど海中なれば難しかし。ある女の書きて出せる歌、

「おぼつかなけふは子の日かあまならば海松をだに引かましものを」

とぞいへる。海にて子の日の歌にてはいかゝあらむ。又ある人のよめるうた、

「けふなれど若菜もつまず春日野のわがこぎわたる浦になければ」。

かくいひつゝ漕ぎ行く。おもしろき所に船を寄せて「こゝやいづこ」と問ひければ、「土佐のとまり」とぞいひける。昔土佐といひける所に住みける女、この船にまじれりけり。そがいひけらく、「昔まばしありし所の名たぐひにぞあなる。わはれ」といひてよめる歌、

「年ごろをすみし所の名にしおへばさよる浪をもあはれとぞ見る」。

三十日、雨風ふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞きて、夜中ばかりに船を出して阿波のみとを渡る。夜中なれば西ひんがしも見えず、男女辛く神佛を祈りてこのみとを渡りぬ。寅卯の時ばかりに、ぬ島といふ所を過ぎてたな川といふ所を渡る。からく急ぎて和泉の灘といふ所に至りぬ。今日海に浪に似たる物なし。神佛の恵蒙ぶれるに似たり。けふ船に乗りし日より數ふればみそかあまり九日になりにけり。今は和泉の國に來ぬれば海賊ものならず。

二月朔日、わしたのま雨降る。午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出で、漕ぎ行く。海のうへ昨日の如く風浪見えす。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに、貝のいろは蘇枋にて五色に今ひといろぞ足らぬ。この間に今日は箱の浦といふ所より綱手ひきて行く。かく行くわひだにある人の詠める歌、

「玉くしげ箱のうらなみた、ぬ日は海をかみとたれか見ざらむ」。

又船君のいはく「この月までなりぬること」と歎きて苦しきに堪へずして、人もいふこと、て心やりにいへる歌、

「ひく船の綱手のながき春の日をよそかいかまでわれはへにけり」。

聞く人の思へるやう、なぞたゞごとになると密にいふべし。「船君の辛くひねり出してよしと思へる事をえしもこそまゐへ」とてつゝめきてやみぬ。俄に風なみたかければとゞまりぬ。二日、雨風止まず。日ひとひ夜もすがら神佛をいのる。

三日、海のうへ昨日のやうなれば船いださず。風の吹くことやまねば岸の浪たちかへる。こ

れにつけてよめる歌、

「緒をよりにかひなきものは落ちつもる涙の玉をぬかぬなりけり」。

かくて、今日ぬ暮れぬ。

四日、楫取「けふ風雲のけしきはなはだあし」といひて船出さずなりぬ。然れどもひねもすに浪風たゝす。この楫取は日も得計らぬかたぬなりけり。この泊の濱にはくさぐさの麗しき貝石など多かり。かゝれば唯昔の人をのみ戀ひつゝ、船なる人の詠める、

「よする浪うちも寄せなむわが戀ふる人わすれ貝おりてひろはむ」

といへれば、ある人堪へずして船の心やりによめる、

「わすれ貝ひろひしもせじ白玉を戀ふるをだにもかたみと思はむ」

となむいへる。女兒のためには親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけむをと人いはむや。されども死にし子顔よかりきといふやうもあり。猶おなじ所に日を経ることを歎きて、ある女のよめるうた、

「手をひで、寒さも知らぬ泉にぞ汲むとはなしに日ぞろ經にける」。

五日、けふ辛くして和泉の灘より小津のとまりをおふ。松原めもはるばるなり。かれこれ苦しければ詠めるうた、

「ゆけどなは行きやられぬはいもがらむをつの浦なるさしの松原」。

かくいひつゝくる程に「船疾くこげ、日のよきに」と催せば楫取船子どもにいはく「御船より

仰せたぶなり。あさぎたの出で來ぬさきに綱手はやひけ」といふ。この詞の歌のやうなるは
 楳取のおのづからの詞なり。楳取はうつたへにわれ歌のやうなる事いふともあらず。聞く
 人の「あやしく歌めきてもいひつるかな」とて書き出せばげに三十文字あまりなりけり。
 今日浪なたちそと、人々ひねもすに祈る志るしありて風浪たゝす。今し鷗むれ居てあそぶ所
 あり。京のちかづくよるこびのあまりにある童のよめる歌、

「いのりくる風間と思ふをあやなくに鷗さへだになみと見ゆらむ」

といひて行く間に、石津といふ所の松原おもしろくて濱邊遠し。又住吉のわたりを漕ぎ行
 く。ある人の詠める歌、

「今見てぞ身をば知りぬる住のえの松よりさきにわれは經にけり」。

こゝにむかしつ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

「住の江に船さしよせよわすれ草煮るしありやとつみて行くべく」

となむ。うつたへに忘れなむとはあらで、戀しき心ちまばしやすめて又も戀ふる力にせ
 むとなるべし。かくいひて眺めつゞくるあひだに、ゆくりなく風吹きてこげどもこげどもま
 りへまどきにまどきてほとほとしくうちはめつべし。楳取のいはく「この住吉の明神は例の
 神ぞかし。ほしきものぞおはすらむ」とは今めくものか。さて「幣をたてまつり給へ」といふ
 にまたがひてぬさたいまつる。かくたいまつれどももはら風やまで、いや吹きにいや立ちに
 風浪の危ふければ楳取又いはく「幣には御心のいかねば御船も行かぬなり。猶うれしと思ひ

たぶべき物たいまつりたべ」といふ。又いふに従ひて「いかゞはせむ」とて「眼もこそ二つあ
 れ。たゞ一つある鏡をたいまつる」とて海にうちはめつればいとくちをし。さればうちつけ
 に海は鏡のごとなりぬれば、或人のよめるうた、

「ちはやぶる神のこゝろのふる、海に鏡を入れてかつ見つるかな」。

いたく住の江の忘草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。日もうつらうつら鏡を神の心を
 こそは見つれ。楳取の心は神の御心なりけり。

六日、濬標のもとより出で、難波につぎきて河尻に入る。みな人々女おきなひたひに手を
 あて、喜ぶこと二つなし。かの船酔の淡路の島のおほい子、都近くなりぬといふを喜びて、
 船底より頭をもたげてかくぞいへる、

「いつしかといふせかりつる難波がた蘆こぎそけて御船きにけり」。

いとおもひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に心ちなやむ船君いたくめで
 「船酔したうべりし御顔には似ずもあるかな」といひける。

七日、けふは川尻に船入り立ちて漕ぎのぼるに、川の水ひて惱みわづらふ。船ののぼること
 いと難し。かゝる間に船君の病者もとよりこちこちしき人にて、かうやうの事更に知らざり
 けり。かゝれども淡路のたうめの歌にめで、みやこぼこりにもやあらむ、からくしてあや
 しき歌ひねり出せり。そのうたは、

「きときては川のほりえの水をあさみ船も我が身もなづむけふかな」。

これは病をすればよめるなるべし。ひとりたにことの飽かねば今ひとつ、

「とくと思ふ船なやますは我がために水のこゝろのあさきなりけり」と。

この歌は、みやこ近くなりぬるよろこびに堪へずして言へるなるべし。淡路の御の歌におとれり。ねたき、いはざらましものをとくやしがるうちによるになりて寝にけり。

八日、なほ川のはとりになづみて、鳥養の御牧といふほとりとまゐる。こよひ船君例の病起りていたく惱む。ある人あさらかなる物もてきたり。よねしてかへりごとす。男ども密にいふなり「いひぼしてもてる」とや。かうやうの事所々にあり。今日節みすればいをもちぬす。

九日、心もとなさに明けぬから船をひきつゝのぼれども川の水なければぬざりにのみぬぎる。この間に和田の泊りのあかれのところといふ所あり。よねいをなごこへばおこなひ待つ。かくて船ひきのぼるに渚の院といふ所を見つゝ行く。その院むかしを思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には松の木どもあり。中の庭には梅の花さけり。こゝに人々のいはく「これむかし名高く聞えたる所なり。故惟喬のみこのおはん供に故在原の業平の中將の「世の中に絶えて櫻のさかざらは春のこゝろはのどけからまし」といふ歌よめる所なりけり。今興ある人所に似たる歌よめり、

「千代へたる松にはあれどいにしへの聲の寒さはかはらざりけり」。
又ある人のよめる、

「君戀ひて世をふる宿のうめの花むかしの香にぞなほにはひける」

といひつゝ、ぞ都のちかづくを悦びつゝのぼる。かくのぼる人々のなかに京よりくだりし時に、皆人子どもなかりき。いたれりし國にてぞ子生める者どもありあへる。みな人船のとまゐる所に子を抱きつゝ、おりのりす。これを見て昔の子の母かなしきに堪へずして、

「なかりしもありつゝ、歸る人の子をありしもなくてくるが悲しさ」

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きていかゞあらむ。かうやうの事ども歌もこのむとてあゝるにもあらざるべし。もろこしもこゝも思ふことに堪へぬ時のわざとか。こよひ宇土野といふ所にとまゐる。

十日、さはることありてのぼらす。

十一日、雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに東のかたに山のよこをれるを見て人に問へば「八幡の宮」といふ。これを聞きてよろこびて人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。こゝに相應寺のほとりに、しばし船をとめてとかく定むる事あり。この寺の岸のほとりに柳多くあり。ある人この柳のかげの川の底にうつれるを見てよめる歌、

「さゝれ浪よするあやをば青柳のかげのいととして織るかどぞ見る」

十二日、山崎にとまれり。

十三日、なほ山崎に。

十四日、雨ふる。けふ車京へとりにやる。

十五日、今日車ゐてきたれり。船のむつかしさに船より人の家にうつる。この人の家よろこ

べるやうにてあるじきたり。このあるじの又あるじのよきを見るに、うたておもほゆ。いろ
いろにかへりごとす。家の人のいで入りにくげならずるや、かなり。

十六日、けふのようさりつかた京へのぼるついでに見れば、山崎の小櫃の繪もまがりのおほ
ちの形もかはらざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに島坂に
て人あるじきたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちてゆきし時よりはくる時ぞ人はと
かくありける。これにも^{はな}かへりごとす。よるになして京にはいらむと思へば、急ぎしもせ
ぬ程に月いでぬ。桂川月あかきにぞわたる。人々のいはく「この川飛鳥川にあらねば、淵瀬更
にかはらざりけり」といひてある人のよめる歌、

「ひさかたの月におひたるかつら川そこなる影もかはらざりけり」。

又ある人のいへる、

「あまぐものはるかなりつる桂川そでをひで、もわたりぬるかな」。

又ある人よめる、

「桂川わがこゝろにもかよはねどおなじふかさはながるべらなり」。

みやこのうれしきあまりに歌もあまりぞおほかる。夜更けてくれば所々も見えず。京に入り
立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしより
もましていふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中
垣こそあれ、ひとつ家のやうなればのぞみて預れるなり。さるはたよりごとくに物も絶えず得

させたり。こよひかゝること、聲高にもものいはず、いとほつらく見ゆれど志をばせむと
す。さて池めいてくぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに千年や
過ぎにけむ、かた枝はなくなりけり。いま生ひたるぞまじれる。大かたの皆あれにたれば、
「あはれ」とぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子のも
ろともに歸らねばいかはかなしき。船人も皆子^いだかりてのゝしる。かゝるうちに猶かな
しきに堪へずして密に心知れる人といへりけるうた、

「うまれしもかへらぬものを我がやどに小松のあるを見るがかなしき」
とぞいへる。猶あかずやあらむ、またかくなむ、

「見し人の松のちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや」。

わすれがたくくちをしきことおほかれどえつくさず。とまれかくまれ疾くやりてむ。

土佐日記 終

蜻蛉日記

蜻蛉日記卷上

かくありし時過ぎて村上天皇世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで世に經る人ありけり。かたちとても人にも似ずたまたまたましひもあるにもあらで、かうものゝやうにもあらであるもとほりと思ひつゝ唯臥し起き明し暮すまゝに、世の中におほかたほふる物語のはしなどを見れば世に多かるそらごとだにあり。人にもあらぬ身の上までうゆきき日記して珍しきさまにもありなむ。天下の人のまなたりかきやとはむためしにもせよかしと覺ゆるも過ぎにし年月ごろの事もおぼつかなかりければ、さてもありぬべき事なむ多かりける。さてあのけけけかりしききごといいもの、それはそれとしてかははぎの木高きわたりきよりかくいはせむと思ふ事ありけり。例の人はあないする便もしはなま女などしていはする事こそわれ。此は親おほおほしき人にたはぶれにもまめやかにほのめかし、に、ひけきことしいいひつぎをも知らずがほに、馬にはひ乗りたる人して打ちた、かす。たれなどいはするはおぼつかななからず騒いたれば、もて煩ひ取り入れてもて騒ぐ。みなははかみなども例のやうにもあらず、いたらぬ所なしと聞きふるしたる手もあらじと覺ゆるささであしければ、いとぞあやしき。ありける事は、

「音にのみ聞けばかなしなほとゝぎすことかたらむと思ふこゝろあり」とばかりぞある。いかにかへり事はすべてはやあるなどさだむるほどに、かたむかなる人ありて猶とかしこさかりてこらかすれば、

「かたらはむ人あきさごとにはとゝぎすかひなかるべきことなるしそ運掛これ運掛を初めにて、またまたもおとすれどかへりごともせざりければ、

「おぼつかかな音なき瀧のみづなれやゆきかへも知らぬ瀬をぞ尋ぬる」これを今これよりといひたれば知れたるやうなり。やがてかくぞある、

「人知れずいまやいまやと待つほどにかへりこぬこそ侘しかりけれ」とありければ、例の人類聚か類聚しこし。をさをさしきやうにも聞えむこそよからめ」とて、さるべき人してあるべきに書かせてやりつ。それをしもまめやかにうち喜びて繁う通はず。又そへたる文見れば、

「濱千鳥あともなぎさにふみ見ればわれをこす波うちやけつらむ」。この度も例のまめやかなるかへりごととする人われは紛はしつ。又もあり。「まめやかなるやうにてあるもいと思ふやうなれど、このたびさへ無うばいとつらうもあるべきかな」などまめや類聚文のはしに書きて添へけり。

「いづれともわかぬ心はそへたれどこたびはさきに見ぬ人のがり」とあれば例の紛はしつ。かたればまめなる事にて月日は過ぐしつ。秋つ方になりけり。そ

へたる文に心さかしらついたるやうに見えつるうさ運掛になむねんじつれどいかなるにかあらむ。

「まかの音も聞えぬ里に住みながらわやしく逢はぬ目類聚も見るかな」とあるかへりごと、

「高砂のをのへわたりにすまふともまかさめぬべきめとは聞かぬを」。げにわやしのことやとばかりなむ。又程経て、

「あふ坂の關やなになり近けれど越えわびぬればなげきてぞ経る」かへし、

「越えわぶるあふ坂よりも音に聞くなこそを辭かたき關とまらなむ運掛などいふ。まめ文かよひかよひて、いかなるあしたにかありけむ、

「夕ぐれの流れくるまをまつほどになみだおほるの川とこそなれ」。かへりごと、

「思ふこと大井の川の夕ぐれはころも然にもあらずなかれこそすれ」。又三日ばかりのあしたに、

「まのゝめにおきけるそらにおもほえで怪しく露と消えかへりつる」かへし、

「さだめなく消えかへりつる露よりもそらだのめするわれは何よ類聚かり」

かくてあるやうありてまばし旅なる所にあるにものしてつとめて「今日だにのどかと思ひつるを、びなげなりつれば。いかにぞ身には山がくれとのみなむ」とあるかへりごとにて、た

「思はえぬかき波にをれば撫子のはなにぞつゆはたまらざりけりか」
などいふ程に九月になりぬ。つどもりがたにしきりて二夜ばかり見えぬほど文ばかりあるかへりごとに、

「消えかへる露もまだひぬ袖の上に今朝はしぐる、空もわりなし」。
たちかへり、かへり事、

「おもひやる心の空になりぬれば今朝時雨ると見ゆるなるらむ」
とて、かへり事書きあへぬほどに見えたり。又ほどへて見えをこたるほど、雨など降りたる日ぐれに「來む」などやありけむ、

「かしはぎの杜の百草くれごとになはたのめとやもるを見る見る」
かへり事はみづから來て紛はしつ。かくて十月になりぬ。こゝにもものいみなるほどを心もとなげにいひつ、

「なげきつゝかへす衣のつゆけきいと、空さへしぐれ添ふらむ」
かへし、いとふるめきたり。

「思ひあらばひなましものをいかでかは返す衣のたれもぬるらむ」

とあるほどに、わがたのもしき人繪巻みちのくにへ出で立ちぬ。時はいとあはれなるほどなり。人繪巻はまだ見馴るといふべきほどにもあらず。見ゆることはたゞささ繪巻しくめるにのみあり。いと心細く悲しきことに似ず。見る人もいと哀に忘るまじきさまにのみ語らふめれど、人の心はそれに従ふべきかはと思へば、唯ひとへに悲しう心ほそき事をのみ思ふ。今はとて皆出で立つ日になりて行く人もせきあへぬまであり。きままる人はた況いていふ方なく悲しきに、時違ひぬるといふに繪巻でもえ出でやらず。又みなる硯に文をおし巻きてうち入れて、又ほろほろとうち泣きて出でぬ。まばしは見む心もなし。みいではてぬるにためらひてより繪巻何事ぞと見れば、

「君をのみたのむたつかなるこゝろには行く末遠くおもほゆるかな」
とぞある。見るべき人繪巻見よとなめりとさへ思ふにいみじう繪巻ありて、ありつるやうにおきて、とばかりあるほどにものしたり。目も見合せ思ひいりてあれば「なかよのつねのよこそあれ。いとかうしもあるはわれを頼まぬなめり」などあへしらひ硯なる文を見つけて「哀」といひて、門出の所に、

「我をのみたのむといへばゆくすゑのまつ千代をもきみこそは見め」
となむ。かくて日の経るまゝに旅の空を思ひやるだちがいとあはれなるに、人繪巻の心もいとたのもしげには見らん繪巻すなむありける。まはすになりぬ。横河にもものするとありて上りぬ。人「雪に降りこめられていと哀れに戀しき事多くなむ」とあるにつけて、

「氷るらむよかはの水に降る雪もわがごとく消えてものは思はじ思はじなどいひてその年はかなく暮れぬ。」正月正月ばかりに二三日見ぬ程にもへ渡らむとて「人こば取らせよ」とて書き置きたる、

「知られぬば身を鶯のふりいでつゝなきてこそ行け野にもやまにもかへりごとあり、

「うぐひすのわたにて行かむ山くかにもなく聲聞かば尋ねばかりぞ」などいふうちよりなほもあらぬことありて春夏なやみ暮して、八月つごもりにとかうものしつしつ。その程の心ばへしも懇なるやうなりけり。さて九月ばかりになりていでにたるほどに箱のゐるを手まさぐりにあけて見れば、人のもとにやらむとまける文あり。あさましさに見てけりとだにしられむと思ひて書きつく。

「うたがはしほかに渡せるふみ見ればこゝとだえにならむとすらむ」など思ふほどに、心えなう十月つごもり方に三よまきりて見えぬ時あり。つれなうてしばし試みるほどになどけしきあり。これより夕さりつかた「うちのかたるまじかりけり」とて出へがるに心をはて人をつけて見すれば「まちの小路なるそこそになむとまり給ひぬる」とて來たり。さればよといみじう心愛しと思へどもいはむやうも知らである程に、二三日ばかりありてあかつきがたに門も叩く時あり。さなめりしと思ふに、憂くてわけさせねば、例の家とおぼしき所にもものしたり。つとめて猶もあらじと思ひて、

「歎きつゝ一人ぬる夜の明くるまはいかに久しきものとかは知る知ると例よりはひきつくるひて書きて、うつろひたる菊にさしたり。かへりを明くるまでも試みむとしつれど、とみなるめし使の來あひたりつればなむ。いとことわりなりつるは、

「げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸に遅くわくるは陀しかりけり。

さてもいとあやしかりつるほどにことなしびたる、しばしは忍びたるさまにこうぢに「などいひつゝぞあるべきをいとしう心つきなく思ふ事を限りなきや。』年かへりて三月三月ばかりにもなりぬ。桃の花などやとり設けたりけむ。待つに見えず。今一かたも例は立ちさらぬ心に今日を見えぬ。さて四日のつとめてぞ皆見えたる。「夜べより待ちくらしたるものども猶あるよりは」とて、こなたかなたとり出でたり。志ありし花を花をとおみとおみうちの方よりあるを見れば、心たいにしもあらで手ならひにしたり。

「待つほどのきのふ過ぎにし花のえは今日折る事ぞかひなかりける」

と書きて、よしやくききにと思ひてかくしつるけしきを見て、ばひとりて返しきたり。

「みちとせをみつべきみには年毎にすくにもあらぬ花と知らせむ」とあるを今一夜だにも聞きて、

「花によりすくてふ事のゆゝしきによそながらにて暮してしなり」。かくて今はこのまぢの小路にわざと色に出でにたり。本は人をだにあやし悔しと思ひげなる時がちなり。いふ方なうころころが憂しと思へどもなにわざをかせむ。この今一かた今一かたのいで

入りするを見つゝあるに、今は心安かるべき所へとてゐてわたす。とまる人まして心ぼろし。影も見えがたかべい事などまめやかに悲しうなりて、車寄するほどにかくいひやる。

「なかかゝる歎きはまげさまさりつゝ、人のみかゝる宿となるらむかへりごとは男ぞしたる。」

「思ふてふ我が言の葉をわだびとのしげきなげきにそへてうらむな」

などいひ置きて皆わたりぬ。思ひしもしるく只ひとり臥し起きず大ひたの世のうちあはぬことはなければ唯人の心の思はずなるを、我のみならず、年ごろの所にも絶えにたなりと聞きて、文など通ふ事ありければ五月三四日のほどにかくいひやりぬ、

「底にさへよかるといふなるまこも草いかなるさと根をとむらむ」
かへし、

「まこも草刈るとは淀のさはなれや根をとむらむてふ澤はそことか」

六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたらす。見出して獨言に、

「我が宿のなげきのしたは色ふかくつろひにけりながめふるまに」

などいふほどに七月になりぬ。絶えぬと見ましかばかりに來るには勝りなましなど思ひ續くるをりに、物したる日あり。物もいはねばさうざうしげなり。前なる人ありし下葉の事を物の序にいひ出でたれば聞きてかくいふ、

「をりならで色つきにけるもみぢ葉はとぎにあひてぞいらまさりける」

とぞ書きつくる書きつくる辭。かくあり續き絶えずはくれども、心のとくる夜なさに、荒れ勝りつゝ來ては氣色悪しければ、たふるゝにたち山と立ち歸る時もあり。近き隣に心ばへ知れる人出づるに合せてかくいへり、

「藻鹽やく烟の空に立ちぬるはふすべやまつるくゆる思ひに」

などとたり。さかしらするさかすべかはして、この頃は殊に久しう見えす、たなりし折はさしもあらざりしを、かくころあかかくがれていかなるものとうか置きたるものと見えぬ癖なむありける。かくて止みぬらむそのものと思ひ出づべきたよりだになくぞありけるかしと思ふに、十日ばかりありて文あり。なにくれといひて「帳の柱にゆひつけたりし小弓の矢取りて」とあれば、これぞありけるかしと思ひて解きおろして、

「思ひ出づる時もあらじとおもへども後やといふにこそ驚かれぬる也」

とてやりつ。かくて絶えたるほど我が家はうちより参りまかづる道にしてあれば、夜なか曉とうちしはぶきてうち渡るも聞かじといへどもうちとけたるいも寝られず。夜長うしてねぶる事なければ、さながらと見聞く心ちは何にかは似たる。今はいかで見さかすだにありにしがなと思ふに「昔すきごとせし人も今はおはせずとか」など人につきて聞えごつを聞くを、ものしうのみ覺ゆれば、日くればなしうのみ覺ゆ。子供あまたありと聞く所もむげに絶えぬと聞くあはれましていかばかりと思ひてとぶらふ。九月ばかりの事なりけり。あはれなど書きて、

「吹く風につけてもとはむさゝがにの通ひしみちは空に絶ゆとも」
かへり、殊にこまやかに、

「色かはるこゝろと見ればつけてとふ風ゆゝしくも思はゆるかな」とぞある。かくて常にしもえいななはて、時々見えて冬にもなりぬ。臥し起きは唯幼き人ももて遊びて「いかにして網代の氷魚にこととはむ」とぞ心にもあらでうちいはる。『年また越えて春にもなりぬ。この頃讀んかともてありく文、取り忘れて蟻んなを取りにおこせたり。包みてやる紙に、

「ふみおきしうらも心もあれたればあをととめぬ千鳥なりけり」
かへり事をさかしらに立ちかへり、

「心あるとふみかへすとも濱千鳥うらにのみこそあとはとめぬ」
つかひあれば、

「濱千鳥あとのとまりを尋ねとてゆくへも知らぬうらみをやせむ」
などいひつゝ、夏にもなりぬ。この時の所に子生むべきほどになりてよきかたはこひて、一つ車に這ひ乗りて、ひとときやう戀を續きていと聞きにくさまでの、しりて「このかどの前よりしもわたるものか。我は我にもあらず、物だにいはねば見る人仕ふより始めて、いと胸痛きわざか。世に道しもこそはあれ」などいひ罵るを聞くに、たがし死ぬるものにもがなと思へどころかにしかなはねば今よりのち猛くはあらずとも絶えて見えすだにあらむ、いみじう心を

がしと思ひてあるに、三四日ばかりありて文あり。あさましうつへたましと思ふ思ふ見れば、「この頃こゝにわづらはるゝ事ありて見参らぬを昨日なむたひらかにものせられぬ。けがらひもや忌むとてなむ」とぞある。あさましうめづらかなる事限なし。たゞ「賜はりぬ」とてやりつ。使こが人間ひければ「男君になむ」といふを聞くにいと胸ふさがり。三四日ばかりありてみづからいともつれなく見えたり。何か來たるとて見入れねば、いとはしたなくて歸ること度々になりぬ。七月になりてすまひの頃古き新しきと一くだりづゝ引き包みて「これせさせ給へ」とてはあるものか。見るに目くるゝ心ぞする。古代の人は「あないとほし。よかしこにはえ仕らまつらすこそはあらめ」。なま心ある人などさし集りて「すゝろはしや。えせでわるからむをだにこそ聞かめ」など定めてかへしやりつるもしるく、こゝかしこになむもてちりてすると聞く。かしこにもいと情なしとかやあらむ。二十よ日普づれもなし。いかなるをりにかあらむ、文ぞある。「参りこまほしけれどつゝましようてなむ。たしかにことあらばおづおづも」とあり。かへり事もすまじと思ふもこれかれ「いと情なし。あまりなり」などものすれば、

「ほに出でゝいはじやさらにおほよその靡く尾花に任せても見む」
たちかへり、

「ほに出でばまづ靡きなむ花すゝきこちてふ風の吹かむまにまに」
使われば、

「嵐のみ吹くめる宿にはなすき穂に出でたりとかひやなからむ」
など、よろしういひなして又見えたり。せぎいの花いろいろに咲き亂れたるを見やりて臥し
ながらかくぞいはるゝ、かたみに恨むるさまのことゝもあるべし、

「百草に亂れて見ゆるはなの色は置くまら露のおくにやあるらむ」
とうちいひたれば、からずかくいふ、

「身のあきを思ひ亂るゝ花の上のうちこのゝろはいへばさらなり」

などいひて、例のつれなうよふ寝ぬまの月の山の巖出づるほどに出でむとするけかか
きあり。さまでもありぬべき夜かなと思ふけしきや見えけむ、」とまりぬべき事あらば「など
いへどさしも覚えねば、

「いかにせむ山の端にだにとゞまりてこゝろも空に出でむ月をば」
かへし、

「久方の空にこゝろの出づといへば影はそらにもとまるべきかな」

とてとゞまりにけり。さて又のわきのやうなることとして二日ばかりありて來たり。「一日の
風はいかにとどむ。例の人とはとひてまし」といへばげにとや思ひけむ、ことなし。

「言の葉は散りもやするとゞめ置きて今日はみからもとふにやはあらぬ」
といへば、

「散りきてもとひぞ去てまし言の葉をこちはさばかり吹きしたよりに」。

かくいふ、

「こちといへばおほろふなりし風にいでつけてはとはむわたらなだてに」。
まけじ心にて又

「散らさじとをしみ置きける言の葉をきながらだにぞ今朝はとはまし」。

これはさもいふべしとや人ことわりけむ。又十月ばかりにそれはしもやんどなき事あり
とて出でむとするに、時雨といふばかりにもあらず、あやにくにあるに猶出でむとす。あさ
ましさにかくいはる、

「ことわりのをりとは見れど小夜更けてかくは時雨の降りははつべき」。

といふに、強ひて人あらしむやは。『らからやうなるほどに、かのめでたき所には子産みてしよ
りすさまじげになりてたべかめれば人にくかりし心思ひしやは、いのちはあらせで我
が思ふやうにおし返しものを思はせばやと思ひしをさやうになりそめていて、はてはうみの
ゝしりし子さへ死ぬるものは、そんなうのひかみたりしみ子の落したねなり。いふかひなく
わろき事限りなし。唯この頃の知らぬ人のもて騒ぎつるにかゝりてありつるをにはかせ
にかくなりぬれば、いかなるうにちかはしけむ。我が思ふには今少しうちまさりて歎くら
むと思ふに今に胸はあきたる。今ぞ例の所にうちはらひてなど聞く。されどこゝには例のほ
どにぞ通ふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふほどに、こゝなる人かたことなどする
ほどになりてぞある。いへとは必「今來む」といふを聞きもたりてまねびありてか。かくて

又心の解くるにはなくなけあがる、みかなまかさかしとかなどする人は、若きつがそらになどかく
てはいふ事もあれど、人はいとつれなう、我やあしきなどうらもなう、罪なきさまにもてな
いたれば、いかゞはすべきなど萬に思ふ事のみ繁さを、いかでつぶつふといひしらするもの
にもがなと思ひ亂る、時、心づきななきや、胸うちさめ替わつてもいはいれずのみあり。なほ書き
ついでにも見せむと思ひて、

「おもへたゞ	むかしもいまも	わがこゝろ	のどけからでや
はてぬべき	みそめしあきは	ことの葉の	うす曇いろにや
うつろふと	なげきのまたに	なげかれき	ふゆはくもぬに
わかれゆく	いとををしむと	はつしぐれ	くもりもあへず
降りそほち	こゝろほそくは	ありしかど	きみにはしもの
わするなと	いひおきつとか	聞きしかば	さりともと思ふ
ほどもなく	とみにはるけき	わたりにて	白てはもばかり
ありしかば	こゝろそらにて	経しほどに	きみみづも霞き
絶えにけり	またふるさとに	かりがねの	歸るつらにはやと
おもひつゝ	ふれどかひなし	かくしつゝ	我が身むなしく
せみの羽の	いまでもひとの	うすからず	なみだのかはの
はやくより	かくあさましき	そらゆゑに	ながるゝことも

絶えねども	いかなるつみか	おもるらむ	ゆきもはなれず
かくてのみ	ひとのうき瀬に	たゞよひて	つらきこゝろは
水のあわの	消えば消えなむと	おもへども	かなしきことは
みちのくの	つゝじのをかの	くまつゝじ	くるほどをだに
またでやは	はする <small>時を絶ゆべき</small>	あふくまの	あひ見てだにと
おもひつゝ	なげくなみだの	ころも手に	かゝらぬ世にも
經べき身を	なぞやと思へど	あふばかり	かけはなれては
まかすがに	こひしかるべき	からごろも	うち着てひとの
うらもなく	なれしこゝろを	おもひては	うき世をされる
かひもなし	おもひ出でなき	われ例やせむ	と思ひかく思ひ
おもふまに	やまとつもれる	まきたへの	まくらのちりも
ひとりねの	かすにしとらは	つきぬべし	なにか絶えぬる
たびなりと	おもふものから	かせ吹きて	ひと目も見えじ
あまぐもは	かへりしときの	なぐさめに	今こむといひし
ことの葉を	さもやとまつ	みとりごの	たえずまねぶも
聞くごとに	ひとわろくなる	なみだのみ	わが身をうみと
たゞへても	みるめもよせぬ	みその浦は	かひもあらじと

知りながら　いのちあらばと　たのめこし　ことばかりこそ
まらなみの　たちもよりこば　問はまほしけれ

と書きつけて二階の中に置きたり。例のほどにものしたれどそなたにも出でずなどあれば、
居わづらひてこの文ばかりをとりて歸りにけり。さてかれよりかくぞある、

「折りそめし	ときのもみぢの	さだめなく	うつろふいろは
さのみに苔	逢ふあきごとに	常ならぬ	なげきのしたの
木の葉には	いとしいひ置く	はつしもに	ふかきいろにや
なりにけむ	おもふおもひの	絶えもせず	いつしかまつの
みどり子を	行きては見むと	するがなる	田子のうらなみ
立ちよれど	ふじのやまへの	けぶりには	ふすぶることの
絶えもせず	あまぐもとのみ	たなびけば	絶えぬ我が身は
まらいと	まひくるほどを	おもはじと	あまたのひとの
せにすれば	身ははしたかの	すゝろにて	なつくるやどの
なければぞ	ふる <small>（おぼ）</small> にかへる	まにまには	飛びくれが事の
ありしかば	ひとりふすまの	とこにして	寝ざめのつきの
真木の戸に	ひかりのこさず	もりてくる	かげだに見えず
ありしより	うとむこゝろぞ	つきそめし	たれかよづまと

あかしけむ	いかなるいろの	おもきぞと	いふはこれこそ
つみならし	とはあふくまの	あひも見で	かゝらぬひとに
かゝれかし	なにのいは木の	身ならぬ <small>（おぼ）</small>	おもふこゝろも
いさめぬに	うらのはまゆふ	いくかさね	いかだてはてつる
からころも	なみだのかはに	そぼつとも	おもひしいでば
たきものゝ	この目ばかりは	かわきなむ	かひなきことは
甲斐のくに	つみのみ <small>（おぼ）</small> に	荒るゝ馬の	いかでかひとは
かけとめむと	おもふものから	たらちねの	親と知るらむ
かたかひの	こまやこひつゝ	いなかせむと	おもふばかりぞ
あはれなるべき			

とか。使わればかくものす、
「なつくべき人も放てばみちのくのうまやかぎりにはらむとすらむ」。
いかい思ひけむたちかへり、
「われがなををふりかしの駒のあればこそなつくにつかぬ身とも知られぬ」。
かへ、しました、
「こまぞ信げになりまさりつゝなつけぬをこ繩絶えずぞ頼み來にけり」。
又、かへし、

「白川の關のせけばやこまうくてあまたの日をばひき渡りつる」。あさてばかりは逢坂とぞある。時は七月五日のこと、ながき物忌にさし籠りたるほどに、かくわりしかへりごとには、

「天の河七日を契るこゝろあらばはしあひばかりのかけを見よとや」。

ことはか振りにもや思ひけむ思ひ。すこし心をとめたるやうにて月月になり行く。』めざましと思ひし所所は今は天下のあぎを玄騒ぐと聞けば思ひ心安し。むかしよりの事をばいかはせむ。堪へがたくとも、我が宿世の意にこそあめれなど心をちいに思ひなしつゝあり。経るほどに、少納言の年経て、よつのまなになりぬれば、殿上もおりて、つかさめしにいとぬぢけたるをのゝ大輔など、いはれぬれば、世の中をいとうとましげにて、こゝかしこ通ふより外のありきなどもなければ、いとのとかにて二三日などあり。さてかく心もゆかぬつかさのかみの宮よりかくのたまへり、

「みだれ糸のつかさ一つになりてしもくる事など絶えにたるらむ」。御かへり、

「絶ゆといへばいとぞ悲しき君により同じつかさにくるかひもなく」。又立ちかへり、

「夏引のいとことわりやふためみめよりありくまに程の経るかも」。御かへり

「泣くばかりありてこそあれ夏引のいとまやはなき一目二目に」。又宮より、

「君と我猶まらいとのいかにしてうきふしなくて絶えむと思ふ。ふためみめはげに少くしてけり。いみわれは心安しとゞめつ」とのたまへる御かへり、

「世をふとも契りおきてし中よりはいとゞゆゝしき事も見ゆらむ」と聞えらる。その頃五月二十日よるばかりより四十九日の忌たがへむとて、ありたれありきの所にわたりたるに、宮たゞ垣をつかだつかだる所にわたり給ひてあるにみな月ばかりかけて雨いたう降りたるに、たれも降りこめられたるなるべし。こなたにはあやしき所なればもりぬるさわざをするに、かくのたまへるぞいとゞものくるほしき、

「つれづれのながめのうちにそゝぐらむことのすぢこそをかしかりけれ」。かへり、

「いづこにもながめのそゝぐろなれば世にふる人はのどけからじを」。又、のたまへり、「のどけからじとか、

天の下騒ぐこゝろもおほみづにたれもこひ路にぬれざらめやは」。御かへり、

「世とともにかつみる人の戀路をもほす世あらじと思ひこそやれ」。又、宮に、

「しりかもぬ君はぬるらむつねに住むところには又戀路だになし。

さもけしからぬ御さまかな」などいひつゝ諸共に見る。あまゝに例の通ひ所にもしたる日例の御文あり。「おはせず」といへば「猶とのみのたまふ」として入れたるを見れば、

「とこなつに戀しきことや慰みほむきみがかきほに折ると知らずや」。

さてもかひなければまかりぬるとにやある。』さて二日ばかりありて見えたれば、「これさてなむありし」とて見すれば、「程經にければびんなし」として「唯この頃は仰せごともなきこと」と聞えられたれば、かくのたまへる、

「水増りうらもなきさのころなれば千鳥のあとをふみはまどふる

ところぞ見つれ。うらみ給へりあはれわりなき。みづからとあるは誠か」と女手にかき給へり。男の手にてこそ苦しけれ。

「浦がくれ見ることかたき跡ならば汐干をまたむからきわざかな」。

又、宮、

「うらもなくふみやる跡をわたつ海の汐の干るまも何にかはせむ
とこそ思ひつれ。ことさまにもはた」とあり。かゝるほどにむらひのほども過ぎぬらむ。たなばたは明日ばかりと思ふ。忌も三十日ばかりになりたり。日頃なやましうしてあはれあはぶきなどいたうせらるゝを物のけにやあらむ。加持も試みむ。せばあはれ所のわりなく暑きころなるを、水あはれいもものする山寺へ上る。十五六日になりぬればほどにするほどになりけり。

見ればあやしきさまに荷ひいたゞき、さまさまにいそぎつゝ集まるを諸共に見て、あはれがりも笑ひもす。さて心ちもことなることなくて忌も過ぎぬれば京に出でぬ。秋冬はかなう過ぎぬ。』年あはれ講かへりてあはれでふこともなし。人の心のことなる時は、萬おいらにかぞわりける。このついたちよりを殿上ゆるされてある。みそぎの日例の宮より物見ければその車に乗らむとのたまへり。御文の端にかゝる事あり、

「わがとしの ほんのにかく」。

例の宮にはおはせぬなりけり。まちの小路わたりかとしてまゐりたれば「上なむおはします」といひけり。まつ硯こひてかく書きて入れたり、

「君がこのまちの南にとみにおそきはるにはいまだたづねまゐれる」

とて諸共に出で給ひにける。』そのころはひすぎても例の宮にわたり給へるに、まゐりたればこども見しに花おもしろかりき。薄むらむら茂りていとほそやかに見えければ「これ堀りわかたを給給はすし給はらむ」と聞えおきてしを、程へて河原へものするに、諸共なれば「これぞかの宮かし」などいひて、人を入る。まゐらむとするに「をりなきるあはれのわれからなむ。一日とりまうす。薄聞えてとさぶらはむ人にいへ」として引き過ぎぬ。はかなきわらべなれば、ほどなくかへりたるに「宮よりすゝき」といへば、見れば、なりかびつといふものにはうるはしう堀りたて、青き色紙に結びついたり。見ればかくぞ、

「ほに出では道ゆく人も招ぐべきやどのすゝきをほるがわりなきは」。

いとをかしうもこの御かへりはいかゞ。忘るゝほど思ひやればかくてもありなむ。されどさきざきもいかゞとぞ覺えたるかし。元禄春うち過ぎて夏ごろとのえがちなるうちずみにつとめて一日ありてくるれば参りなどするをあやしうと思ふに、ひぐらしの初聲聞えたり。いとあはれと驚かれて、

「あやしくもよるの行くへを知らぬかな今日ひぐらしの聲は聞けども」

といふに出でがたかりけむ難し驚かし。かくてなでふ事なければ、人の心を猶たゆみなたり舞舞にたり。月夜の頃よからぬ物語して、あはれなるさまのこといも語らひてもありしころ思ひ出でられてものしければかくいはる、

「くもりが夜の月と我が身の行く末のおぼつかならぬはいづれまされり」。

「教へける月は西へぞ行くさきは我のみこそはまかる能かりけれ」

などたのもしげに見ゆれど、我が家とおぼしき所はことになんめれば、いと思はずにのみぞ世はありける。さいはひある人のためには年月見し人も、あまたの子などもたらぬを、かくものはかなくて思ふことのみ繁し。さいふいふも女親といふ人難あるかぎりはありけるを、久しうわづらひて秋の初のころはひむなしくなりぬ。さらにせむかく能なくわびしき事のよのつねの人にはまさりたり。あまたある中にこれはおくれとおくれと感はるゝもしるゝいかなるにかあらむ。足手など唯すくみにすくみて絶え入るやうこそす。さいふいふものを

語らひおきなどすべき人は京にありけり。山寺にてかゝるめは見れば幼き子を引きよせて僅にいふやうは「われはかなくて死ぬるなめり。かしこに聞えむやうはおのがうへをばいかにもいかにもな知り給ひそ。この御後の事を人々のものせられむうへにもとぶらひものしたまへと聞えよ」とて、いかにせむとばかりいひてものものはれずなりぬ。日ごろ月ごろわづらひてかくなりぬる人を、今はいふかしかなきものになして、これにぞ皆人はかゝりて、ましていかにせむよとからはと、泣くがうへに又泣き感ふ人多かり。ものはいはねどまた心はあり。目は見ゆる程にいたはしと思ふべき人よりきて「親は一人やはある。などかくはあるぞ」とてゆく能をせめて入るれば、のみなどして見などなほりもてゆく。さて猶思ふにもいきたるまじき心ちするは、この過ぎぬる人難らひつる日ごろものなどもいはず、唯いふこととては「かくものはかなくてありふるを夜晝歎きにしかば哀れいかにま給はむずらむ」としばしは息のしたにもものせられしを、おもひ出づるに、かうまでもあるなりける。人聞きつけてものしたり。我はものも覺えねば知りも知られず。人をあひて「まかじかなむものし給ひつる」と語れば、うち泣き、けがらひも思むまじきさまにありければ、いとびんなかるべしなどみかして、立ちながらなむそのほどのありさまはしむいと哀れに志あるやうに見えけり。かくてとかうものすることなどいたづら人多くて皆まはてつ。今はいとあはれなる山寺につどひてつれづれとあり。よる目もあはぬまゝに歎きあかしつゝ、山づらを見れば霧ぞ能に麓をこめたり。京もげにたがもとへかは出でむとすらむ。いで猶みながら死なむと思

へど、生くる人ぞいとつらきや。』かくて十よ日になりぬ。そうどもねぶつのひまに物語するを聞けば、「このなくなりぬる人のあらはに見ゆる所なむある。さて近くよれば消え失せぬなり。遠うては地獄なり。いづれの國とかやみえくちからの鳥となむいふなる」など口々語るを聞くに、いと知らまほしう悲しう覺えてかくぞいはる、

「ありとだによそにても見む名にしおはれわれかぎりせよ耳くら傳の山」
といふをせうと鮮なる人聞きて、それもなくな、

「いづことか音にのみ聞くみくらの鳥がくれにし人をたづねむ」。

かくてあるほどに立ちながらものして人に問ふめれど、唯今は何心もなきに、誰からひの心もとなき事おぼつかなき事などむつかしきまで書きつゝけてわれど、物覺えざりしほどの事なればにや、誠にいそがねど、心にしまかせねば今日皆出で立つ日になりぬ。こし時は膝に臥し給へり、人をいかでなりぬこしか、安らかにと思ひつゝ、わがみはあせになりつゝ、さりとともと思ふ心添ひてたのもしかりき。にたみはいとやすらかにてあさましきまでくつろかにのこられたるにも道すがらいみじう悲し。おりて見るにもさらにも覺えず悲し。諸共に出でぬつゝ、つくろはせて草などもわづらひしより初めてうち捨てたりければ、生ひこりていろいろに咲き亂れたり。わざとの事なども皆おの心とりどりすれば我はたゞつれづれとながめをのみして「一むらすゝさむしの音の」とのみぞいはる、

「手ふれねど花はさかりになりにつれとめおさける露にかかりて」

などを覺ゆる。これかれを殿上などもせねばけがらひも一つにまなしためれば、己がじゝひきつぼねなどまづゝあめるなかに我をのみぞまざる。ことなくてよはねぶつの聲聞きはじむるより、やがて泣きのみあかざる。四十九日のこと誰も闕く事なくて家にてぞする。我が知る人大かたの事を行ひたれば人々多くさしあひたり。我が志をば佛をば書かせたる。その日過ぎぬればみなおのがじゝいさあかれぬ。まして我が心ちは心細うなりまさりていとゝやる方なく、人はかう心細げなるを思ひてありしよりは繁う通ふ。さて寺へものせし時、

「はちす葉の玉となるらむむすぶにもそでぬれまさるけさのつゆかな」

と書きてやりつ。又この袈裟の徳の心みも法師にてあれば祈りなどもつけて頼もしかりつるを、にこり心に又かくなりぬと聞くにも、このはらからの心ちいかならむ。われもいと口をし。頼みつる人のかうのみなど思ひ亂るれば屢とぶらふ。さるべきやうにありて雲林院に侍ひし人なり。四十九日などはてゝかくいひやる、

「思ひきや雲の林にうち捨てゝそらのけぶりにたゝむものとは」

などなむおのが心ちのわびしきまゝに野にも山にもかゝりける。はかなながらから秋冬もすぞしつ。一つところにはせうと一人伯母とおぼしき人ぞ住む。それを親のごと思ひてあれど、猶昔を戀ひつゝ、泣きあかしてある所に、年かへりて春夏も過ぎぬれば、今ははての事すとしてたびばかりはかのわりし山寺にてぞする。ありし事ども思ひ出づるにいとゝいみじう哀に悲し。導師のはじめにてうつたへに秋のやまべを尋ね給ふにはあらざりける。まな

こたぢ給ひしところにて經の心説かせ給はむとにこそありけれ。とばかりいふを聞くに、もの覺えずなりてのちの事どもはおぼえずなりぬ。あるべき事ども終りてかへる。やがて服ぬぐにび色のものども扇まではらへなどするほどに、

「藤衣流すなみだのかはみづはきしにもまさるものにぞありける」

と覺えていみじうなかるれば人にもいはでやみぬ。さる壺など果てしか例のつれづれなるに弾くとはなけれど琴おしのこひてかきならしなどするに、忌なき程にもなりにけるを、わはれにはかなくてもなど思ふ程に、あなたより、

「今はとて弾き出づる琴のねを聞けばうちかへしても猶ぞ悲しき」

とあるにことなることもあらねどこれを思へばいと泣きまさりて、

「なき人はおとづれもせでことの緒を断ちしつき日ぞかへりきにける」。

かくてあまたある中にも頼もしきものに思ふ人この夏より遠くもろこ舞しぬべき事のあるを、服果てとありつれば、この頃出で立ちなむとす。これを思ふに心細しと思ふにぞおろかなり。今はとて出で立つ日渡りて見る。さうすく一くだりばかりはかなき物など硯篋一よろひに入れていみじう騒がしう罵りみちたれど、我も行く人も目も見合せず唯向ひ居て涙をせきかねつ、「皆人はか^かいなど念せさせ給へ^いいみじう忌むなり」などに^かいふ。されば車に乗り果てむを見むはいみじからむと思ふに家より「疾く渡りぬ。こゝに物したり」とあれば車寄せさせて乗るほどに、行く人はふたゐの小袿なり。とまるは唯うすもの、赤朽葉を

着たるをぬぎ更へて別れぬ。九月十日の程なり。家に來てもなくかかくまがまがしくと答むるまでいみじう泣かる。さて昨日今日は關山ばかりにぞ物すらむかしと思ひやりて月のいと哀なるに詠めやりてゐたるは、あなたにもまた起きて琴弾きなどしてかくいひたり、

「引きとむるものはなしに逢坂の關の朽ちめのねにぞそぼつる」。

「思ひやる逢坂山のせきのねは聞くにもそでぞくちめつきぬる」

など思ひやるに年もかへりぬ。三月ばかりこゝに渡る程にして苦しがりそめていとわりなう苦しと思ひ惑ふをいといみじうと見る。いふことは「こゝにもいとあらまほしきを何事もせむにいとびんなかるべければかしこへものしなむ。つらしとなおほしそ。俄にもいくばくもわらぬ心ちなむするなむいとわりなき。おはれまらぬともおぼし出づべきとのなきなむいと悲しかりける」とて泣くを見るに物おぼえずなりて、又いみじう泣かるれば「な泣き給ひそ。苦しき増る。世にいみじう^かかるべきわざは心はからぬほどにかゝる別せむなむわりける。いかにし給はむすらむ。ひとと^かりは世におはせじな。さりとおのが忌の中にしらなから^い死なすばありとて限りと思ふなり。ありとてうちはえ參ら^いまし。おのがさかしからむ時こそ、いかでもいかでも物し給はめと思へば、かくて死なばこれこそは見奉るべき限なめれ」など、伏しながらいみじう語ひて泣く。これかれある人々呼び寄せつ、「こゝにはいかに思ひ聞えたりとか見る。かくて死なば又對面せで止みなむと思ふこそいみ

じけれ」といへば皆泣きぬ。みづからはまして物だにいはれず、唯泣きにのみ泣く。かゝる程に心ちいと重くなりまさりてくる。いさし寄せて乗らむとてかき起されて人にかゝりてものす。うち見おこせてつくづくとうち守りていとみじと思ひたり。とまるは更にもいはすこのせうとなる人なむ、「何かかくまかまがしうに御事かおはしますまむ。はや奉りなむ」とて、やがて乗りてかへてものしぬ。思ひやる心ちいふかたなし。日にふたゝびみたび文をや。人憎しと思ふ人もあらむと思へとて、いかはせむ。返事はかしのなるおと辨なき人して書かせてあり。「みづから聞えぬがわりなき事とのみなむきこえ給へ」などぞある。ありしよりもいたう煩ひまさると聞けば、いひしことみづから見るべうもあらず。いかにせむなと思ひ歎き、十よ日にもなりぬ。讀經修法などしていさゝか怠りたるやうなればゆふのこ^三とみづから返りごとす。いとあやしう怠るともなくて日を經るに、いとまどはれし事はなければにやあらむ、おぼつかなき事などひとまにこまごまと書きてあり。「物覺えにたればあらはになどもあるべうもあらぬを、夜のまに渡れ。かくてのみ日を経れば」などあるを、人はいかゞは思ふべきなど思へど、我も又いと覺束なきに立ち歸り同じことのみあるをいかゞはせむとて「車を給へ」といひたればさし離れたる廊の方にいとようとりなしまづつらひて端に待ち臥したりけり。火ともしたるにい消たせておりたればいと暗うて入らむ方も知らねばあやし。「こゝにぞある」とて手を取りて導く。「などかう久しうはありける」とて日頃ありつるやうくつし語らひて、とばかりあるに「火ともしつけよ。いいと暗し。更に後めた

なくば猶しうが」とて屏風のうしろにはのかにとつかしたり。「まだいをなども食はず今宵なむおはせば諸共に」とてある。「いづら」などいひても参らせたり。少し食ひなどしてせじたちありければ、夜うち更けてたかしんにとてものしたれば「今はうちやすみ給へ。日頃よりは少し休まりたり」といへば大とこ「まかおはしますなり」とて立ちぬ。さて「さは明けぬるを人など召せ」といへば「なにか。またいと暗からむ。まばし」とてあるほどに、明らなればをのこども呼びて、しとみ上げさせて見つ。「見給へ。草どもはいかゞうゑたる」とて見出したるに「いとかたはなるほどになりぬ」などいそげば「なにか今は粥など参りて」とあるほどに晝になりぬ。さて「いざ諸共に歸りなむ。またはものしかるべし」などあれば、「かく参り來たるをだに人いかにもおもふに、御迎へなりけると見ば、いとらたてものしからむ」といへる。世「さらばをのこども車寄せよ」とて寄せたれば、乗る所もかつがつとわゆみ出でたればいとわはれと見る見る「いつか御ありきは」などいふ程に涙浮きにけり。いと心もとなければ「あすあさでの程ばかりには参りなむ」とて、いとさうさうしげなる氣色なり。少し引き出で、牛懸くる程に見通せば、ありつる所に歸りて見おこせて、つくづくとあるを見つ、引き出づれば、心にもあらで願みのみぞせらるゝかし。さて晝つ方文あり。何くれと書きて、「かぎりかと思ひつゝ、こし程よりもなかなかなるは侘びしかりけり」。

我もさぞのどけきとこのうらならで歸る波路はあやしかりけり」。

さて猶苦しげなれど念じて二三日の程に見えたり。やうやう例のやうになりもて行けば、例の程に通ふ。この頃は四月祭見に出でたればかの所にも出でたりけり。さなめりと見て迎ひに立ちぬ。待つ程のさうさうしければ橋の實などあるに葵をかけて、

「あふひとかきけどもよそにたち花の」

といひやる。やゝ久しうありて、

「きみがつらさを今日こそは見れ」

とぞある。にくかるべきものにては年経ぬるを、なと^かげにとのみいひたらむといふ人もあり。歸りて「さありし」など語れば「くひつぶしつべき心ちこそすれとやいはざりし」とい^とをり^かしと思ひけり。』今年はせち聞し召すべしとていみじう騒ぐ。「いかで見むと思ふに所ぞなき。見むと思はゞ」とあるを聞きはさめて「すぐろく打たむ」といへば、「よかなり。物見つぐのひに」とてめうちぬ。喜びてさるべきさまの事ども^まつゝよね^かの間靜まりたるに、硯引き寄せて手習に、

「あやめ草生ひにし敷をかぞへつゝひくや五月のせちに待たるとが」

とてさしやりたればうち笑ひて、

「隠れぬに生ふる敷をば誰か知るあやめ知らずに待たるなるかな」

といひて、見せむの心ありければ、宮の御さじきの一續きにて二まありけるを別けてめでたう^まつらひて見せつ。かくて人にくからぬさまにて十といひて、一つふたつの年は餘りにけ

り。されど明け暮れ世の中の人のやうならぬを歎きつゝ、盡させず過ぐすなりけり。それもことわり、身のあるやうはよるとても人の見え怠^ま時は、人すくなく心細う、今は一人を頼む。たのもし人はこの十一年のほどあがたありきにのみあり。たまさかに京なるほども四五條のほどなりければ我は左近のうまばを片岸に^またればいと遙なり。かゝる所も^かも取りつくるひかゝはる人もなければいとあしくのみなり行く。これをつれなく出で入りするは殊に心細う思ふらむなど、深う思ひよらぬなめりなどちぐさに思ひ亂る。事繁しといふは何かこの荒れたる宿の蓬よりも繁げなりと思ひ眺むるに、八月ばかりになりけり。心のどかに暮らす日はかなき事いひひのはてに、我も人^かも悪しういひなりてうち怨じて出づるになりぬ。端の方にあゆみ出で、幼き人^かを呼び出で、「我^かは今^はこととす」などいひ置き出でにける即ち這ひ入りておどろおどろしう泣く。「こはなぞあぞ」といへどいらへもせで、ろんならさやうにぞあらむと推しはからるれど、人の聞かむうたて物狂はしければ、問ひさしてとかうこしらへてあるに、五六日はかりになりぬるに音もせず。例ならぬほどになりぬれば、あな物狂はし、戯ぶれ事とこそ我は思ひしか、はかなきかなければかくて止むやうもありなむかしと思へば、心細うて眺むる程に、出でし日つかひし、ゆ^かる^つきの水はさながらありけり。上にちり居てあり。かくまでとあさましう、

「絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水はみくさむにけり」
など思ひしひしも見えたり。例の事にて止みにけり。かやうに胸つぶらはしき折のみあるが

世に心ゆるびなきなむ侘しかりける。『九月になりて、世の中をかしからむ、物人に詣でせばや。かう物はかなき身の上も申さむなど定めていと忍びあがる所にものしたり。ひとはさみのみてぐらにかう書きつけたりけり、まづまものみ社に、

「いちじるき山口ならばこゝながら神の氣色を見せよとに思ふ。」
中のに、

「いなりやま多くの年ぞ越えにけり御いのるまゐるしの杉をたのみて。」
はてのに、

「神々とのぼり下りはわぶれどてがまださかゆかぬこゝろこそすれ。」
又同じ晦に、ある所に同じやうにて詣でけり。ふたはさみつゝまものには、

「かみやせくまもにやみくづ積るらむ思ふこゝろの行かぬみたらし。」
又、

「榊葉のときはかきはにゆふしでやかたくるしなるめな見せそ神。」
又上のこが、

「いつしかもいつしかもとぞ待ちわたる森のたかまより光見むまを。」
又、

「ゆふだすき結ばれつゝ歎くこと絶えなば神のまゐるしと思はむ」
などなむ、神の聞かぬ所に聞えごちける。『秋はてゝ冬は朔つごもりとて御あしきもよきも

騒ぐめるものなれば、獨寐のやうにて過ぐしつ。三月晦方にかりのこの見ゆるを「これ十づゝ重ねるわざをいかでせむ」と手まさぐりにすゞしの糸を長う結びて、一つ結びては、ゆひゆひえて引きたてたればいとようかさなりたり。猶あるよりはとて丸條殿の女御殿の御方子に奉る。卯の花にぞつけたる。何事もなく唯例の御文にて端に「この十かさなりたるはからても侍りぬべかりけり」とのみ聞えたる。御かへり、

「數知らず思ふこゝろにくらぶれば十かさぬるものとは見る」
とあれば、御かへり。

「思ふことしらではかひやあらざらむかへすがへすもかすをこそ見ぬ」
それより玉の宮御になむ奉れ給ふと聞く。『五月にもなりぬ。十よ日にうち御の御薬のことありてのゝしるほどもなくて、二十よ日のほどにかくれさせ給ひぬ。東宮御即ちかり居させ給ふ。東宮の亮といひつる人御は藏人のとうなどいひてのゝまれば、悲しびは大かたの事にて、おはん喜ろがといふことのみ聞ゆ。あひ答へなどして少し人の心ちすれど、私の心は猶同じ事あれど、引きかへたるやうに騒がしくなどあり。みさゝぎや何やと聞くに時めき給へる人々いかに思ひやり聞ゆるあはれなり。やうやう日頃になりて貞觀殿の御方にいかになど聞えけるついでに、

「世の中をはかなきものとみさゝぎの埋るゝ山になげくらむやうが。」
御かへりごといと悲しげにて、

「おくれじとうきみさゝぎに思ひ入る心は死出の山にやあるらむ」。御四十九日はて、七月になりぬ。うへに侍ひし兵衛の佐藤まだ年も若くて思ふ事ありげもなさに、親をもめをもうち捨て、山に這ひのぼりて法師になりけり。「あないみじ」との、しりあはれといふ程に女は又尼になりぬと聞く。さきさきなども文通しなどする中にて、いと哀にあさましき事をとぶらふ。

「おくやまの思ひやりだに悲しきに又あま雲のかゝるなになり」
て花ばさながらかへりごとえたり、

「山深く入りにし人も尋ねれどなほ天ぐものよそにこそなれ」
とあるもいと悲し。かゝる世に中將にや、三位にや三位にや、などよろこびをえきりたる人はところどころなるいと騒しければあしきを近う去りぬべき所いで來たりとて渡して乗物なきほどに這ひ渡るほどなれば、人は思ふやうなりと思ふべかめり。霜月なかの程なり。えはす晦方に貞観殿の御方この西なる方にまかで給へり。晦の日になりてなまかといふもの心かに見るを、又晝よりこほこほはたはたとするぞひとりゑみせはちれてあるほどに、あけぬれば晝あけつかたまらうどの御かた男なんと立ちまじらねばのどけし。我ものこるおはあけとなりきゝて待たるゝものはなんどうち笑ひてあるほどに、あるもの手まさぐりにかい栗をわえたてゝ、につあけにしてきをつく待りたるをのこのかたをとりよせてありし雉のはしたはさぎにおしつけて、それに書きつけてあの御方に奉る、

「かたごひやくるしかるらむやまがつのあふごなしとは見えぬものから」
と聞えたればみるのひきほしの短くちぎりたるをゆひ集めて、木のさきに荷ひかへさせて細かりつるかたの足にもとのこひをもけづりつけて、もとのよりも大きにてかへし給へり。見れば、

「やまがつのあとあけまらち出でゝくらぶればこひまさりけりあけ方もありけり」。

日たぐれば節供まぬりなどすめる。こなたにもさやうになどして、十五日にも例のごとして過ぐしつ。三月にもなりぬ。まらうどの御かたにとおぼしかりける文をもて違へたり。見れば「なほしもあらで近きほどに参らむと思へど、われならでと思ふ人や侍らむとて」など書いたり。年頃見給ひなりにたればかうもあるなめりと思ふに、猶もあらでいとちひさく書いつく。

「松山のさし越えてしもあらじよを我によそへて騒ぐ波かな」

とて「あの御方みもかくあけまらぬれ」とて返しつ。見給ひてければ即ち御返りあり。

「ましあけえむの風にまたがふなみなれやよするかたこそ立ちまさりけれ」。
この御方春宮あけの御親のごとして侍ひ給へば参り給ひぬべし。かうてやなど度々えはえはの給へば宵のほどに参りたり。時しもこそあれあなたに人の聲すれば「そゝ」などのたまふに、聞きも入れねばよひまどひし給ふやうに聞ゆるを「ろなうむつかられ給はゞや」との給へば「乳母なくとも」とてえはえなるに、ものあゆみ來て聞えたてばのどかならで返りぬ。

又の日の暮に参り給ひぬ。』五月にみかどの御服ぬぎにまかで給ふに、さきのごとこなたに
などあるを「夢にもものしく見えし」あどいひてかなたにまかで給へり。さてしばしば夢のさ
としありければ、ちがふるわざもがなとて、七月、月のいとわかきにかくのたまへり、

「見し夢をちがへ侘びぬる秋の夜に寐難きものと思ひしりぬる」。

御かへり、

「さもこそはちがふる夢はかたからめ逢はで程経る身さへ憂きかな」。

たちかへり、

「逢ふと見し夢になかなかくらされてなごり戀しくさめぬなりけり」

「こと絶ゆるうつゝや何ぞなかなか夢はかよひぢわりといふものを」。

又「こと絶ゆるは何事ぞ。あなまがまがし」とて、

「かはと見てゆかぬ心を詠むればいとゆゝしくいひや果つべき」

とある、御かへり、

「渡らねばをち方人になれる身を心ばかりはふち瀬やはわく」

となむ、夜一夜いひける。かくて、年頃願あるをいかで泊瀬にと思ひ立つを、む月にと思ふを
さすがに心にしまかせねばからうじて九月に思ひ立つ。たゞむ月には大嘗會の御けいこれ
より女御御たいいでたゝるべし。これ過ぐして諸共にやはとあれど、我が方の事にしあらぬ

ば、忍びて思ひ立ちて日悪しければ門出ばかり法正寺のべにして、曉より出で立ちてうまの
時ばかりに宇治の院に至りつゝ、見やれば、木の間より水のおもてつやゝかにいと哀なる
心ちす。忍びやかにと思ひて人あまたもなうて出で立ちたるも、我が心の怠りにはあれど、
我ならぬ人なりせばいかにのゝしりてと覺ゆ。車さしまはして幕など引きて、しりなる人は
かりを下してかはりべに向へてすだれ巻きわけて見れば網代とてかにま渡したり。行きかふ
舟とてあまた見ざりし事なれば、すべてあはれにをかし。しかかの方を見れば來こうじたる
げすどもあいしげなるゆや梨やなどをなつかしげにもたりて食ひなどするも哀に見ゆ。わ
りにかなどものして舟に車掻きすゑて急ぎもていけば、にへの、池泉河などいひつゝもかり
どて居などしたるも心にまみて哀にをかしう覺ゆ。かい忍びやかなれば萬につけて涙もろ
く覺ゆ。その泉河もわたりて橋寺といふ所にとまりぬ。酉の時ばかりにおりて休みたれば、
はたにとしかと思しきるたより切大根ものしなしてあへしらひてまづ出したり。か
ゝる旅立ちたるわざどもをしたりしこそわやしう忘れがたうをかしかりしか。明くれば川
渡りていくに柴垣まわたしてある家どてかを見るに、いづれならむよもの物語の家など思ひ
いくにいとぞ哀なる。今日も寺めく所にとまりて又の日はつばちといふ所にとまる。又の日
霜のいと白きに、詣でもらか歸りもするなめり。脛を布の端して引きめぐらかしたるものと
てかわりさちがひ騒ぐめりしとみさしわげたる所に宿りて、湯わいしなどする程に見ればさ
まざまなる人のいきちがふ、おのがじはは思ふ事こそはあらめと見ゆ。とばかりあれば文捧

げてくる者あり。そこにとまりて「御文」といふめり。見れば「昨日今日の程何事かいと覺束なくなむ人少なにて物しにし。いかいひしやうに三夜かぶらはむずるか。歸るべからむ日聞きて迎へにだに」とぞある。返どには「つば市といふまでは平かになむ。かゝるついでにこれよりも深くと思へば歸らむ日をえこそ聞え定めぬ」と書きつ。こをばにて猶三日作給ふ事。いとびんなし」など定むるを、使聞きて歸りぬれば、それより立ちていきもていけるは、なでふ事なき道も山深きこゝちすれば、いとあはれに、水の聲も例に過ぎもと有特さしも立ちわたり木の葉は色々に見えたり。水は石がちなるなかより湧きかへり行く。夕日のさしたるさまなどを見るに涙も留まらず。道は殊にをかしくもわらざりつ。紅葉もまたし。花も皆失せにたり。をれたる薄ばかりぞ見えつる。こゝはいと心ことに見ゆればすだれ巻きわけて下簾垂おしはさみて見れば、着なやしたる物の色もわらぬやうに見ゆ。薄色なるうすもの、裳を引きかくれば、こしなどちりてこがれたるくら葉にわひたる心ちもいとをかしく覺ゆ。かたるとものつきなべなど居てをるもいと悲し。げすぢかなる心ちして生けおとりしてぞ覺ゆる。ねぶりもせられずいそがしからぬば、つくづくと聞けば目も見えぬ者のいみじげにしもわらぬが、思ひける事どもを人や聞くらむとも思はずの、しり申すを聞くも哀にて唯涙のみぞこぼる。かくて今しばしわらばやと思へど明ければの、しりて出し立つ。かへさは忍ぶれどこゝかしこあるじまつ、とゞむれば、物さわがしうて過ぎ行く。三日といふに京につきぬべけれど、いたう暮れぬとて山城の國久世のみやけといふ所にとまりぬ。い

みじうむつかしけれど夜に入りぬれば唯明くるを待つ。まだ暗きよりいけば黒みたるもの、^闇でぞ追ひてはしらせせてく。やゝ遠くよりおりてついひさまづきたり。見ればすゝいんし^{聞ける}なりけり。何ぞとこれかれ問へば「昨日の酉の時ばかりに宇治の院におはしまし着きてかへらせ給ひぬやと參れと仰せごと侍りつればなむ」といふ。ささき^{ささき}なるをのこともとそゝ^道ながせやなど行ふ。宇治の河は^らによるほど、霧はさし方見えず立ち渡りていとおぼつかなし。車かきおろしてこちたくとかくするほどに人聲多くて「御車おろし立てよ」とのゝしる。霧の下より例のあじろも見えたり。いふ方なくをかし。みづからはあなたにあるなるべし。まづかく^かきてわたす、

「人心宇治のあじろにたまさかによるひるだにもたづねけるかな」。

「かへる日を心のうちに數へつ、誰によりてかあじろをもとふ」。

見るほどに車かき居ての、しりてさし渡る。いとやんごとなきにはわらぬと卑しからぬ家の子ども、何のぞうの君なぞいふものども、ながみか^かとびの尾のなかこ^こ入りこみて、ひのわじろ僅かに見えて霧所々に晴れ行く。あなたの岸に家の子衛府の佐などかいつれて見おこせたり。なかに立てる人も旅立ちて狩ぎぬなり。岸のいと高き所に船を寄せてわりなくたゝわげに擔ひあぐ。轆をいたじきに引きかけて立てたり。としみの設けありければとかうものするほどに^かはのあなたにあせちの大納言^師のらうじ給ふこころありける。「この頃のあ

じろは御覽すとてこゝになむものし給ふ」といふ人あれば、「かうてありと聞き給へらむを
 まうでこそすべかりけれ」など定むるほどに紅葉のいとをかしきえだに、きじひをなをつ
 けて、「かうものし給ふと聞きてもろともと思ふもあやしう、ものなき日にこそあれ」とあ
 り。御かへり「こゝにおはしましけるを唯今侍らひかしこまりは」などといひてひとへぎぬ
 ぬぎてかづくさながらさし渡りぬめり。又鯉鱸などしきりにあめり。あるすきものども酔ひ
 あつまりて「いみじかりつるものかな。御車のつぎのわたのほどの日にあたりて見えつる
 は」ともいふめり。車のまりの方に花紅葉などやさしたりけむ、家の子とおぼしき人「近う花
 咲き實なるまでなりにける日頃よ」といふなればまゝなる人もとかくいらへなどするほど
 に、あなたへ舟にて皆さしわたる。ろなうゑはむものぞとて皆酒飲むものどもを選りてゐて
 渡る。川の方に車むかへ楊立てさせてふた舟にて漕ぎ渡るまで酔ひ惑ひて歌ひ歸るまゝに
 「御車かけよかけよ」とのゝしれば、困じていと侘しきいと苦しうて來ぬ。あくればどけい
 のいそぎ近くなりぬ。こゝにま給ふべき事それぞれとあれば、いかゞはとてま騒ぐ。儀式の
 車にてひきつゝま騒り。しものつかへ手振などかくしいけば、いろふしに出でたらむこゝち
 して今めかし。月立ちては大さう會のけみにやとま騒ぎ、我も物見のいそぎなどしつるほ
 どに、晦に又いそぎなどすめり。かく年月はつもれと思ふやうにもあらぬ身を嘆けば、聲
 あらたまるもよろこぼしからず。猶物はかなきを思へばあるかなきかの心ちするかげろふ
 のにきといふべし。

蜻蛉日記卷中

かくはかなくかう年立ち歸るあしたにはなりにけり。年頃あやしく世の人のする事忌など
 もせぬ所なればや、かうはあらむと思ひ置きてゐざり出づるまゝに「いづらこゝに人々今年
 だにいかで事忌などして世の中試みむ」といふを聞きてはらからと覺しき人まだ臥しなが
 らもの聞ゆ。「天地を袋に縫ひて」とすするに、いとをかしくなりて「さらにもみには三そ日三
 そ夜は我がもとにともいはむ」といへば、前なる人々笑ひて「いと思ふやうなる事にも侍る
 かな。同じくばこれを書かせ給ひて殿にやは奉らせ給はぬ」といふ。臥したりつる人も起き
 て「いとよき事なり。てん神けのゑはうにもまさらむ」など笑ふ笑ふいへばさながら書きてち
 ひさき人神して奉れたれば、この頃時の世の中人にて人はいみじく多く参りこみたり。内へ
 も疾くとていと騒がしげなりけれどかくぞある、今年はさ月二つあればなるべし、

「年ごとにあまればほこひる御君がため閏月をばおくにやあるらむ」

とわればいはひそしつと思ふ。又の日にこなたあなただげすのなかより事出で來ていみじき事
 どもあるを、人はこなたさまに心寄せていとほしげなるけしきにあれど、我はすべて近きか
 することなり。悔しくなど思ふ程に、家うつりとかせらるゝ事ありて我は少し離れたる所に
 渡りぬれば、わざとささらしくして日ませなどにうち通ひたれば、はかなうちこゝちには猶か

くてぞあるべかりける。家に錦を着てとこそいへ。故郷へも歸りなむと思ふ。三月三日せくなど物したるを、人なくてさうさうしてこゝの人々かしの侍にかう書きてやるあり。戯ぶれに、

「もゝの花すき物どもをさいわうがそのわたりまで尋ねにぞやる」。

即かいつれて來たり。おろしいだし酒飲みなどして暮しつ。中の十日のほどにこの人々方分きて小弓のことせむとす。かたみに出でいるとぞし騒ぐ。しりへの方の隈こゝに集りてなす日、女房にかけもの乞ひたれば、さながらに、物や忽に覺えざりけむ、侘びざれに青き紙を柳の枝に結びつけたり。

「山風のまへよりふけばこの春のやなぎのいとほしりへにぞよる」。

かへし口々したるほど忘るゝ程押しはからなむ。一つはかくぞある、

「數々に君かたよりて引くなればやなぎのまゆもいまだひらくる」。

つどもり方にせむと定むる程に世の中にかなる咎勝りたりけむ。てんけ^{てんけ}人々流さるゝとのゝしる事いで來て紛れにけり。廿五日六日の程に西の宮の左のおとゝ^{おとゝ}流され給ふ。見奉らむとて天の下ゆすりて西の宮へ人走り惑ふ。いとみじき事かなと聞く程に人にも見え給はで逃げ出で給ひにけり。あたごになむときよ^よしは^しに^になどゆすりて遂に尋ね出でゝ流し奉ると聞くに、あいなしと思ふまでいみじう悲しく心もとなき身だにかく思ひ去りたる人は袖をぬらさぬといふ類ひなし。あまたの御子供もあやしき國々の空になりつゝ、行

くへも知らずちりぢり別れ給ふめるぞ、御ぐしおろしなどすべていへばおろか^{おろか}いみじ。おといも法師になり給ひにけれど、強ひて帥になし奉りて追ひくだし奉る。そのこゝろをいたみ^みの事にて過ぎぬ。身の上をのみするにきには入るまじきとなれども、^なしと思ひ入りしも誰ならねば記し置くなり。そのま^まの五月雨の二十よ日のほど物忌もあり。長きしやうじも始めたる人^人山寺に籠れり。雨いたく降りて詠むるに、いとあやしく心細き所になむなどもあるべし。返り事に、

「時しもあれかく五月雨と^とのま^まさかにをち方人のひと^{ひと}もこそふれ」とものしたる返し、

「ましみづのまして程ふる物ならばおなじぬれ^{ぬれ}にもおるかも立ちなむ」

といふ程に聞さ月にもなりぬ。晦日より何ぞ^{何ぞ}ちにかあらむ、そこはかとなきいと苦しけれど、さばれとのみ思ふ。命をしむと人に見えずもありにしがなとのみ念すれど、見聞く人たへ^へならで芥子やきのやうなるわざすれど、猶しるしなくて程ふるに、人はかくきよまはるほどゝて例のやうにも通はず。新しき所造るとて通ふたよりにぞ立ちながらなど物して、いかにぞなどもある。心ち弱く覺ゆるにおしか^{おしか}て悲しく覺ゆる夕暮に例の所より歸るとてはすの實一本を人して入れたり。「暗くなりぬれば參らぬなり。これ彼處のなるを見給へ」となむいふ。返り事には唯「生きて生けぬと^とこえよ」といはせて思ひ臥したれば、哀れげにいとをかしかなる所を、命も知らず人の心も心も^{心も}知らねばいつしか見せむとありしも、

さもあらぬにやみなむかしと思ふも哀なり。

「花に咲き實になりかはる世を捨て、浮葉の露とわれぞ消ぬべき」五十四
など思ふまで日を経て同じやうなれば心細し。よからずばとのみ思ふ身なれば露ばかり惜しむにはあらぬを、唯この一人ある人いかせむとばかり思ひつゞくるにぞ涙せきあへぬ。猶怪しく例の心ちに違ひて覺ゆるけしきも見ゆべければ、やんどとなき僧など呼びおこせなどしつゝ試みるに更にいかにもいかにもあらねば、かうしつゝ死にもこそすれ、俄にてはおほしき事もいはれぬものにこそ、あはれ、かくて果てなばいとくちをしかるべし、あるほどにだにあらば思ひあらむにたがひても語らひつゞきをと思ひて、脇息におしたがりて書きける事は「命なかるべしとのみのたまへ。見えて奉りてむとのみ思ひつゝありつるにうづもやなゆりぬらむ。怪しく心細き心ちのすればなむ。常に聞ゆるやうに世に久しきことこのいと思はずなれば塵ばかり惜しきにはあらず。唯この幼き人の上なむいみじく覺え侍る。物かおかりける戯ぶれにも御氣色の物しきをば、いと侘しと思ひてはんべるめるをばいとおほきなる事なくて侍らむ。さは御氣色あど見せ給ふな。いと罪深き身に侍らば、

風だにも思はぬ方によせざらばこの世のことはかの世にも見む。
侍らざらむよにさへうとうとしくもてなし給ふ人せあらば、つらくなむ覺ゆべき。年こゝろ辨御覽と果つまじく覺えながらかばかりもはてざりける御心を見給ふれば、それいとよにかへりみさせ給へ。譲り置きてなど思ひ給へつるもしるく、かくなりぬべかめればいと長く

なむ思ひ聞ゆる。人にもいはぬ事のをかしうなど聞えつるも忘れずやあらむとすらむ。をりしもわれ對めんに聞えつべき程にもあらざりければ、

露しげき道とかいとゞしでの山かつがつぬるゝそでいかにせむ」

と書きて、端に「跡にとほひなどもちりの信とをなむあやまたざなるさへよくなりへか位となむ聞え置きたるとのたまはせよ」と書きてふんじて上に「忌などはてなむに御覺せさすべし」と書きて傍なるからうつにるざりよりて入れつ。見る人あやしと思ふべけれど、久しくしならばかくだにもせざらむ事のいとむせ痛かるべければなむ。』かくて猶同じやうなれば祭祓などいふ業ことごとしうはあらで、やうやうなどしつゝみなつきの晦方にいさゝか物おほゆる心ちなどするほどに聞けば、そち殿の北の方尼になり給ひにけりとおはれにもいとあはれに思うてまつる。西の宮へ流され給ひて三日といふに、かきはらひ焼けにしかば、北の方我が御殿桃園なるに渡りていみじげにながめ給ふと聞くにもいみじう悲しく我がうちのさわやかにもならねば、つくづくと臥して思ひ集むることぞあひなきまで多かるを書き出したれば、いと見苦しけれど、

「あはれ今は	かくいふかひも	なけれども	おもひしことは
はるのすゑ	はななむ散ると	さわきしを	あはれあはれと
聞きしまに	にしのみやまの	うぐひすは	かぎりのこゑを
ふりたてゝ	きみがむかしの	わたこやま	さして入りぬと

聞きしかど
なげきわび
さわぐまに
立ちかへり
鳴かざりし
ふるかぎり
さつきさへ
くたしてき
己がよま
むこどりの
すもりにも
おもふらむ
ならしけめ
飾むらむ
なりぬとや
なりぬらむ
世のなかを

ひとごとをげき
たにがくれなる
世を卯つきにも
きみを玄のぶの
ましてながめの
たれがたもとか
かさねたりつる
ましてこひぢに
いかばかりかは
おのがちりぢり
なにかはかひの
いへばさらなり
おなじかずとや
かつはゆめかと
きみもなげきを
ふねをながして
ながめかるらむ

ありしかば
やまみづの
なりしかば
こゑ絶えず
さみだれは
たゞならむ
ころも手は
おりたてる
そぼちけむ
巢ばなれて
あるべきと
こゝのへの
こゝのへかに
いひながら
こりつみて
いかばかり
行きかへり

みちなきことゝ
つひにながると
やまほとゝぎす
いづれのとけか
うき世のなかに
絶えずぞうるふ
うへしたわかず
あまたの田子は
四つにわかるゝ
わづかにとまる
くだけてものを
うちをのみこそ
しま二つをば
あふべきごなく
玄は焼くあまと
うらさびしかる
かりのわかれに

あらばこそ
むなしくて
みなつきの
嘆くらむか
なかなかに
あはざらば
鳴くむしの
おほあらし
玄るらめや露

きみがとこまも
枕のゆくへも
こかげにわぶる
ましてやあきの
そよとこたへむ
ゆめにもきみが
おなじこゑにや
もりの玄たなる

あれざらめ
玄らじかし
うつせみの
かせ吹けば
をりごと
きみをを見て
堪へざらむと
くさのみも

蘆のみおくはば
いまはなみだも
むねさけてこそ
まがきのをぎの
いと目さへや
ながき夜すがら
おもふころはは
お奇じくぬると

又奥に、

「宿見ればよもぎの門もさしながらあるべきものと思ひけむやぞ世」と書きて、うち置きたるをまへなる人見つけて「いみじう哀なることかな。これをかの北の方に見せ奉らばや」などいひなりて「げにそこよりといはゞこそかたくなはしく見ぐるしからめ」とてかんや紙に書かせて、立文にて削木につけたり。「いづこよりとあらば多武の峯よりといへ」とをしふるは、この御はらからの入道の君の御もとよりといはせよとてなりけり。人とりていりぬるほどに使は歸りにけり。かしこにいかやうにかせただめおぼしけむは知らず。かくあるほどに心ち聊人ごちすれど二十日よひのほどに御嶽にとて急ぎ立

つ。幼き人も御供にとて物すればとかく出だし立て、ぞその日の暮にぞ我がもとの所な
どすりしはてつれば渡る。供なるべき人などさし置きてければさて渡りぬ。それよりさはか
りうしろめたき人をさへ添へてしかば、いかにいかにと念じつ、七月一日のころ曉に來て
「唯今なむ歸り給へる」など語る。こゝは程いと遠くなりたればまはしはありきなども難
かりなむかしなど思ふに晝つ方なつくく（ちかづくも）見えたりしは亦に事にかわりけむ。さ
てその頃帥殿の北の方いかでにかわりけむ。さゝ佐の峯よりなりけりと聞き給ひて、このみ
なつさと（さ）驚ごるとおぼしけるを、使もてたる（さ）聲で今一つ所へもて至りけり。取り入れて
あやしともや思はずありけむ。かへりごとは（さ）ど聞えてけりと傳へ聞きて、かの返り事を聞
きて所違へてけり。いふかひなき事を又同じ事をも物したらば傳へても聞くらむに、いとね
ぢけたるべし。いかに心もなく思ふらむとなむ騒がるゝと聞くがをかしければ、かくてはや
まじと思ひてさきの手して、

「やまびこの答ありとは聞きながらあとなき空をたづねわびぬる」

とあさはなだなる紙に書きて、一葉繁うつきたる枝に立文にしてつけたり。またさし置きて
失せにければ、先のやうにやあらむとてつゝみ給ふにやありけむ。猶おぼつかなし。あやし
くのみあるにゆなと思ふ。程經てたしかなるべきたよりを尋ねてかくのたまへる、

「吹く風につけて物思ふあまのたくしほのけぶりは尋ね出でずや」

とて、いとけなき手して薄純の紙にて心（さ）の枝につけて給へり。御かへりには、

「あるゝうらに鹽の煙は立ちけれどこなたにかへす風ぞなかりし」

とて、胡桃色の紙に書きて色かはりたる松につけて「（さ）八月になりぬ。その頃小一の左
のおと（さ）の御賀とて世にのゝしる。左衛門の督（さ）の御屏風の事せらるゝとて、繪さるまじき
たよりをはからひて責めらるゝ事あり。契（さ）の所々書き出したるなり。いとまらまらしき事
とてあまたゝびかへすを、せめてわりなくあれば、宵の程月見るあひたなどに、一つ二つな
ど思ひてものしけり。人の家に賀またる所あり。

「大空をめぐる月日のいくかへり今日行くすゑにあはむとすらむ」。

旅行く人の濱づらに馬とめて千鳥の聲聞く所あり。

「一聲にやがて千鳥と聞きつれば世々をつくさむかすも知られず」。

あはだ山より駒引く。そのわたりなる人の家に引き入れて見る所なかり。

「あまた年越ゆる山べに家居してつなひくこまもおもなれにけり」。

人の家の前近き泉に八月十五や月の影うつりたるを女ども見る程に、垣てのとより大路に
笛吹きて行く人あり。

「雲よりうちえぬの聲を聞くなべにさしくむばかり見ゆるつきかげ」。

田舎人の家の前の濱づらに松原あり。鶴群れて遊ぶ。ふたつ歌あるべしとあり。

「なみかげの見やりに立てる小松ばらこゝろをよすることぞあるべし」

松のかげ眞砂のなかと尋ねるはなにのわかぬぞたづのむらとり」。

網代のかたある所あり。

「あじろぎに心をよせて日を経ればあまたの夜こそ旅寐してけれ。濱べにいざり火ともし釣舟などある所あり。」

「いざりびもあまのこ舟ものどけかかな生けるかひあるうらに來にけり。」
女車、紅葉見けるついでに、又紅葉多かりけり人の家に來たり。

「よろづよを野べのあたりに住む人はめぐるめぐるやあきを待つらむ」

などあぢきなく、あまたにさへ強ひなされて、これらが中にいざりびとむことりてはとまりにけりと聞くに、ものしかうなど忘るるほどに、秋は暮れ冬になりぬれば、何事にあらぬと事騒がしきこゝちしてありふる中、まも月に雪はいと深く積りて、いかなるにかありけむ、わりなく身心憂く人つらく悲しく覺ゆる日あり。つくづくと詠むるに思ふやう、

「降る雪につもる年をばよそへつゝ消えむもなき身をぞ恨むる」

など思ふほどに晦の日三十一日春三十二日のあかばにもなりにけり。人はめでたくつくりかゝやかしつる所に「明日なむこよ三十三日待るなむ」とのゝしるなれど我は、思ひしもしるくかくてりあれかしほどに、うちののりゆみのことありていみじくいとなむなり。をさなき人まりへの方にとられて出でにたり。かたかへか物ならばその方の舞もすべしとあれば、このまはるは萬忘れてこの事を急ぐ。舞ならはすとて日々に樂をしのゝゑる。射手射につきて賭物とりてまかた

り。いとゆゝしとぞうち見る。十日の日になりぬ。今日ぞこゝにて試樂のやうなることする。舞の師大江のよしもち女房よりあまたの物かづく。男方もありとある限りぬ。殿は御物忌なりとてをのこどもはさながら來たり。事はてがたになる夕暮に、よしもち胡蝶くらが舞ひていできたるに、黄なるひとへ脱ぎてかづけたる人あり。折にあひたる心ちす。また十二日しりへの方人さながら集りて舞はすべし、こゝには弓場なくて悪しかりぬべしとて彼所にのゝしる。殿上人數を多く盡して集りて、よしももちうづもれてなむと聞く。我はいかにいかにと後めたく思ふに、夜更けて送り人あまたなどしてものしたり。さてとはかりありて人々あやしと思ふに這ひ入りて「これがいとらうたく舞ひつる事かたりになむものしつる。皆人の泣きあはれがりつる事。明日明後日物忌いかにおぼつかならむ。五日の日まだしきに渡りて事どもはすべし」などいひて歸られぬれば、常に行かぬ心ちもあはれに嬉しう覺ゆる事限りなし。その日になりてまだしきに物して、舞のまやうぞくの事など人いと多く集りてま騒ぎ出し立て、又弓のこを念ずるに、かねてよりいふやう「まりへはさしてのまけものぞ。射手いとあやしうとりたり」などいふに、舞をかひなくやなしてむ、いかならむいかならむと思ふに、夜に入りぬ。月いとあかければ格子などもおろさで念じ思ふほどに、これかれ走り來つゝまづこの物語をす。「いくつなむ射えかる。かたきには右兵源中將なむある。多く多く射伏せられぬ」とてさゝと待の心に嬉しう悲しき事物に似ず。「まけ物と定めし方のこの矢鞘にかゝりてなむ持になりぬる」とまた告げおこする人もあり。ぢになりなければ

まづ陵王舞ひけり。それも同じほどのわらはにて我が甥なり。馴しつるほど、こゝにて見、か
しこにて見なまかたみにしつ。されば次に舞ひておぼえによりてにや、御ぞ賜はりたり。内
よりはやがて車のしりに陵王も乗せてまかでられたり。ありつるやう語り我がおもてを興
しつる事、上達部どもの皆泣きうたがりつる事なかへすがへすも泣く泣く語らる。弓の
師呼びにやりきて又こゝにてなにくれとてや、かづくれば憂きみかとも覺えず。嬉しきと
ぞものこき。その夜もの後の二三日まで知りと知りたる人法師に至るまで若君の御喜
きこえにきこえにとおこせいふを聞くにも、あやしきまで嬉し。かくて、四月になりぬ。十
日よりしも又五月十日ばかりまで「いとあやしく惱ましき頃になむある」とて例のやうにも
わらで「七八日おほとにて念じてなむおぼつかなさ」などいひて「夜の程にてもあれば、か
く苦しうてなむ、内へも参らねばかくありきけりと見ららむもびんなるべし」とて歸りな
どせし人おここたりてこと聞くに待つほど過ぐる心ちす。怪しと人知れず今宵を試みむと
思ふほどに、はてはせうそくだになくて久しくなりぬ。めづらしくあやしと思へどつれなし
をつくり渡るに、よるは世界の車の聲に胸うち潰れつ、時々は寝入りて明けにけるはと思
ふにぞ、ましてあさましき。幼き人通ひつ、聞けど、さるはなでふ事もなるゆなり。いかにぞ
とだに問ひふれざなり。ましてこれよりは何せむにかはあやしともものせむと思ひつ、暮
し明して格子などあくるに見出したれば、よる雨の降りける氣色にて木ども露かゝりたり。
見るまゝに覺ゆるやう、

「よのうちには松にも露はかゝりけり明くれば消ゆるものこそ思へ」。

かくて経るほどにその月つゞもりに小野の宮のおととかくれ給ひぬとて、「世はさはりあ
りて世の中いと騒がしかなればつゝしむとてえ物せぬなり。服になりぬるをこれら疾くし
て」とはあるものか。いとあさましければこの頃ものするものども里につてなむとて歸し
つ。これにまして心やましきさまにて絶えて事づてもなし。『さながら六月になりぬ。かくて
數ふるは夜見る事は三十よ日、晝見る事は四十よ日になりけり。いとにはかにあやしと
いはおろかなり。心もゆかぬ世とはいひながら、またいとかゝる目は見ざりつれば、見る
人々もあやしうめづらかなりと思ひたり。物しおぼえねば、詠めのみぞせらるゝ。人目もい
と耻しう覺えて落つる泪おし隠しつ、臥して聞けば、おひすぞをりはへて鳴くにつけて
覺ゆるやう、

「鶯もどもなきものやおもふらむみなつきはてぬ音をぞ鳴くなる」。

かくながら二十餘日になりぬる心ち、せむ方知らずあやしく置き所なきを、いかで涼しき方
もやあると、心ものへがてら濱づらの方に祓へもせむと思ひて唐崎へとて物す。寅の時ばかり
りに出で立つに月いと明し。我が同じやうなる人又供に一人ばかりぞあれば、唯三人乗り
て馬いが乗りたるをのこども七八人ばかりぞある。加茂川のほどにてはのぼのと明く。うち
過ぎて山路になりて京に違ひたるさまを見るにも、この頃の心ちなればにやわらじ、いとあ
はれなり。いはむやとかきに至りてしばし車とめてうしかへなどするに、むなぐるま引き

つゞけて、おやしき木こりおろしていとを暗き中より來るも、心ち引きかへるたるやうに覺えていとをかし。關のぢ哀れ哀れとおぼえて、行くさまを見やりたれば行くへも知らず見え渡りて、鳥の二つ三つ居たると見ゆるものを、強ひて思へば釣舟なるべし。そこにこそえ涙は留めずなりぬる。いふかひなき心だにかく思へば、まして異人は哀と泣くなり。はしたなきまで覺ゆれば目も見合せられず。行くさまおほゆるに大津のいと物むづかしき家どもの中に引き入りにけり。それもめづらかなる心ちして行き過ぐれば遙々と濱に出でぬ。さし方を見やれば海づらに並びて集りたるやどりの前に船どもをきたれに並べ寄せつゝ、あるぞいとをかしき。うらぎ行きちがふ舟ども、あり。いにもゆく程に巳のときはてになりたり。まばし馬ども休めむとてま水といふ所に、かれと見やられたるほどに大きなおふちの木唯一つ立てるかげに車かきおろして馬どもうらに引きおろしてひやうしなどして「こゝにて御破子待ちつけむ。かのささはまだいと遠かめり」といふほどに幼き人一人勞れたる顔にて寄り居たればおぼくろなるものとり出で、くひなどするほどに、破子持てきぬればさまざまわがちなどして、かたへはこれよりかへりてま水にきつるとて、行ひやりてなどすなり。さて車かけてそのさまにさしいたり、車引きかへてはらへしに行くまゝに見れば、風うち吹きつゝ、浪たかくなる。行き交ふ舟ども帆を引き上げつゝ、いく。濱づらにをのことも集り居て「歌仕うまつりてまかれ」といへば、いふかひなき聲引き出で、歌ひて行く。はらへのほどにけいた舞になりぬべくなからくるいとほどせばさまにてしもの方はみづ際に車立

てたり。皆おろしたればまき波によせてなごりにはなしといひふるしたるかひもありけり。まりなる人々は落ちぬばかりのぞきてうちおらす程に天下見見えぬものども取りあげませて騒ぐめり。若きをのこもほどさし放れで、なみ居て「さゝなみや志賀の唐崎」など、例のかみ聲振り出したるもいとをかしう聞えたり。風はいみじう吹けども木蔭なければいと暑し。いづらかみみづにと思ふ。ひとしのをりはきははにはてぬれば歸る。ふり難く哀と見つゝ、行き過ぎて山口に至りかゝればさるのはてばかりになりたり。ひぐらしさかりとなき満ちたり。聞けばかくぞ覺えける。

「鳴きかへる聲ぞきはひて聞ゆなるまちやしつらむ關のひぐらし」

とのみいへる。人にはいはず。走井にはこれかれ馬うちはやして先だつもありて至りつきたれば、さき立ちし人々いとよくやすみすゝみて、心ちよげにて車かきおろす所により來たれば、しりなる人、

「うらやまし駒のあしとく走井の」といひたれば、

「まみづにかげはよどむものかは」。

近く車寄せてあてなる方に、暮るとるおぼえおろして皆おりぬ。手足もひたしたればこゝちもの思ひはるけるやうにぞ覺ゆる。石どもにおしかゝりて水やりたる樋のうへにをしきどもすゑて、ものくらひて手づからするえなどする心ちいと立ち憂きまであれど、日暮れぬな

どそゝのかす。かゝる所にては物などいふ人もあらじかしと思へども、日の暮るればわりなくして立ちぬ。いさもて行けば粟田山といふ所にぞ京よりまづ持ちて人來たる。「この書殿おはしましたりつ」といふを聞くいとぞあやしき。なきまをうかゞはれけるとまでを覺ゆる。さてなどこれかれ問ふなり。我はいとあさましうのみ覺えて來着きぬ。おりたれば心ちいとせむかたなく苦しきに、とまりたりつる人々出でまして問はせ給ひつれば、ありのまゝになむ聞えさせつる。ななきどこのこゝろありつる。あしうも來にけるかなとなむありつるなどあるを聞くにも夢のやうにぞ覺ゆる。又の日はこうじ暮して明くる日、幼き人殿へと出で立つ。あやしかりける事もや問はましと思ふも物憂けれど、ありし濱べを思ひ出づる心ちの忍びがたきにまけて、

「うき世をばかばかりみつの濱へにて涙になどりわりやとぞ見し」

と書きて、「これ見給はざらむほどにさしおきて、やがて物しね」と教へたれば「さしつ」とて歸りたり。もし見たるけしきもやとしら待たれけむかし。されどつれなくてつどもり頃になりぬ。さいつ頃つれづれなるまゝに草どもつくろはせなどせしに、あまたわかなの生ひたりしを取り集めさせて、やの軒にあて、植ゑさせしが、いとをかしうはらみて、水まかせなどせさせしかど、色づける葉のなづみて立てるを見ればいと悲しくて、

「いなづまのひかりだにこぬやがくれは軒ばのなへもものおもふらし」

と見えたる。『貞觀殿の御かたはをと、しないしのかみになりたまひにき。あやしくか

ゝる世をも問ひ給はぬは、このさるまじき御中の違ひにたれば、こゝをもけうとくおほすにやあらむ。かく事の外なるをも知り給はでと思ひて御文奉るついでに、

「さゝがにの今はと限るすぢにてもかくてはしばし絶えとぞ思ふ」

と聞えたり。かへり事なにくれといと哀に多くのたまひて、

「絶えきとも聞くぞ悲しき年月をいかにかけこしくもならなくに」。

これを見るにも見聞き給ひしかばならぬ思ふに、いみじく心ちまさりて、詠めくらすほどに文あり。「文もすれど返り事もなく、はしたなげにのみあめれば、つゝましくなむ。今日もと思へども」などをあめる。これかれそゝのかせばかへりごと書くほどに日暮れぬ。又いさもつかじかしと思ふほどに見えたる。人々「猶あるやうあらむ。つれなくてけしきを見よ」などいへば、思ひかへしてのみあり。「慎む事のみあればこそあれ。さらば來ずとなむ我は思はぬ。人のけしきばみくせぐせしきをなむあやしと思ふ」など、うらなくけしきもなければけうとく覺ゆ。「つとめては物すべき事のあればなむ。いま明日後日の程にも」などあるに誠とは思はねど、思ひ直るにやあらむと思ふべし。若しはたこの度ばかりにやあらむと試みるにやうやう又日數過ぎ行く。さればよと思ふにありしよりもげにものぞ悲しき。つくづくと思ふつゝくることは猶いかで心として祈にもえにしがなと思ふより外のこともなきを、唯この一人ある人を思ふにぞいと悲しき。人となしてうしろやすからむ女などに預けてこそ、しかも心安からむとは思ひしか、いかなる心ちしてさすらへむすらむと思ふに、猶いと死に

難くいかにせむ、形をかへて世を思ひ離るやと試みむも、語らへば又深くもあらぬなれど
 いみじうさくりもよと泣きて「さなりたまはまらるも法師になりてこそあらめ。何せむに
 かは世にもまじろはむ」とて、いみじくよと泣けば、我もえせきあへぬといみじさに、たは
 ぶれにいひなさむとて、さて「たかくははいかに給はむする」といひたれば、やをら立ち
 走りてしすゑたる鷹をさりはなちつ。見る人も涙せきあへず。まして日暮しかたき心に覺
 ゆるやう、

「あらそへば思ひにわぶるわまく難まづそる鷹ぞかなしかりける」

とぞ。日暮る、程は文見えたり。天下の程そらどならむと思へば「唯今心ち悪しくて、漸今は」
 とてやりつ。『七月十日にもなりぬれば世の人さわぐま、にほにの事年頃はま心にものしつ
 るもはなれやしぬらむと哀なま人も悲しうおぼすらむかし。しばし試みてすら齋もせむか
 しと思ひつゝくるに、涙のみだり暮すに例のごと調じて文添ひてあり。「なき人をこそ思し
 忘れざりけれとをしからで悲しきものになむ」と書きてものしけり。かくてのみ思ふに猶い
 と怪し。「珍しき人に移りてなどもなし。俄にかゝる事を思ふに心さへ知りたる人のうせ給
 ひぬる、小野の宮のおとの御めしうどともあり。これらをぞ思ひかくらむ。近江ぞあやし
 きとなどありていろめく者なれば、それらにこゝに通ふと知らせじとかねて断ち置かむ
 とならむ」といへば、聞く人「いでや、さらずともかれらいと心安しと聞く人なれば、何かは
 わざわざしうかまへ給はずともありなむ」などぞいふ。「もしさらずば光のたいのみこたちが

ならむ方こそともわれかくもわれ、唯いと怪しきを入る日を見るやうにてのみやはおはし
 ますべき。こゝかしこに詣でなども玄給へかし」など唯この頃はことごとなく明くればいひ
 暮るれば歎きて、さらにいと暑き程なりともげにさいひてのみやはと思ひ立ちて、石山に十
 日ばかりと思ひ立つ。忍びてと思へばはらからといふばかりの人も知らせず、心一つに思ひ
 立ちて明けぬらむと思ふ程に出で走りて、加茂川の程ばかりなどにぞ、いかで聞きあへつら
 む、追ひて物したる人もあり。有明の月はいと明けれど逢ふ人もなし。河原には死に人もふ
 せりと見聞けど怖しくもあらず。粟田山といふ程に行き去りていと苦しきをうち休めば、と
 もかくも思ひわかれず唯涙ぞこぼる。人やのいと涙はつれなしづくりて唯走りて行きも
 て行く。山階にて明け離るゝにぞいとけんまようなる心ちすれば、われか人かに覺ゆる。人
 は皆おくらかしさいだてなどしてかすかにて歩みいけば、逢ふもの見る人わやしげに思ひ
 て、さゝめき騒ぐぞいとわびしき。からうじていきすぎて、走井にてわりなどものすとて
 幕引きまはしてとかくするほどに、いみじくのゝしる者く。いかにせむ、誰ならむ、供なる人
 見知るべきものにもこそあれ、あなみじと思ふ程に、馬に乗りたる者あまた車二つ三つ引
 き續けてのゝしりてく。若狭の守の車なりけりといふ。立ちりとまらで行き過ぎては、思ふ
 ことなげにても行くかな、さのは明け暮れひざまづさわりくものぐしてゆのばにこそと
 あめれと思ふにも胸さくる心ちす。けすども車の口につけるもさあらぬも、この幕ちかわか
 立ち寄りつゝとあみだの騒ぐふるまひのなめう覺ゆると物に似ず。我が供の人僅にあふか

「立ちのきて」などいふめれば「例も行きゝの人よる所をは知り給はぬか。答めるは」などいふを見る心ちはいかゞはある。やり過として今は立ちて行けば、關うち越えてうちいでる濱に玄にかへりていたりたれば、先だちし人船に菰やかたひきて設けたり。物も覺えず這ひ乗りたれば遙々とさし出して行く。いと心地いと侘しくも苦しうもいみじうもの悲しう思ふと類ひなし。さるのをはりばかりに寺の中に着きぬ。ゆやにもものなどしきたりければいきて臥しかゝ。心ちせむ方知らず苦しきまゝに臥しまるびうるかなかゝ。よるになりてゆなど物して御堂に昇る。身のあるやうを偲けるかゝに申すにも涙に咽ぶ。とすてかゝいひもやられず。ようち更けてとの方を見出したれば堂は高くてもは谷と見えたり。かたき軒に木ども生ひこりて、いとこぐらかりたる。二十日の月夜更けていとわかるければこ蔭にもりて所々に前方ぞ見えわたりたる。見おろしたれば麓にある泉はかゝみのごと見えたり。高欄におし懸りてとばかり守り居たれば、片岸に草のなかにそよそよしかゝらしたるものあやしき聲するを、「こはなにぞ」と問ひたれば「鹿のいふなり」といふ。なかれの聲には鳴かざらむと思ふ程にさし離れたる谷の方より、いとうら若き聲に遙に詠め鳴きたなり。聞く心ち空なりといへばおろかなり。思ひ入りて行ふ心ちもの覺えで猶あれば、みやかひなる山のあなたばかりに、おほりの物追ひたる聲いふかひなくなきけなげにうちよばひたり。かうしも取り集めて肝を碎くこと多からむと思ふぞ、はてはあきれてぞ居たる。さて後夜行ひつればおりぬ。身よわければゆやにあり。夜の明くるまゝに見やりたればひんがしに風はいとのどかにて

霧立ちわたり、川のあなたは繪に書きたるやうに見えたり。川づらに放ち馬どものあさりありくも遙に見えたり。いと哀なり。二なく思ふ人をも、人目によりてとゞめ置きてしかば、出で離れたる序に、死ぬるたばかりをもせばやと思ふにはまづこのほだし覺えて戀しう悲し。涙の限を盡しはべる。をのこどもの中には「これよりいと近くなり。いさうくなたの身には、いまも口ひき過すと聞くぞかうかなるや」などいふを聞くに、さて心にもあらず引かれいなばやと思ふ。かくのみ心盡せば物などもくはれず。「しりへの方なる池にしぶきといふものおもひたる」といへば、「とりてもてこ」といへばもて來たりける。けにあへしらひてゆをし切りてうちかざしたるぞ、いとをかしう覺えたる。さては夜になりぬ。御堂にてよろづ申し泣き明して、曉方にまどろみたるに見ゆるやう、この寺のべたうと覺しき法師、銚子に水を入れてもて來て、右の方の座に入りくと見る。ふと驚かされて佛の見せ給ふにこそはあらめと思ふに、まして物を哀に悲しく覺ゆる。明けぬといふなればやがて御堂よりおりぬ。まだいと暗ければ海のうへ白く見え渡りて、さいふいふ人二十人ばかりあるを、乗らむとする舟の、さ待しかげのかたへばかりに見くさされたるぞいと哀にあやしき。みあかしたて參らせし僧の見送るとて岸に立てるに、唯さし出でにさし出でつれば、いと心細げにて立てるを見やれば、かれはめなれにたるらむ一つかゝに悲しくや、とまりて思ふらむとぞかゝ。をのこども「今らいねんの友かひ參らむよ」とよばひたれば「さなり」と答へて遠くなるまゝに、影のど見えたるもいと悲し。空を見れば月はいと細くて影は海のおもてに移り

てある。風うち吹ききて海のおもていと騒がしうさらさらと騒ぎたり。若きをのことも聲ほそやかにて、おも^せせにたるといふ歌を歌ひ出でたるを聞くにもつづつと涙ぞ落つる。いか
 崎山吹の崎などいふ所々見やりて蘆の中より漕ぎ行く。まだ物うかしかにも見えぬ程に遙
 なる楫の音して心細く歌ひ来る舟あり。行きちがふ程に「いづくのぞや」と問ひければ「石山
 へ人の御迎に」とぞこな^ななる。この聲もいと哀に聞ゆる。めいひおきし遅くいれば、か
 しこなりつるして出でぬれば違ひていくなめり。留めてをのこともかたへは乗りかへりて、
 心のはしきに歌ひ行く。瀬田の橋の本行きかゝるほどにぞほのぼのと明け行く。千鳥うちか
 けりつゝ飛びちがふ。物の哀に悲しき事さらに數なし。さてありし濱わに至りたれば迎の車
 出で來たる。さやうに巳の時ばかりいき着きぬ。此彼集まりてせかいにまでないひ騒ぎけ
 るとなどいへば「さもあらばわれ、今は猶去かるべき身かは」などを答ふる。おほやけにすま
 ひの頃なり。幼き人參らまほしげに思ひたれば、さうぞかせて出し立つま^殿殿へとて物した
 りければ、車のしりに乗せて、暮にはこなたさまに物し給ふべき人の、さるべきに申しつ
 て、を^ははあなたさまにときは^はにも、まして淺まし。又の日もきの^殿殿のごと參るさまにえ知
 らでよさらは一つのさうさ^殿殿、これらかれが送らせよとて、さいだちて出でにければ、獨
 罷で、いかに心に思ふらむ、例ならましかば、諸共にあらましをと、幼き心ちに思ふなるべ
 し。うちぐしたるさまにて入りくるを見るに、せむかたなくいみじく思へど、何のかひかあ
 らむ。身一つをのみ切り碎く心ちす。』かくて八月になりぬ。二日のよさり方、^殿殿はかに見え

たり。あやしと思ふに、「明日は物忌なるを、門強くさ、せよ」などうちいひ散らす。いとあさ
 ましく、ものゝわくやうにおぼへ^命命ゆるに「これさしよりかれ引きよせ念せよ念せよ」と耳
 おしそへつゝ、まねさ、めき惑はせば、我が一人のおれものにて向ひ居たれば、むげにくん
 じ果てにたりと見えけむ。又の日も日暮しいふと、「我が心の違はぬを人のあしう見なして」
 とのみあり。いといふかひもなし。五日の日は司召とて大將になどいといまさりていとめ
 づらたし^様様。それより後ぞ、少し屢見えたる。この大共うへ^院院に、院の御給はかり申さむ。
 幼き人にかうぶりせさせてむ。十の日と定めてす。事ども例の如し。ひきいれに、源氏の大
 納言物し給へり。事はて、方ふたにけ^院院にたれど、夜更けぬるをととまされり。かゝれ
 ども、こたみや限ならむと思ふ心になりたり。九、十月も、同じさまにてすぐすめり。世に
 は大上と^院院のぞけおかとして騒ぐ。我も人も物見るさじきとて渡り見ればみこしのつら近くつ
 らしと思へど、目くれておぼゆるに、これかれやいでなほ人にすぐれ給へりかし。「あなあ
 たらし」などもいふめり。聞くにもいと物のみすべなし。』しもつきになりて、大ま^院院と
 てのゝしるべき、その中には、少しま近く見ゆる心ちす。かうぶり故に、人も又あいなしと思
 ふ思ふ、わざもなく經て、とかくすれば、いと心あわたし。事はつる日、夜更けぬほどにも
 のして、行幸に侍ひでわがりぬべかりつれど、夜の更けぬべかりつれば、空胸やみてなむま
 かでぬる。いかに人いふらむ。明日はこれがきぬ着かへさせて出でむなどあれば、いさゝか
 昔の心ちしたり。「つとめて供にわりかすべきをのこともなど、まゐらざるを、かしこにも

のして、行幸にと、のへむさうすへに登りて來よ」とて、いでられぬ。よろこびにありきなどすれば、いとわはれにうれしき心ちす。それよりしも、例の慎むべき事あり。二日もかかごとになむきたるも、たよりにあるを、さもやと思ふ（唯今なむ歸り給へる）など語れば、夜更けぬるに昔ながらの心うちつぶれてぞあさましき。「唯今なむ歸り給へる」など語れば、夜更けぬるに昔ながらの心ちならましかば、かゝらましやはと思ふ心ぞいみじき。それより後もおとなし。』しはすのついたちになりぬ。七日ばかりの晝さしのぞきたり。今はいとまばゆき心ちもしにたれば几帳引き寄せて、けしきものしげなるを見て、「いで日暮れにけり。内より召しありつれば」とて立ちにしまゝに、おとづれもなく、十七八日になりけり。今日の晝つ方より、雨いといたうはらめに待て、霰につれづれと降る。まして若しやと思ふべき事も絶えにたり。いにしへを思へば我がめにしもあらじ、心の本上にやありけむ、雨風にもさはらぬものと、ならはしたりしものを、今日思ひ出づれば、昔も心のゆるぶやうにもなかりしかば、我が心のおほけなきにこそありけれ、おはれさらぬものと見しものを、それまで思ひかけられぬと、ながめ暮さる。雨の脚同じやうにて火燈す程（雨も）なりぬ。南おもてにこの頃來る人あり。足音すればさにぞあなた（あはれ）をかしく來たるはと、涌きたざる心をば、傍に置きてうちいへば、年頃見知りたる人むかひて、「おはれこれにまさりたる雨風にもいにしへ、人の障り給はさめりし物を」といふにつけてぞうちこぼるゝ涙の熱くてかゝるに覺ゆるやう、

「思ひせはが胸のひむらはつれなくてなみだをわかす物にざりけり。」

と、くり返しいはれし程にぬるところにもあらでよは明してけり。その月みたるばかりの程にて年麟は越えにけり。その程の作法例のとなれば去るさす。』さて年頃思へば、何事にかあらむ。ついたちの日は見えずして、止むべきなめりき。さもやと思ふ心遣ひせらる。ひつじの時ばかりにさきおひのゝしるぞなど人も騒ぐほどに、ふとき（ひき）過ぎぬ。いそなだ（に）こそはと思ひかへしつれど、よるもさてやみぬ。つとめてこゝに、縫ふ物とも取りがてら「昨日の前わたりは日の暮れにし」などあり。いと返り事せまうけれど猶「年の初に、腹立ちなめ（そ）」なんどいへば、少しはくねりて書きつ。かくしも安からず覺え、いふやうは、「このおしはかりし近江になむ文通ふ。さなりたるべしと、世にもいひ騒ぐ心づきなさになりけり。』さて二三日すごしつ。三日又申の時に、一日よりもけにのゝしりて來るを、「おはしますおはします」といひ續くるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつゝ、さすがに胸走りするを、近くなれば、こゝなるをのことも、中門おし開きて、ひさまづきてをるに、うべもな（く）引き過ぎぬ。今日まして思ふ心おしはからなむ。又の日は大饗とてのゝしる。いと近ければ今宵さりとともと試みむと人知れず思ふ。車の音ごとに胸潰る。よき程にて皆歸る音も聞ゆる。かどのもと（行）よりも、あまた追ひくがらしつゝ、行くを過ぎぬと聞く度毎に心は疎く、限りと聞きはてつればすべてものぞおぼえぬ。あ（あ）る日、又つとめてなほもあらで文見ゆ。かへりごとせず。又二日ばかりありて、「心の意にはあれど、いと事繁き頃にてなむ。ようさりものせむにいかならむ。恐しさに」などあり。「心ち悪しき程にてえ聞えず」とものして思ひ

絶えぬるに、つれなく見えたり。あさましと思ふに、うちもなく戯ぶれば、いとねたさに、こゝらの月印念じつるをいふに、いかなるものと、絶えていらへもなく、御寝寝たるが、うち驚くさまにて、「いづらはや寝給へる」といひ笑ひて、人わろげなるまでもあれど、岩木のごとして、明しつれば、つとめて物もいはず歸りぬ。それより後、しひてつれなくて、例のことわり、これとしてかくしてなどあるもいとにくく、いひかへしなどして、こと絶えて、二十よ日になりぬ。あらたまれともていふなる日のけしき、鶯の聲などを聞くまゝに、涙のかぬきく思ひ思ひなし。』二月も十よ日になりぬ。聞く所に、十よなん通へると、ちぐさに人はいふ。つれづれとあるほどに、彼岸に入りぬれば、猶あるよには、しやうじせむとて、うはむしろたゝのむしろの清さを敷きかへさすれば、塵拂ひなどするを見るにも、かやうの事は、思ひかけざりしものをなど思へば、いみじうて、

「うちらはらふ塵の積積るさむしろをなげく敷にはしかじとぞおもふ」。

これよりやがて長さらじきて、山寺に籠りなむに、さてもありぬべくば、いかで猶、世の人の絶え易く、そむく方にもやなりなましと思ひ立つを、人々「しやうじは、秋程よりすること、いとかしこかなれ」といへば、えさらず思ふべき。そふや思ひ思ひの事もあるを、これすすべしと思ひて、立たむ月をぞ待つ。さばれ、よろづにこの世のことは、あいなく思ふを、こぞ春吳竹植ゑむとて乞ひしを、この頃奉らむといへば、「いさやありもとぐまじう思ひにたる世の中に、心なげなるわざをやまおかむ」といへば、「いと心せばき御事なり。行基菩薩は、行く

未の人の爲にこそ實なるには心は植ゑ給ひけれ」などいひておこせられたれば、哀にありし所とて、見む人も見よかしと思ふに、涙こぼれて植ゑさす。二日ばかりありて、雨いたく降り、こちかせはげしく吹きて、一筋二筋うちかたぶきたれば、いかでなほさせむ、雨間もがなと思ふまゝに、

「なびくかな思はぬかたに吳竹のうき世のすゑはかくこそありけれ」。

今日は二十四日、雨の脚いとのどかにてあはれなり。夕つけて、いと珍しき文あり。「いと怖しきけしきにおぢてなむ日頃經にける」などぞある。返り事なりか五日、猶雨やまで、つれづれと思はぬ山々とかやいふやうに、物の覺ゆるまゝに、盡させぬものは涙なりけり。

「降る雨のあしとも落つるなみだかなこまかにものを思ひ碎けば」。

今は三月つごもりになりけり。いとつれづれなるを忌も違へがてら、まばしほかにと思ひて、縣ありきの所にに渡る。思ひさはりし事も平かになりしかば、長きまやうじ始めむと思ひ立ちて、物など取りまたゝめなどする程に、「からじは猶や重からむ。ゆるされあらば暮にかい」とあり。これかれ見聞きて、「かくのみあくがらしはつるはいと悪しきわざあり。猶こたみだに、御返りやんごとなきにも」と騒げば唯「月も見なくに、あやし」とばかりものしつ。かにはあらじと思へばいそぎ渡りぬ。つれなきはそらに夜うち更けて見えたり。例のわきたぎるとも多かれど、ほどせばく人騒がしき所にて息もえせず、胸に手を置きたらむやうにて明しつ。心とめてその事かの事ものすべかりければ急ぎぬるを催催しもあるべき心

を、又今日や今日やと思ふに、音なくて四月になりぬ。もいと近き所なるを、みかどにて車立てり。「内やおはしまさむすらすむ」などやすくもわらずいふ人さへあるぞいと苦しき。ありしよりも、まして心を切りくだきか心ちす。返り事をもなほせよなほせよといひし人さへ憂くつらし。ついたちの日、幼き人を呼びて、長きまやうじをなむ始むる。諸共にせよとわりとて始めつ。我はた始めつ。我はた始よりも、ことごとしうはわらず、たゞかはらけにかううちもりて、脇息の上に置きて、やがておしかゝりて、佛を念じ奉る。その心はへ、「唯きはめてさいはひなかりける身なり。年頃をだに、世に心ゆるびなく、うしと思ひつるを、ましてかくわさましくなりぬ。とく死なさせ給ひて菩提かなへ給へ」とこそ。行ふまゝに、涙ぞほろほろとこぼる。あはれ、今様は女も珠数引きさげ、經引きさげぬなしと聞きし時、まさり顔なさる。物ものぞやもめには成るてふなどもときし心はいづちか行きけむ。よの明け暮るゝも心もとなくいとまなきまでそこはかともなけれど行ふ。とそて（経後まゝ）に、あはれさいひしを聞く人いかにをかしと思ひ見るらむ。はかなかりける世を、なごてさいひけむと思ふ思ふ行へば、片時涙浮ばぬ時なし。人目ぞいとまさり顔なく耻かしければ、おし隠しつゝ、明し暮らす。二十日ばかり行ひたる夢に、我がかしらをとらおろして、ひたひを分くと見る。悪し善しもえ知らず。七八日ばかりありて、我が腹のうちなるくちなはありきて肝をはむ、これを治せむやうは、おもてに水なむ入るべきと見る。これもあやし善しも知らねどかくゑるし置くやうは、かゝる身のはてを見聞かむ人、夢をも佛をも用ゐるべしや用ゐるまじやと定めよと

九〇

なり。五月にもなりぬ。我が家にとまれる人のもとより「おはしまさずとも、しやうぶ葺かではゆゝしからむを、いかせむする」といひたり。「いでなにかゆゝしからむ。

世の中にある我が身かはわびぬれば更にあやめも知られざりけり」

とぞいひやらまほしけれど、さるべき人しなれば心に思ひ暮さる。かくていみはてぬればれの所にわたりて、ましていとつれづれにてあり。ながめになり（驚）れば草ども生ひ立ちてあるを、行ひのひまに掘りあかたせなどする。あさましき人、我がかどより、例のきらきらしう追ひ散らして渡る日あり。行ひま居たるほどに「おはしますおはします」との、しれば、例の如くぞあらむと思ふに、胸つぶつぶとはしるに、ひき過ぎぬれば皆人おもてをまぼりかく（世）して居たり。我はまして二時三時まで物もいはれず。人は「あな珍らか。いかなる御心なむ」とて泣くもあり。わづかにためらひて、「いみじう悔しう人にいひ妨げられて、今まにかゝる里住をして、又かゝる目を見つるかな」とばかりいひて胸のこがるゝ事はいふ限もあらず。六月のついたちの日、「御物忌なれど、みかどのまたよりも」とて文あり。怪しく珍らかなりと思ひて見れば「いた（驚）みは今も過ぎぬらむをいつまであるへにたる（驚）すみゆいど。いとびんなかめりしかばえ物せず。もの詣で、けがらひ出で来てとゞまりぬ」などある。そこらにといまだきりかぬやうもあらじと思ふに心うさもまさりぬれど念じてかへりどかく、「いと珍しきはおぼめくまでなむ。こゝにはひさしくなりぬるをげにいかでかはおぼしよらむ。さても見給ひしあたりとは、思しかけぬ御ありきの度々になむ。すべて今まで世に侍る

身の怠りなれば、さらにきこえず」とものしつ。さて思ふに、かくだに思ひ出づるもむづかしく、さきのやうに悔しき事もこそあれ、猶まばし身をさりなむと思ひ立ちて、西山に例のする寺あり、そちものしなむ、かの物忌果てぬさまにとて、四日出で立つ。物忌も、今日ぞあくらむと思ふ知るなれば、心あわたしく思ひつ、物取りまたゝめなどするに、うはむしろのまたに、つとめてくふ薬といふもの、たゞ紙の中にさし入れてありしは、こゝに行き歸るまでありけり。これかれ見出で、「これ何ならむ」といふを、取りてやがてたゞ紙の中にかく書きけり、

「さむしろのしたまつ事も絶えぬれば置かむかただになきを悲しき」

とて、文には「身をしかへねばとぞいふめれど、前れたりせさせ給はぬ世界もやあるとて、今日あむ。これもあやしき問はずがたりにこそなりにけれ」とて、幼き人のひたやごもりならむせうそこきこえにとて、ものするにつけたり。「もし問はるゝやうもあらば、これはかき置きて早くものしぬ、置いてなむ罷るべきとをものせよ」とぞいひ持たせたる。ふみうち見て、心あわだしいげに思はれたりけり。返り事には、「よろづいことわりにあれど、まづいくらむはなにへおにぞ。頃は行ひにもびんなからむを、こたみばかりいふこと聞くと思ひて、とまれいひあはずべき事もあれば、唯今渡る」とて、

「あさましやのどかにたのむとこのうへをうちかへしける波の心よ。」

いとつらくなむ」とあるを見れば、まいて急ぎまたがりてもものしぬ。山ちなでふ事なけれどあ

はれにいにしへ諸共ののみ時々はものせしものを、又やむことありし二三四日もこの頃のほどぞかし。宮仕も絶え籠りて、諸共にありしはなど思ふ。げに遙なる道すがら、涙もこぼれ行く。供人三人ばかり添ひていく。まづ僧坊におりゐて、見出したれば、前にませゆひわたして、また何とも知らぬ草ども繁き中にぼらたん草どもいと情なげにて、花散り果て、立てるを見るにも、萌ゆるうへはとよといふ事を、かへし覺えつ、いと悲し。湯などものして御道みちはと思ふ程に、里より心あわたしいげにて人は思はれ給はる来たり。とまれる人の文あり。見れば「唯今殿みまより御文もて、それがしなむ参りたりつる。さうして参り給ふ事あり。かつかつ参りて、とゞめ聞えよ、唯今渡らせ給ふといひつれば、ありのまゝにはや出でさせ給ひぬ、これかれも追ひてなむ参りぬるといひつれば、いかやうに思してにかあらむとぞ御けしきありつるを、いかゞさは聞えむとありつれば、月頃の御ありさま、さうじのよしなどをなむ物志つれば、うち泣きて、とまれかくまれ、まづとくを聞えむとて、急ぎ歸りぬるを、さればるなうそこに御せうそくありなむ。さる用意せよ」などぞ、いひたるを見て、うたて心幼くおどろおどろしげにや、もしいななつらむ、いと物しくもあるかな、けがれなどせば明日明後日なども出でなむとするものと思ひつ、湯の事急がして道にのぼりぬ。あつければ、まばし戸推しあけて見わたせば、塔いと高くて立てり。山めぐりて、ふところのやうなるに、木立いと繁く面白けれど、關のほどなれば唯今暗がりてぞある。しよしよや行ふとて法師はらさうぞけば、戸おしあけて念ずるほどに、時は山寺わぎの貝四つふくるほどになりた

り。大門の方に、「おはしますおはします」といひつゝ、のゝる音すれば、あげたるすどもうちおろして見やれば、こまより、火ふたともしみともし見えたり。幼き人けいめいして出でたれば、車ながら立ちてある。「御迎になむ参りきつるを、今日までこのけがらひあればえおりぬを、いづくにか車はよすべき」といふに、いとものくるはしき心ちす。返りみかに、「いかやうに思ひてかかく怪しき御ありきはありつらむ。今宵ばかりと思ふ思ふ侍りてなむのぼり侍りつれば、ふじやうのこともおはしますなれば、いとわりなかるべき事になむ。夜更けて侍りぬらむ。とく歸らせ給へ」といふを始めて行きかへる事度々になりぬ。一丁の程をいしばしおりのぼりなどすれば、ありく人人こうじて、いと苦しうするまでなりぬ。これかれなどは「わないとほし」など弱き方方まにのみいふ。このありく人、「すべてきんぢいと口をし。かばかりの事をば、いひなさぬはなどを。御氣色悪し」とて、なきにも言なく。「されどなどてか更にもものすべき」といひはてつれば、「よしよしかくけがらひたれば、とまるべきにもわらず。いかはせむ。車かけよとあり」と聞けば、いと心安し。ありきつる人は、「御送りせむ。御車のしりにてまきる心心更にまたは詣で來じ」とて泣く泣く出づれば、これをたのもし人にてあるにいみじうもいふかなと思へども、ものいはであれば人など皆出でぬと見えてこの人は歸りて御送せむとまて言つれど、きんぢはよからむ時にをとて、おはしましぬ」とてまゝと泣く。いとほしう思へど、あなしれそ言とをさへかくてやむやうもあらじなどいひならさむ。時は八つになりぬ。道はいと遙なり。「御供の人はとりあひけるに従ひて、京のう

七字以下十の御ありきよりも、いとすくな言りつる」と人々いとほしがりなどする程に、夜は明けぬ。京へ物しやるべき事などあれば、人出し立つ。大夫「よべのいとおぼつかなきを御かどのへんにて、御けしきも聞かせむ」とてもものすれば、それにつけて文物す。「いとあやしう、おどろおどろしかりし御ありきの、夜もや更けぬらむと思ひ給へしかば、たゞ佛をおくり聞えさせ給へとのみ祈り聞えさせつる。さてもいかに覺えたる事ありてかはと思ひ給へれば、いまたあまたいたくて罷り歸らむ事も難かるべきとちしける」など、こまかに書きて端に、「昔も御覽せし道とは見給へつゝ、罷り入りしかどたぐひなく思ひやり聞えさせし。今いととくまかでぬべし」と書きて、苦ら着いたる松の枝につけてものす。曙を見れば、霧か雲かと思ゆるもの立ち渡りてあはれに心すとし。晝つ方出でつる人歸り來たり。「御文は出で給ひにければ、をのこどもに預けて來ぬ」とものす。さらずともかへりごとあらじと思ふ。さて晝は日一日例の行ひをし、夜はあかし言の佛を念じ奉る。めぐりて山なれば晝も人や見むの疑なし。すだれ巻き上げてなどあるに、この時過ぎたる鶯の、鳴き鳴きて言のたちからしに、人く人くとのみいちはやくいふにぞすだれおろしつべく覺ゆる。そもうつし心もなきなるべし。かくて程もなくふじやうのことあるを、出でむと思ひ置きしかど、京は皆形ことにいひなしたるには、いとほしたなき心ちすべしと思ひて、さし離れたるやにおりぬ。京よりはばなど思しき人ものしたり。「いとめづらかなるすまひなれば、まづ心もなくてなむ」言語ひて、五なるほど言月さかりになりたり。木蔭いとあはれなり。山陰の暗がりたる所を

見れば、はたかして四字はたるはあろくまでもの思ひうすかりし時二聲と聞くとはなしにと、腹だ、しかりし時鳥もち解けて鳴く。水鶏はそこと思ふまでたゞく。いとみじげさまさるもの思ひのすみかなり。人やりならぬわさなれば、問ひとぶらはぬ人ありとも、ゆめにつらくなど思ふべきならねば、いと心安くてあるを、唯かゝるすまひをさへせむとはかまへたりける身の宿世ばかりをながむるにそひて、悲しき事は日頃の長しやうとまづつる人の、たのもしげなけれど、みゆづる人もなければ、かしらもさし出でず。松の葉ばかりに思ひなりにたる身の同じさまにてくはせられたれど、えもくひやらぬを見るたびにぞ涙はこぼれまざる。かくてあるはいと心安かりけるを唯涙もろなるこそいとくるしかりけれ。夕暮の入相の聲ひぐらしのね、めぐりの小寺ちひさき鐘ども、我も我もとうちたゞきなどし、前なる岡に神の社もあれば、法師ばら讀經法華經まつりなどする聲を聞くにぞいとせむ方なくものは覺ゆる。かく不淨なるほどは、夜晝の暇もあればはしの方に居て詠むるを、この幼き人「入りぬ入りぬ」といふけしきを見れば、物を深く思ひ入れさせじとなるべし。「などかくはのたまふ。猶いとあやむじ。ねぶたくも侍り」などいへば、「ひた心になくもなりつべき身を、そこにさはりて今まであるを、いかせむする。世の人のいふなるさまにもなりなむ。むげに世になからむよりは、さてあらばおぼつかかなからぬほどに通ひつゝなき物に思ひなして見給へ。かくていとありぬべかりけりと、身一つに思ふを、唯いとかくあしき物して、物を參れば、いといたく瘦せ給ふを見るなむいとみじき。形ことにてもきやうにある人こそいみじきかたちとてはと思へど、そ

れなむいとどかしう見ゆることなれば、かくかく思ふ」といへば、いらへもせでさくりもよゝになく。さて五日ばかりにきよまはりぬればまた堂に上りぬ。日頃物しつる人今日ど歸りぬる。車の出づるを見やりてつくづくとたてれば、木蔭にやうやういくも、いと心すぞし。見やりて詠めたてりつる程に、けやあがりぬらむ、心ちいとおぼえてわさといと苦しければ山籠りしたるせと呼びて護身せにたがる。夕暮になるほどに、念ず聲に加持したるを、あなみじと聞きつゝ、思へば、むかし我が身にあらむこととはゆめに思はで、あはれに心すぞき事とてはた高やかに思ふにも、うき心ちのあまりにいひにもいひて、あなゆゝしとかつは思ひしさまに一つ違はず覺ゆれば、かゝらむとて、物思はせいはかでなりけると、思ひ臥したるほどに、我が元のはらから一人また人も歸りも歸にものしたり。這ひ寄りてまづいかなる心ちぞとさとりて、思ひがたくまゐる日よりも、山に入り立ちてはいみじく物のおぼえはべるにとてふだんすまるなりとて、よゝと泣く。人やりにもあらねば、念じ返せどえ堪へず。泣きみ、わかるおぼみ、よろづの事をいひあかして、明けぬれば「るゐしたる人いそぐ事あるを今日は歸りて後に參り侍らむ。そもそもかくてのみやは」などいと心ばそげにいひても、かすかなるさまにて、歸る心ち、けしうはあらねば、例の見送りて詠め出したるほどに、またをさなくおぼとのしりてくる人あり。さならむと思ひてあれば、いとにぎはしく、さと心ちしてうつくしき者ども、さまさまにさうぞき集りて、二車ある馬どもなどふさに引き散し、かいて騒ぐ。破子やなにやとふさにあり。誦經うちし、哀げなる法師ばらに、かたびらや

布やなど、さまざまにくばり散らして、物語のついでに、「多くは殿の御もよほしにてなむ詣で來つる。さうして物したりしかど出でなかりにき。又物したりともさこそあらめ、おのが物せむにはと思へば、えものせず。のぼりてあがちたてまつれ。法師ばらにも、いとたいだいしく經教へなどすなるは、なでふとぞとなむのたまへりし。かくてのみはいかなる人かある。世の中にいふなるやうに、ともかくも限になりておはせば、いふかひなくともあるべし。かくて人も仰せざらむ時、歸り出で、ぬ給へらむも、をこにぞあらむ。さりとも今一度はおはしなむ。それにさへ出で給はずばいと人笑へにはなりはて給ふらむ」など、ものほこりにいひのゝしるほどに、西の京に侍人々々におはしましぬとて、奉らせたるとて、天下のものふさにあり。山の末と思ふやうなる人のために遙ぞあるに、となるにも身のうきこととはまづ覺えけり。夕影になりぬれば急ぐとあればえひきも聞えず、おぼつかなくはあり、「猶いとこそあしけれ。さていつともおぼさぬか」といへば「唯今はいかにもいかにも思はず。今物すべき事あらばまかでない。つれづれなることなればにこそあれ」などと、とても、出でむも物行ひみむつき（行）。さや思ひなるとて、出さじと思ふなる人のいはするならむ、ささらでも何わざをかせむずと思へば、「かくてあべきほどばかりと思ふなり」といへば（かくて以下三行）「こもなくおぼすにこそあなれ。萬の事よりも、この君のかくそるなるまやうじをしておはするよ」と、かつうち泣きつゝ、車にものすれば、こゝなるこれかれ、送りに立ち出でたれば、「思ふども皆かんだうにあたり給ふなり。よく聞えてはや出し奉り給へ」などい

ひ散らして歸る。この度のなごりは、まいていとこよなくさうざうしければ、我ならぬ人はほとほとなほ思ひたり。かくおもてかおもてかにとさまかくさまにいひなされるれど、我が心はつれなくなむありける。悪しとも善しともあらむを辭むまじき人はこの頃きやうに物し給はず。文にてかくてなむとあるにはたよかなり。忍びやかにてさて暫しも行はるとあれば、いと心安し。人はなほし（思）すかしがてらに、さもいはるゝにこそあらめ、限なき腹を立つとかゝる所を見置きて歸りにしまゝにいかにもおとろけて（思）ず、いかにいかにもなりなば、ゑるべくやはありけるなど思へば、これより深く入るともぞおほえける。今日は十五日、いもひなどしてあり。からく催していをなごものせよとて、けさ京へ出し立て、思ひながむるいほどに、空暗き松風音高くて、我（思）こほとなき今しました降りくべかるらむものを、道にて雨もや降らむ、神もや鳴りまさらむと思ふに、いとゆゝしう悲しくて佛に申しつればにやあらむ、晴れて程もなく歸りたり。「いかにぞ」と問へば「雨もやいたく降り侍ると思へば、神の鳴りつる音になむ出で、まうで來つる」といふを聞くにもいとわはれにおほゆ。こ（思）びのたよりにぞ文ある。「いとあさましくて、歸りにしかば、又々もさこそあらめ、うく思ひはてにたればと思ひてなむ。若したまきかに出づべき日あらば告げよ。迎へはせむ。怖しき物に思ひ果てにたれば、近くはえ思はず」などぞある。又人の文どもあるを見れば、「とほてさのみやはあむらとけける。日の經るまゝにいみじくなむ思ひやる」などさまざまに問ひたり。又の日返り事す。さてのみやはとある人のもとに、「かくてのみとしも思

ひ給へねど、詠むるほどになむ元知、はかなくて過ぎつ。日敷ぞつもりにける。

かけてだに思ひやはせし山深く入りわひの鐘に音を添へむとは。

又の日かへりごとあり、「事は書きあふべくもあらず。入相になむ肝碎く心ちする」とて、
「いふよりも聞くぞ悲しき敷島の世にふるさとの人やも元知になりぬ」とあるをいとわはれに悲しくながむる程に、とのゐの人数多ありしなかに、いかなる心あるにかありけむ、こゝにある人の許に、いるをう元知せたるやう、「いづれもおろかに思ひ聞えさせざりし御すまひなれど、まかでしよりは、いと珍らかなるさまになむ思ひ出で聞えさする。いかにおもとたちも思し見奉らせ給ふらむ。賤しきもといふなれば、すべてすべし聞えさすべき方なくなむ。

身を捨て、うきをも知らぬ旅だにも山路にふかく思ひこそ入れ」といひたるを、もて出で、讀み聞かするに、又いといみじ。かばかりの事も、又いとかく覺ゆる時あるものなりけり。「はや返どせよ」とてあれば、をだ巻はかく思ひ知る事も難き事よと思ひつるを、御まへにもいとせきあへぬまでなむ思しためるを見奉らむ唯推し量り給へ。
思ひ出づる時ぞかなしき奥山のこのしたつゆのいと元知しげきに」となむいふめる。大夫元知「一日の御かへりいかで賜はらむ。又かんだうありなむをもて参らむ」といへば、「なにかは」とて、「かく即ち聞えさすべく思うたまへしを、いかなるにかあらむ、詣で難くのみ思ひてはんべめるたよりになむまかでむとは、いつとも思う給へわかれぬ

ば、聞えさせむ方なく」など書きて「何事にかありけむ、御はしがきはいかなる事にかありけむと思ふ給へ出でむに、ものしかんべければ更に聞えさせず。あなかしこ」など書きて、出し立てたれば、例の時しもあれ雨いたく降り神いといたく鳴るを、胸ふたがりて歎く。少し静りて暗くなる程にぞ歸りたる。物のいと恐しかりつるありさまのわたりなどいふにぞ、いとぞいみじき。返り事を見れば、「一夜の心ばへよりは、心よわげに見ゆるは、行ひ弱りにけるかと思ふにもわはれになむ」などぞある。その暮れて又の日なま元知し。をばだつ人とぶらひに物したり。破子などあまたあり。「まづいかで、かくは何事などせさせ給ふにかあらむ。ことなきことあらでは、いとびんなきわざなり」といふに、心に思ふやう身のある事を、かきくづしいふにぞ、「いとことわり」といひなりて、いといたく泣く。日暮し語らひて、いと夕暮の程、例のいみじげなる事どもいひて、鐘の聲どもし侍る程にぞ歸る。心深く物思ひえる人にもあれば、誠に哀とも思ひいくならむと思ふに、又の日、旅に久しくもありぬべきさまの物どもあまたある。心には、いひ盡すべくもあらず、悲しう哀なり。歸りし空なかりし言の葉の中に「こだかきみちを分け入りけむと見しまへに、いといといみじうなむ」などよろづ書きて、

「世のなかの世のなかならば夏草のまげき山邊もたづねざらまし元知物を、かくておはしますを見給へおきて、歸ること、思ふ給へしに、寝ぬる目も皆くれ惑ひてなむ。あり元知きみ深く物思し亂る元知かめるかな。

世の中はおもひの外になるたきのふかき山路をたれ知らせむ」

など、すべてさし向ひたらむやうに、こまやかに書きたり。鳴瀧といふぞこの前より行く水なりける。返りごとにも思ひぬたるかぎり物して、「たづねたまへりしも、げにいかでと思ふ給へりし」とてたまへり以下、二十字流本無

「物おもひの深さくらべに來て見れば夏のまげりも物ならなくに道西。

まかでも事は、いつともなけれど、かくのたまふ事なむ、思ふ給へ煩ひぬべければ、

身ひとつのかくなる瀧を尋ねればさらにかへらぬ水もすみけり

と見ればためしある心ちしてなむ」などのしつ。又ないしのかんの殿鳥羽よりとて賜へる御かへりに、心細くかさかきて、うはぶみに「西山より」といふたるを、いかゞ思しけむ、又ある御かへりに、「鳥羽のおほさとより」とあるを、いとをかしと思ひけむ、いかなる心々に持たるにかありけむ。かくしつ、日頃になり、詠めまざるに、ある修行者、御嶽より熊野へ大峯通りに越えけるがごとなるべし、

「外山だにかゝりけるをとまら雲のふかき心は知るも知らぬも」

とて落したりけり。かくななど見つゝ、經る程に、ある人畫つ方、大門の方に馬のいなゝく聲して、人のあまたあるけはひしたり。木のまより見通しやりたれば、姿なほ人あまた見えて、歩み歩みあるへ三行。中に關白殿のともえのすけと申しけるとかやなめりと思へば、大夫よりか三行出して、「今まで聞えさせつべりつるかしてこまり、取り重ねてとてなむ参り來

たる」といひ入れてき蔭に立りやすらふさま、きやう覺えていとをかしかめり。このことは、後にといひし人もほりあればそれに猶しもあらぬやうにあればそれになほしめあらぬやうに、いたく氣色ばみ立てり。「返り事はいと嬉しき名なるを、早く此方に入り給へ。」とささぎの御不玄やうはいかで事無かるべく祈り聞えむ」と物したれば、歩み出で、高欄におしかゝりて、まづてうづななどのしてゐたり。萬の事ともいひもてゆくに「昔こゝは見給ひしは、覺えさせ給ふや」と問へば、「いかゞは。いとたしかにおぼえて、今こそかく疎くても候へ」などいふを思ひまはせば、物もいひさして聲かはるこゝちすれば、暫しためらへば、人もいみじと思ひて、とは身に物もいはず。さて「御こそななどかはらせ給ふなるはいとかはらせ給ふなるは、いとことわりにはあれど、更にかくおぼさじ。世にかくて止み給ふやうはあらじなど、ひがさまに思ひなしてにやあらむ」いふ。「かく参らば、よく聞え合せよなどのたまひつる」といへば「などか人のさはのたまはずとも、今に入りなむ」などいへば五字流本無、さらば同じくは今日出でさせ給へ。やがて御供仕うまつらむ。まづはこの大夫のまれまれ京に物しては日だにかたぶけば山寺へと急ぐを見給ふるに、いとなむゆゝしき心ちし侍る」などいへど、氣色もなければ、しばしやすらひて歸りぬ。かくのみ出で煩ひつゝ、人もとぶらひつきぬれば、又は問ふべき人もなしとぞ心のうちに覺ゆる。さて經るほどに、京のこれ伊勢の許より、文どもあり。見れば、「今日殿おはしますべきやうになむ聞く。にたみさへおろすば、いとつくたましきさまになむ世の人も思はむ。又はた、世に物し給はじ。さらむ後に物したらむ、いかゞ笑へならむ」と

人々同じ事どもを物したるに、いとあやしき事にもあるかな、いかにせむ、こたみは世にし
ぶらすべくも物せじと思ひ騒ぐ程に、我が頼む人、物よにたゞ今のぼりけるまゝに來て、天
下の事語らひて「げにかくてもしばし行はれよと思ひつるを、を^ここの君いと口惜しうなり
給ひにけり。はや猶物しね。けふも日ならば諸共にものしね。今日も明日も迎へに參らむ」な
ど、うたがひもなくいはるゝに、いと力なくおもひわづらひぬ。釣するあまのうけばがり、思
ひ亂るゝにのゝしりて物に似ぬ。さなめりと思ふに心ち惑ひたちぬ。こたみはつゝむに化と
なく、さし歩みて、たゞ入りに入れば、侘びて几帳ばかりを引き寄せて、はくはかくるれど何
のかひなし。かうもりすゑす、れきあげへ^{おぼ}ち置きなどして^をを見て「あな恐ろし。い
とかくは思ひが^あずこそありつれ。いみじくけうとくてもおはしけるかな。もし出で給ひぬべ
くやと思ひてまうで來つれどかへりては罪得べかめり。いかに大夫、かくてのみあるをばい
かと思ふ」と問へば、「いと苦しう侍れどいかは」とうちうつぶして居たれば、「あはれ」と
うちいひいひて、「さらばともかくも、さむぢが心^を、出で給ひぬべく^は車寄せさせよ」とい
ひも果てぬに、立ち走りて散りかひたる物ども唯取りに包み、袋に入るべきは入れて車ども
に皆入れさせ、引きたるせさうなども放ち、たくり^はたる者ども、みしみじと取り拂ふ。ふ
り拂ふに、こゝちはあきれて、あれか人かにてあれば、人は目をくちせいとよくゑみてまは
かり居たるべし。このことかくすれば出で給ひぬべきにこそはあめれ。佛にこのよし申し
給へ。例の作法なる」とて、天下のさるがうことをいひのゝしらるめれど、ゆめに物もいはれ

ず。涙のみうけれど、念じかへしてあるに、車寄せていと久しくなりぬ。申の時ばかりに物せ
しを、火ともすほどになりけり。つれなくて動かねば、「よしよし我は出でなむ。さむぢ^に
ま^あすとして立ち出でぬれば、とくとくと手を取りて、泣きぬばかりにいへば、いふかひもな
きに出づる心ちぞさらに我にもあらぬ。大門引き出づれば、乗りくは^はりて、道すがらうち
も笑ひぬべき事どもを、ふさにあれど、ゆめぢかものぞいはれぬ。このもろともなりつる人^々
も、暗ければあへなむとて、同じ車にあれば、それを時々いらへなどする。はるはると到る程
に、亥の時になりたり。京には、晝、さるよしいひたりつる人々、心づかひしちりかいはき、
戸どもあけたりければ、われにもあらずながらおりぬ。心も苦しければ、几帳さし隔で、う
ち臥す所にこゝにある人、ひやうと寄り來てふすといふ。「なでしこの種取らむとま侍り^は
かど根もなくなりにけり。吳竹も一すぢ倒れて侍りし。つくろはせしかど」などいふ。唯今い
はでもありぬべき事かなと思へば、いらへもせであるに、ねぶるかと思ひし人^々、いとよく聞
きつけて、このたびとり^は車にて物しつる人の、さうじを隔で、あるに、「聞い給ふや。こゝ
にことあり。この世をそむきて、家を出で、菩提を求むる人に、唯今こゝなる人々がいふを
聞けば、なでしこはなでおほしたるや、くれにければたてやり^はやとはいふ物か」と語れ
ば聞く人いみじう笑ふ。あさましうをしかければ露ばかり笑ふ氣色も見せず。かゝるに夜や
うやうなればばかりになりぬるに、「方はいづかたかふたがる」といふに、數ふればうへもな
くこなたふたがりたりけり。「いかにせむ。いとからさわぎかな。さ^は諸共に近き所へ」など

あれば、いらへもせで、おな物くるほし、いとたとしへなき様にもあるべかなるかなと思ひ臥して、更に動くまじければ、さふりはへこそはすべかなれ、方明きなばこそは参りくべかなれと思ふに、例の人「ゆか^{ゆか}の物忌になりぬべかりけり」など惱ましげにいひつゝ、出でぬ。つとめて文あり。「夜更けにければ、心ちいと惱ましくてなむ。いかにぞ。はやとしみをこそ玄給ひてめ。この大夫のさもふつゝ、かに見ゆるかな」などをあめめる。何かは、かばかりぞかしと思ひ離るゝものから物忌はてむ日いぶかしき心ちぞ添ひて覺ゆるに、六日を過ぎて七月三日になりたり。「晝つ方渡らせ給ふべし。こゝに侍へさなむ仰事ありつる」といふ。物ども、來たれば、これかれ騒ぎて、日頃みだれがはしかりつる所々をさへ、こほこほと造るを見るに、いと傍いたく思ひ暮すに、暮れはてぬれば來たる。をのことも「御車のさうぞくなども、みなしつるを、など今まではおはしまさざらむ」などいふ程に、やうやう夜もふけぬ。ある人々「猶あやし。いざ人して見せに奉らむ」などいひて、見せに遣りたる人歸りにて、「唯今なむ御車のまやうぞく解きて、みずぬしんばらも皆亂れ侍りぬ」といふ。さればよとぞ又思ふに、はしたなき心ちすれば、思ひ歎かなど^三、更にいふ限なし。山ならまし時、かく胸ふたがる目を見ましやと、こよなく思ふ。ありとある人も、あやしあさましと思ひさわぎあへり。事ども三夜ばかりに來すなりぬるやうにぞ見えたる。いかばかりのことにてとだに聞かば、やすかるべしと思ひ亂るゝ程に、まらうぞ物したる。心ちのむつかしきと思へど、とかく物いひなどするにぞ少し紛れたるぞ。さて明けぬれば、大夫「何事によりてにかあり

けむと、参りて聞かむ」とて物す。「よべは惱み給ふ事なむありける。俄にいと苦しかりしかばなむえ物せずなりにしとなむのたまひつる」といふしもぞおいかゝりにあるべかりけるとぞ覺えたる。さはりにぞあるを、もしとだに聞かば、何を思はましと思ひむつかる程に、なしのかんの殿^殿より、御文あり。見れば、まだ山さかとおぼしくて、いとあはれなるさまにのたまへり。「などかはさびしげさまさるすさびをもし給ふらむ。されどそれにもさはり給はぬ人もありと聞くものを、もて離れたるさまにのみいひなし給ふめれば、いかなるぞと覺束なきにつけても、

妹背川むかしながらのなかならば人のゆき、のかけは見てまし」。

御かへりには、「山のすまひは秋の氣色もこ給はむとせしに、又憂き時のやすらひにて中空になむ。しげさは知る人もなしとこそ思ふ給へし。いかに聞し召したるにか、おぼめかせ給ふにもげにまた、

よしや身のあせむなげきは妹背山なかく水の名もかはりけり」

などぞ聞ゆる。かくて、その日をひまにて、又物忌になりぬと聞く。明くる日こなたふたがりたる。またのひとひを見むかしと思ふ心こりすまなるに、夜更けて見えられたり。一夜の事どもしかじかといひて「今宵だにとて急ぎつるを、思みたるべきに、皆人物しつるを出したて、やがて見すて、なむ」など、罪もなくさりげもなく、いふかひもなし。明くれば、知らぬところ物しつる人々、いかにとてなむ出で來ぬ。それより後も七八日になりぬ。あがたあ

るきの所は、御せんなどあれば、諸共にとて慎む所にわたりぬ。所かへたるかひなく午の時ばかりに俄にのゝしる。あさましや。「誰かあなたのかどはあけつる」などあるじも驚き騒ぐに、ふと這ひ入りて、日頃例のからよりするて行ひつるも俄に投げ散らし珠数もまきにうちわけなど、ちうがはしききに、いとぞあやしき。その日のどかにくらして又の日歸る。』さて七八日ばかりありて、初瀬へ出で立つ。巳の時ばかり家を出づ。人いと多く、さらさらうて物すめり。未の時ばかりに、このあせちの大納言（大納言）の領し給ひし、宇治の院に至りたり。人はかくてのゝしれど、我が心ははつかにて、（心）めぐらせば、あはれに心に入れてつくろひ給ふと聞きし所（所）によ（よ）か（か）し。この月にこそは、御はてはしつらめ、程なく荒れにたるかなと思ふ。こゝ（こゝ）の預りまけるものゝ、まうけをしたれば、建てたるものゝ、こゝのなめりと見る物、とばり、すだれ、網代屏風、黒がいの骨に朽葉のかたびらかけたる几帳ども、いとつきづきさきもあはれとのみ見ゆる。こうじにたるこ作風は拂ふやうに吹きて、頭さへ痛きまであれば、かざかくれ作りて見出したる。やゝ木くらくなりぬれば、鶺鴒ども篝火さし燈しつゝ一人はさしいきたり。をかしく見ゆる事限なし（事限なし）。頭の痛さの紛れぬればはしのす巻きあげて、見出して、あはれ我が心とまうでし旅、かへさにあがたの院にぞゆきかへし（かへし）せしこゝ（こゝ）になりけり。見しあせち殿のおはして物など仰せ給ふめりしは哀にもありけるかな、いかなる世に、さだにありけむと思ひ續ければ、目もあはで夜中過ぐるまでながむる。鶺鴒ども、のぼりくだり行きちがふを見つゝは、

「かへまたとこがるゝことをたづねれば胸のはかに（はかに）行（行）は鶺鴒なりけり」

など覺えて、猶見れば、曉がたには、ひきかへて、いさりといふものをぞする。又なくをかしくあはれなり。明けぬれば、急ぎ立ちて行くに、立野の池、泉川、はじめ見しには違はであるを見るも哀にのみ覺えたり。よろづにおぼゆる事いと多かれど、物騒がしくにぎはしきに紛れつゝあり。よゆうだての森に車とめて、破子などものす。皆人の口うまげなり。春日へとて過ぐ。院のいとむつかしげなるに、とまりぬる。あはれより立つほどに、雨風いみじく降りふ（降りふ）く。三笠山をさして行くかひもなく濡れ惑ふ人多かり。からうじて詣でつきてみてぐら奉りて初瀬さまに趣く。飛鳥にみあかし奉りければ、唯くぎぬきにくる（ぬき）を引き懸けて見れば木立いとをかしき所なりけり。庭清げにぬもいと（ぬも）飲（飲）まゝほしければ、うべやどりはすべしといふらむと見えたり。いみじきあめいやまさりなればいふかひもなし。からうじてははいら（はいら）にいたりて、れいのととかくして出で立つほどに日も暮れはてぬ。雨や風猶やます。火ともしたれど、吹きけちていみじく暗ければ、夢の道の心ちしていとゆゝしく、いかなるにかとまで思ひ惑ふ。からうじて祓へ殿に至り給ひければ、雨も知らず。唯水の聲のいとほげしきを、うきぬなりと聞く。御堂にもものする程に、こゝちわりなし。おぼろげに思ふ事多かれどかくわりなきに、物覺えずなりにたるべし。何事も申さずで明けぬといへど、雨猶おなじやうなり。夜べに懲りてむげに盡こになしつ。昔せで渡る森の前を、さすがにあ（あ）かま（かま）かま（かま）と唯手を掻きおもてを振り、そこらの人のあぎとふやうにすれば、さすがにいとせむ

方なくをかしく見ゆ。つば市に歸りて、としみなどいふいふれど、我は猶猶やうじなり。そこより始めてあるじする所行きもやらずあり。物かつげなどするに、手を盡してものすめり。『泉河水まさりたり。いかに』などいふほどに『宇治より舟の上手具して参れり』といふがわづらはし。例のやうにて、ふとわたりなど男方には定むるを、女方に猶舟にてをとれば、『さらば』とて皆乗りて遙々と下る。心ちいとらうあり。楫取より始め歌ひの、しる。宇治近き所にて、又車に乗りぬ。さて例の所には、方悪しとてとまりぬ。さか信信用意したりければ、鶴飼數を盡して、一河浮きて騒ぐ。『いざ近くて見む』とて岸づらに物建て、まきまきなど取りもていきて、おられたれば、足の下に鶴飼ちかからはこつしどもなどまだ見ざりつる事なればいとをかしう見ゆ。さかかかじたる心ちなれて夜夜の更くるも知らず、見入りてあればこれかれ『今は歸らせたびなむ。これよりほかに、今はなきを』などいへば、『さわきさわき』とてのほりぬ。さてもあかず見遣ればい例の夜一夜ともしわたる。いさ、かまどろめばふなばたをこほはと打ち叩く音に我をしも驚かすとんんやうにぞさんさん。明けて見ればよるの鮎いと多かり。それよりささき所々に、遣りあがつめるも、あらずしきわざなり。ひよいひよ程にたるはしかば、暗くぞ京に來着たる。我もやがていづくと思ひつれど、人もこうじたりとて、えものせず。又の日もひるつ方、こゝなるに文あり。『御迎にもと思ひしかども、こゝろの御ありきにもあらずりければ、びんなく覺えてなむ。例の所にか、唯今物に』などあれば、人々はやばやとそゝのかして渡りたれば即ち見えたり。かうしもあるは昔のとをたとしへかく思ひ出づ

らむとてなるべし、つとめてはかへりあるじの近くなりたればなどつきづきしういひなしつ。あしたのかごとがちになりたるも、今更にと思へば悲しうなむ。『八月といふは明日になりたれば、それより四日例の物忌とかあきて二度ばかり見えたり。かへりあるじははて、いと深き山寺に修行せさすとてなどきては。三四日になりぬれど音なくて雨いといたく降る日、心細げなる山住は人とふものところ聞きしか。さらぬは、つらき物といふ人もあり』とある。返りごとに『聞ゆべきものは、人より先に思ひよりながら、信物と知らせむとてなむ露よりながらもの知らせむとてなむ露。露けさはなかりしもあらずと思ふ給ふれば、よその雲むら雲もあいなむ』とものしけり。又も立ちかへりなどあり。さて三日ばかりの程に、『今日なむ』とてようざり見えななり。常にしもいかなる心の、え思ひあへずなりにたれば、我らつれなければ人はた罪もなきやうにて七八日の程にぞ僅に通ひたる。『長月のつごもりいと哀なる空のけしきなり。まして昨日今日風いと烈しく、時雨うちまつ、いみじく物哀に覺えたり。遠山を眺めやれば、こんざうを塗りたるとやいふやうにて、霰降るらしとも見えたり。』野のささいかにをかしからむ。見がてら物に詣でばや』といへば、前なる人『げにいかにめでたからむ。初瀬にこの度は忍びたるやうにて、おぼし立てよかし』などいへば、『こども試みむとていみじげにて詣でたりしに、石山の御心をまづ見果て、春つ方さも物せむ。そもそもさまでやは。猶うくて命あらむ』など、心細うていはる。『袖ひづる時をだにこそなげきしか身さへ時雨のふりも行くかな』。

すべて世にふる事、かひなくわぢきなき心ちいとする頃なり。さながら明け暮れて、廿四に
 なりにたり。明くれば寝て臥すを事にてあるぞいと怪しく覺ゆれどいかせむ。けさも見出
 したれば、屋の上の霜もいと白し。わらはべよへの姿ながらしもくちまじなはむとて騒ぐも
 いと哀なり。「あな、さも雪はづかしき霜かな」と口おほいしつゝ、かゝるみれの頼むべきも
 と思ふもものうち聞えける、たゞならずなむおほえける三十一。神無月も、せちに別れしみつ
 過ぎぬ。霜月も同じ事にて、二十日になりにつければ、今日見えたりし人、そのまゝに、廿
 日跡を断ちて、文のみぞ二度ばかり見えける。かゝのみ胸安からぬと思ひつきにたれば心弱
 き心ちして、ともかくもおほえで、八日ばかりの物忌しきりつゝなむ、唯今日だにこそ思ふ
 などあやしきまでこまかなる。はての月の十日六日ばかりなり、まばしありて俄にかい曇り
 て雨になりぬ。たうに流るゝかたならむかしと思ひ出で、ながむるに、暮れ行く氣色なり。
 いといたく降ればさはらむにもことわりなれば、昔はとばかり覺ゆるに、涙の浮びて哀に物
 のおほゆれば念じ難くて人出し立つ。

「かなしくも思ひ絶ゆるかいそのかみさはらぬものとならひしものを」
 と書きて、今ぞいくらむと思ふほどに、南おもての格子もわけぬ。とに人のけおほゆ。人はえ
 知らず、我のみぞあやしと覺ゆるに、妻戸押し明けてあふと這ひ入りたり。いみじき雨のさか
 りなれば音もえ聞えぬなりけり。とに「御車とくさし入れよ」などのゝゑるも聞ゆ。「などし
 も月のよゆうじなりとも、今日の参りにはゆるされなむとぞ覺ゆるよし多し。明日はあな

たふたがる。あさてよりは物忌なりかすべかめれば」など、いとことよし。やりつる人はちが
 ひぬらむと思ふにいとめやすし。夜のまに雨止みにためれば「さらばくれに」などいて歸り
 ぬ。方ふたがりたればうもなく待つに見えずなりぬ。「夜べは人の物したりしに夜べ以下十二、夜
 の更けにしかば經など讀ませてなむとまりにし。例の如何におほしけむ」などあり。山籠り
 の後は、あまがへるといふ名を付けられたりければ、かくものしけり、「こなたさまならで
 は、方もなどけはしくて、

「大はこの神の助やなかりけむちぎりしことをおもひかへるは」
 とやうにて、例の日過ぎてつもりになりたり。「忌の所になむ夜毎に」と告ぐる人あれ
 ば、心安くてあり經るに、月日はさながらおにやらひ來ぬるとあれば、あさましあさましと
 思ひはつるもいみじきは、人はわらはおとなともいはず、なやらふなやらふと騒ぎのゝしる
 を、我のみのどかにて見聞けば、今年も心ちよげならむ所の限せまほしげなるわざに見え
 ける。雪なむいみじう降るといふなり。年のをはりには何事につけても、思ひのこさりけ
 むかし。

蜻蛉日記卷下

かくて又明けぬれば、天祿三年にいふゆめり。今年も、憂きもつらきも共に心ち晴れておほえ

などして、大夫（？）さうぞかせて出し立つ。おりはしりてやがて拜するを見れば、いとゆくしう覺えて涙ぐまし。行ひもせばやと思ふ今宵よりふさなる事あるべし。これ人思むといふ事なるを、又いかなるとてにかと心一つに思ふ。今年は天下にくき人ありとも思ひなほらじなどまめりて思へばいと心安し。三日は帝の御かうぶりとて世は騒ぐ。白馬やなどいへども心ちすさまじうて七日も過ぎぬ。八日ばかりに見えたる人、「いみじう節會がちなる頃にて」などあり。つとめて歸るに、しばし立ちとまりたる、をのこどものなかり、かく書きつけて、女房の中に入れてたり、

「しもつけや桶のふたくちをわぢきなきかげもるかばぬ鏡とぞ見る」。

そのふたに、酒くたものと入れて出す。土器に女房、

「さし出でたるふたくちを見れば身を捨て、このむは玉のこぬと定めつ」。

かくてなかなかなる身のひまなきにつゝみて、世の人々のさりもて行ひもせで二七日は過ぎぬ。十四日ばかりに、「古さうへのきぬ、これいとようして」などいひてあり。「着るべき日は」などあれど、いそぎも思はであるに、使のつとめて「おそか（？）し」とあるに、

「久しとはおぼつかなしやからごろもうち着てなれむさて贈らせよ」

とあるに、違ひてこれより文もなくものしたれば、「これからよろしかめり。きををならぬがわるさ」とよ（？）りあり。ねたさにかくものしけり、

「わびて又とくと騒げどかひなくて程経る物はかくこそありけれ」

こそ（？）のしつ。それより後「つかさめしにて」などゝて音なし。今日は二十三日、まだ格子は上げぬ程に、或人起きはしにて妻戸をおし明けて「雪こそ降りたりけれ」といふ程に、鶯の初聲たり（？）ど今年もまいて心ちも老いず。さて例のかひなき一つごとく覺えざりけり。つかさめし二十五日に大納言になどの、しれど、我が爲はまして、所せきこそあらめと思へば御よろしびなどおこする人も、かへりては睨する心ちしてゆめ嬉しからず。大夫ばかりぞえもいはすまたには思ふべかめる。又の日ばかり「なにかいかにといふまじきよろこびのかひなくなむ」などあり。又つごりの日ばかりに、「なに事かある。騒しうてなむ。などか音をだにつらし」など、果はいはむ事のなきにやあらむ、さかさまごとぞある。今日もみづからは思ひかけられぬなめりと思へば、かへりて「御まへ（？）しこそ御いとまひまなかべかめれどはあいなけれ」とばかり物しつ。かゝれど今はものとおほえずなりにたれば、なかなかいと心安く（？）、よるも裏もなう、うち臥して寐たけりたる程に、かど叩くに驚き（？）かれて怪しと思ふ程に、ふと明けてくれる心々騒しく思ふ程に、妻戸口に立ちて「とくわけよや」などあり。前なりつる人々も、皆うち解けたれば逃げ隠れぬ。見苦しさにぬざりよりて「やすらひにだになくなりたれば、いと難しや」とてわくれれば、「さし（？）でのみ参り来ればにやあらむ」とあり。きとかあり月（？）方（？）に松吹く風の音いと荒く聞ゆる。こゝら一人明す夜、かゝる音のせねばもの、助にこそありけれとまでぞ聞ゆる。明くれば二月にもなりぬめり。雨いと長閑に降るなり。格子などわけつれど、例のやうに心あわたしからぬば、雨のするなめり。

されどとまる方は、思ひ懸けられずとばかりありて、「をのこともは参りにたりや」などいひて起き出で、なよらかならぬ直衣しをれよい程なるかいねりの袴ひとかさね、帯ゆるらかにてあゆみ出づるに、人々御粥などてうじて待るめれど、例食はぬものなれば「何かは」ふど心よげにうちいひて、太刀とくよとあれば、大夫とりて、すのこにかたひざまづきてゐたり。のどかに歩み出で、見廻して、「前裁をらうがはしく焼きためるかな」などあり。やがてそこもとにあまかははりたるをさし寄せ、をのこともかるらかにてもたげたれば、這ひ乗りぬめり。下簾引きつくりひて、中門より引き出で、さきよい程に追はせてあるも、妬げにぞ聞ゆる。日頃いと風早しとて、南面の格子は明けぬを、今日かうて見出して、とばかりあれば、雨よい程にのどやかに降りて庭うち荒れたるさまにて、朽葉所々青み渡りにけり。哀と見えたり。晝つ方かへしうち吹きて晴る、がほの空はしたれど、心ちわやしう惱しうて暮れ果つるまでながめ暮しつ。三日になりぬる夜、降りける雪三四寸ばかりたまりて今も降る。すだれを巻きて眺むれば「あれとかむむす」といふ聲こ、かしこに聞ゆ。風さへ早し。世の中いと哀なり。さて日晴れなどして八日のほどに待たありきの所に渡りたるは、多く若き人がちにて、箏の琴、琵琶など折にあひたる聲に調べなどして、うち笑ふことがちにて暮れぬ。つとめてまらうど歸りぬる後、心のどかなり。唯今ある文を見れば、「長き物忌に、うち續き着座といふわざしては、懐みければ、今日なむいと疾くと思ふ」などいとこまやかなり。返り事物して、いとゞげにあめれど、世にもあらじ、今は人知れぬさまになり行くものをと、思ひ過ぐし

てあさましむす、うち解けたる事多くてある所に、午の時ばかりに「おはしますおはします」とのゝしる。いとあわたいしき心ちするに、這ひ入りたれば、怪しくわれかひとりにもあらぬ程にて向ひぬれば、心ちもにほらなり。しばしありて臺など参りたれば少しくひなどして、日暮れぬと見ゆる程に、明日春日の祭なればみてぐら出し立つべかりければなどあてうるはしうひれさうぞき、ごせんあまた引きつれ、おどろおどろしう追ひ散してあらる。即ちこれかれさし集りて、いとあやしうち解けたりつる程に、「いかに御覽じつらむ」など、口々いとほしげなることをいふに、まして見苦しき事多かりつると思ふ心ちだに、身にうじはてられぬると覺えける。いかなるにかありけむ、このごろの日、照りみ曇りみ、いと春寒むある年とおぼえたり。よるは月あかし。十二日雪こちかせにたぐひて、散りまあがふ。午時ばかりより雨になりて靜に降り暮すま、あ従ひて世の中哀げなり。今日まで音なき人も、思ひしにたがはぬ心ちするを、今日より四日かの物忌にやあらむと思ふにぞ少しのどめたる。十七日雨のどやかに降るに、方ふたがりたりと思ふ事もあり。世の中哀に心ほそく覺ゆる程に石山にをと、し詣でたりしに、心細かりし夜な夜な、陀羅尼いと尊う讀みつ、らいだうにた、すむ法師ありき。問ひしかば「こぞから山籠りして侍るなり。殺斷なり」などいひしかば「さらば祈せよ」と語らひし法師のもとよりいひおこせたるやう「いぬる五日の夜の夢に、御には手に、月と日とを受け給ひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあて、抱き給ふとなむ見て侍る。これ夢とさき問はせ給へ」といひたり。いとうたておどろおどろしとおもふに、疑

そひてをこなる心ちすれば、人にも解かせぬ時しもあれ、夢わはするもの來たるに、異人の上にて問はすれば、「うへもなくいかなる人の見たるぞ」と驚きて「みかどを我がまゝにおぼしきさまの政せむものを」とぞいふ。「さればよ。これが空わはせにはあらず。いひおこせたる僧の疑しきなり。あなかま、いとにげなし」とて止みぬ。又あるもの、いふ、「この殿のみかどを、四つ足になすをこそ見しか」といへば、「これは大臣公卿いでき給ふべき夢なり。かく申せば男君の大臣近くものし給ふを申すとぞおぼすらむ。さにはあらず。公達御行く先の事なり」とぞいふ。又みづからのをと、ひのよ見たる夢、右の方の足の裏に、男かとかいふ文字を、ふと書きてつくれば、驚きて引き入ると見しを問へば、「この頃の同じ事の見ゆるなり」といふ。これもをこなるべきことなれば、物ぐるほしと思へど、さらぬ御ぞうにはあらぬ我が一人もたる人種も、覺えぬさいはひもやとぞ心の中に思ふ。かくはあれど唯今の如くにては行く末さへ心細きには、唯一人男にてあれば、年頃もこ、かしこに詣うでなどする所には、いれの事を申し盡しつれば、今はまして難かるべき年よりはひになり行くを、いかで賤しからざらむ人の、をんなご一人とりてうしろみもせむ、一人ある人をもち語らひて、我が命のはてにもあらせむとこの日頃思ひ立ちて、これかれにもいひ合はすれば「殿の通はせ給ひし源宰相兼忠とか聞えし人の御むすめの腹にこそ、女君いと美しくしげにてもものし給ふなれ。同じうはそれをやは、さやうにも聞えさせ給はぬ。今は志賀の麓になむかのせうとの禪師の君といふに就きてものしたまふなる」などいふ人あるとき、いに、「そよやさることありさかし。

故陽成院の御のちぞかし。宰相なくなりてまだ服の中に、例のさやうの事聞き過ぐされぬ心にて、なにくれとありしほどに、さめほりしことぞ。人はまづその心ばへにて、ことに今めかしうもあらぬうちに、齡などもおうよりにたへつければ、女はさらむとも思はずやありけむ。されど返り事などすめりし程に、みづからふた、びばかりなどもものして、いかでにかあらむ、ひとへぎぬの限なむ取りてものしたりし。ことなどもなむもありしかど忘れにけり。さていかいありけむ。

關越えて旅寐なりつるくさまくらかりそめにはたおもはえぬかな、

とか、いひやり給ははめりし。猶もありしかば返り、ことごとしうもあらざりき。

おぼつかかな我にもあらぬ草まくらまたこそ知らねかゝる旅寐は、

とぞありしを、度重りたるぞわやしきなど諸共にとぞ笑ひてき。後々しるき事もなくてやありけむ、いかなるかへりごとにか、かくあめりき。

置き添ふる露に夜な夜な濡れこしは思ひのなにかにかわくそでかは、

などあめりし程に、ましてはかなうなりはてにしを、後に聞きしかばありし所に女子生みたなり。さぞ」となむいふなる。さもあらむ、「こゝに取りてやは置きたらぬなどの給ひしそれなり。させむかし」などいひなりて、便りを尋ねて聞けば、この人も知らぬ。幼き人は十二三の程になりけり。唯それ一人を身にかへてなむ、かの志賀のひんがしの麓にて、海を前に見、志賀の山をしりへに見たる所の、いふ方なう心細げなるに、明し暮してあなると聞き

て、身をつめば、難波のことを、さるすまひにて、思ひ残し、いひ残すらむとぞまづ思ひやりける。かくてこと腹のせうとも京にて法師にてあり。こゝにかくいひ出したる人知りたりければ、それして呼び取らせて語らばするに「何かは。いと善き事なりとなむおいは思ふ。そもそもかしたにまはかりて物せむ。世の中いとはかなければ今はかたちをもことになしてむとてなむさ、舞の處に月頃は物せらるゝ」などいひ置きて、又の目といふばかりに山越えに物したりければ、異腹にてこまかになどしもあらぬ人のふりはへたるをわやしがる。「何事によりて」などありければとばかりありてこの事をいひ出したりければ、まづともかくもあらで、いかに思ひけるにか、いとみじう泣き泣きて、とかうためらひて、「こゝにも今は限に思ふ身をばさるものにて、かゝる所にこれをさへひきさげてあるを、いとみじと思へどていいかはせむとて掃つるを、さらばともかくも、そこに思ひさだめてものま給へ」とありければ、又の御歸りてさなむといふ。うへなきとにもありけるかな。宿世やありけむ、いと哀なるに、「さらばかしこにまづ御文をものせさせ給へ」とものすれば、「いかはせせて也。かく年ごろは聞えぬばかりに承り馴れたれば、たればかり覺束なくはおぼされずやとてなむ怪しとおぼされぬべきことなれど、この禪師の君に、心細き憂ひを聞えしを、傳へ聞えたるかけるに、いと嬉しくなむのたまはせしと承れば、喜びながらなむ聞ゆる。も併しうつゝまじき事なれどあまたと承るには、睦しき方にて思ひ放ち給ふやとてなむ」などものしたれば、又の日返り事あり。喜びしなどありて、いと心ようゆるしたり。かの語らひける事の筋も

そこの文もある。かつは思ひやる心ちいと哀なり。よろづ書き書きて「霞に立ちこめられて、筆のたちどて知られねばあやし」とあるも、げにと覺えたり。それより後も、二度ばかり文ものして、事定まり果てぬれば、このせじたち至りて末條に出し立てけり。唯獨出し立てけむも思へばいと悲し。おぼろげにてかくあらむや。唯親もし見給はゝなどにこそはあらめ、さ思ひたらむに、我がもとにても同じごと見る事難からむと、又さとてなむ頼らむ時、なかなかいとほしうもあるべきかなど、思ふ心添ひぬれどいかにせむ。かくいひ契りつれば、思ひ歸るべきにもあらず。この十九日宜しき日なるをと定めてしかば、これ迎へに物す。玄のびて唯清げなる網代車に、馬に乗りたるをのこども四人、玄も人はあまたある。大夫やりて這ひ乗りて、しりに、この事に口入れたる人と乗せてやりつ。今日珍しきせうそこありつれば「さもぞある。引き合ひては悪しからむ。いとくものせよ。暫しはけしき見せじ。すべてありやうに従はむ」など定めつるかひもなく、さきだゝれにたれば、いふかひなくである程に、とばかりありて來ぬ。「大夫はいづこにいきたりつるぞ」とあれば、とかういひ紛らはしてあり。「日頃もかく思ひまうけしかば、身の心細さに人の捨てたる子をなむ取りたる」などものし置きたれば「いで見む。たが子ぞ。我今は老いにたりとて、わかうど求めて、我をかんだてがし給へるならむ」とあるに、いとをかしうなりて、「さは見せ奉らむ。御子にし給はむや」とものすれば、「いとよかなり。させむ猶々」とあれば、御れもとういぶかしさに呼び出でたり。聞きつる年よりもいとちひさくいふかひなく幼げなり。近う呼びよせて「立て」とて立

てたれば、たけ四尺ばかりにて、髪は落ちたるにやあらむ、裾さきたる心ちして、たけに四寸ばかりを足らぬ。いとらうたげにてかしらつきをかしげにてやうだいいとあてはかなり。見て「あはれいとらうたげなめり。誰が子ぞ。猶いへいへ」とあれば、耻ぢななめゆるを、さばれあらはしてむと思ひて、「さはらうたしと見給ふや。聞えてむ」といへば、まして責めらる。「あなか^は秘^しつらに^はか^し」といふに、驚きて、「いかにいかにいづれぞ」とあれど、とみにいはぬば「もしさ、かの所にありと聞きしか」とわれば、「さなめり」とものするに、「いとみじき事かな。今ははふれうせにけむとこそ思ひしか。かうなるまで見ざりける事よ」とてうち泣かれぬ。この子もいかに思ふにかあらむ、うちうつ伏して泣き居たり。見る人も哀に、むかし物語のやうなれば皆泣きぬ。ひとへの袖あまた、び引き出でつ、泣かるれば、いとうちつけにもあり。「こゝにはいまだ來じとする所に、かついていましたる事、我ゐていなむ」など、たはぶれいひつ、夜更くるまで泣きみ笑ひみして皆寝ぬ。つとめて歸らむとて、呼び出して、「いとらうたかりけり。今ゐていなむ。車寄せばふと乗れよ」と、うち笑ひて出でられぬ。それより後、文などあるには、必ず、「小き人はいかにぞ」などしばしばあり。さて二十五日のよ、宵うち過ぎての、しる。火の事なりけり。「いと近し」など騒ぐを聞けば、憎しと思ふ所なりけり。その五六日は例のもの忌と聞くを、「みかどの志たよりなむ」とて文あり。なにくれとこまやかなり。いれはかたかる（七字今よかたかたかた）。八日の日、未の時ばかりに、「おはしますおはします」との、しる。中門おしめて、車ごめ引き入る、を見れば、御前のをのことも、あ

またながえにつけて、すだれ巻きあげ、下すだれ左右おし挟みたり。楊もて寄りたれば、おり走りて、紅梅の唯今盛りなるしたよりさしあげたるに、似げなうもあるまじ。うち擧げつ、「あな面白」といひつ、歩みのぼりぬ。さてのる^{（七字今よかたかたかた）}を思ひたれば、又南ふたがりけり。「などかは、さは告げざりし」とあれば、「さ聞えたらましかば、いかもあるべかりける」とものすれば、「違へこそせましか」とあり。「思ふ心をや、今よりこそは試みるべかりけれ」など、猶もあらじに、たれものかのしけり。ちひさき人には手習ひ歌よみなど教へ、こゝにてはけしうはあらじと思ふを、「思はずにては、いとあしからむ。今かしくなると諸共に、装着せむ」などいひて日暮れにけり。「同じうは院へ参らむ」とての、しりて出でられぬ。この頃空の氣色なほり立ちて、うらうらとのどかなり。暖かにもあらず、寒むくもあらずぬ風、梅にたぐひて、鶯をさそふは、鳥の聲などさまざまなごう聞えたり。屋のうへをながむれば、巢くふ雀ども瓦の下を出で、入り囀づる。庭の草、氷にゆるされ顔なり。うるふ二月の朔日の日、雨のどかなり。それより後空晴れたり。三日方明きぬと思ふを音なし。よう（七字今よかたかたかた）かもはや暮れぬるをあやしと思ふ思ふねて聞けば、夜中ばかりに火の騒ぎする所あり。近しと聞けどもの憂くて起きもあがられぬを、これかれ問ふべき人がちから（七字今よかたかたかた）あるまじきもあり。其にぞ起きて出で、答へなとして「めいしめりぬめり」とてあかれぬれば、入りてうち臥す程にさきおふ者門にとまる心ちす。あやしと聞く程に、「おはします」といふ。燈火の消えて、這ひ入りに暗ければ、「あなくら。ありつる物を、頼まれたりけるにこそありけれ。近き心ちのしつればなむ。今は歸りなむ

かし」といふうち臥して、「宵より参りこまほしうてありつるを、をのこども、皆罷りてにげにければえものせで。昔ならましかば馬に這ひ乗りても、物しなまし。なでふ身にはあらむ。何ばかりの事あらばかときなむやなど思ひつゝ、寐にし驚けるを、かうのしりつれば、いとをかし。怪しうこそありつれ」など志ありげにありけり。明けぬれば車などことやうならむとて急ぎ歸られぬ。六七日物忌と聞く。八日雨降る。よるに石の上の苦苦しげに聞えたり。十日、加茂へ詣うづ。「忍びて諸共に」といふ人あれば「何かは」とて詣たり。いつも珍しき心ちする所なれば今日も心のばるに心ちあらたるべしなどするも、かう志ひびけるはと見ゆらむ。さきの通りに北野にもものすれば、さへにも摘む女わらはべなどもあり。うちつけに糸ぐ摘むかと思へば、裳裾思ひやられてけり。ふるおりにうちめぐりなどするもいとをかし。くらう家に歸りて、うち寝たるほどに、かどいちはやくたゞく。胸うちつぶれて覺めたれば、思ひのほかになりけり。心の鬼は、若しこゝちかき所に障ありて歸されてにやあらむと思ふに、人はさりげなけれど、うち解けずこそ思ひあかしけれ。つとめて、少し日たけて歸る。さて五六日ばかりあり。十六日、雨の脚いと心細し。明くれば、このぬる程に、こまやかなる文見ゆ。「今日は方ふたがりたりければなむ。いかせむ」などあべし。返り事物してとばかりあればみづからなり。日も暮れ方なるをわやしと思ひけむかし。よに入りて「いかにみてぐらをや奉らまし」など休らひの氣色あれど「いとやうない事なり」などそゝのかし出す。歩み出づるほどに、あひならよるはずにはしもせじとす」と、忍びやかにいふを聞

く。「さらばいとかひなからむことよ」とありて、「必ず今宵は」とあり。それもしるく、その後覺束なくて八九日ばかりになりぬ。かく思ひおきて、數にはとありしなりけりと思ひあまりて、たまさかにこれよりものしけること、

「かた時にかへし夜敷をかぞふればしぎのもろ羽もたゆしとぞなく」
かへりごと、

「いかなれやしぎのはねがさかさ知らず思ふかひなき聲に鳴くらむ」

とはありけれど、驚かしても悔しげなる程をなむいかなるにかと思ひける。この頃庭もはらはす。花降り敷きて海ともなりなむと見えたり。今日は二十七日、雨昨日の夕よりくんだり、風のちのち花を拂ふ。三月になりぬ。木の芽少しこかくれになりて、祭の頃覺えてたるふえ戀しう、いともそはれなるに添へても音なき事を猶驚しけるも悔し。それより今日の絶えまよりも、安からず覺えけむは何の心にかありけむ。この月七日になりけり。「今日ぞこれ縫ひて。慎むとありてなむ」とあり。珍らしげもなければ「うけ給はりぬ」などつれなう物しけり。晝はたけより、雨のどかに待はじめたり。十日おほやけは、八幡の祭の事とのしる。我は人のまうづめる所あめるにいと忍びで出でたるに、晝つ方かへりたれば、あゝの若き人々入りてもの見むと又渡る。さなりとあればかへりたる車もやがて出し立つ。又の日、かへさ見むと、人々の騒ぐにも、心いとあしうて臥しくる位さるれば、みぢ心ちなきに、これかれそゝのかせば、唯び柳一つに四人ばかり乗りて出でたり。冷はれ院のみかど

の北の方に立てり。こと人多くも見ざりければ、人一人こち往して立てれば、とばかりありて渡る人、我が思ふべき人もべいじう一人舞ひ人に一人まじりたり。この往ることなるこぼれなり。十八日に清水へまうづる人に又忍びてまじりたり。そやはて、まかつれば時は子ばかりなり。諸共なる人の所に歸りて物などものする程に、あるものども「この戌亥の方にめいなるみゆる」と、「出で、見よ」などいふなれば「もろこしぞ」などいふなり。うちには猶苦しきにたり。尋など思ふ程に、人々「かうの殿なりけり」といふにいとあさましういみじ。我が家もついちばかり隔てたれば騒しう若き人をも惑しやしつらむ、いかで渡らむと惑ふにしも、車のすだれはかけられける。ものとはからかきうして乗りてこし程に、皆はてにけり。わがたかくは残り、あなたのみともこなたにつどひたり。こゝには大夫ありければ、いかに土にやはしらすらむと思ひつる人も車に乗せ、かど強うなどものしたりければ、らうがはしき事もなかりけり。あはれ、をのことてよう行ひたりけるよと見聞くも悲し。渡りたる人々は、唯命のみわつかなりと見なげくは、火しめりはて、しばしあれど、聞ふべき人は音づれもせず。さしもあるまじき所々よりも問ひつゝ、して、このわたりならむやの、うかがひにて急ぎ見えし。よれくもありしものを、ましてもなかり果てにけるあさましさ、かなたに尋なんど語るべき人は、さすがに雑色や侍やと聞き及びける限は、語りつと聞きつるを、あさましあさましと思ふ程にぞかどたゞく。人見て「おはします」といふにぞ少し心落ちるて覺ゆる。さて「こゝにありつるをのこともの、さゝ告げつるになむ驚きつる。あさましう來ざりけるが

いとほしきこと」などある程に、なばかりになりぬれば、とりもなきぬと聞く聞か寝にければ、ことしも心ちよげならむやうに、あさいになりけり。今もとふ人あまたの、しればせいで、名に三行てものいし騒しうぞなりまさらむとて急がれぬ。暫しありて、男の着るべき物どもなど數あまたあり。「取りあへたるに従ひてなむ。かみにまづ」とてありける。「かく集まりたる人に物せよ」とて、急ぎけるは、俄にひはだの杉色めくしたり。いとあやしければ見ざりき。物問ひなどすれば、三人ばかりやまひと口せちなどいひたり。廿日はさて暮れぬ。一日の日より四日、例の物忌と聞く。こゝにつどひたりし人々は、南ふたがる年なれば、しばしもあらしかし。かく廿五日あがたありきの所へ皆わたられにたり。こゝもとなきとはあらしかしと思ふに、我が心そほほゆる。このそみ御どもは、柱に押し付けてなど見ゆること、をゆめばかり惜しからずおほゆる。このそみ御どもは、柱に押し付けてなど見ゆること、もしも惜しからむ身のやうなりければ、その二十五日に、物忌なり果つるよしも、かどの音すれば、「かうてなむ固うさしたる」とものすれば、たうる、御方に立ちかへり音す。又の日は例の方ふたがると、しかじか。晝間にみそ御て御さ御いまつ御といふ程にぞ御て歸る。それより例のさはりなど聞えつゝ日經ぬ。こゝに物忌繁くて、四月は十よ日になりたれば、世には祭とての、しるなり。人、忍びてとさそへば、みそぎよりはじめて見る。わたくしみてぐら奉らむとてまうでたれば、一條のおほきおと御まうでわひ給へり。いといかめしうの、しるなどいへばさらなり。さし歩みなどし給へるさま、いたう似給へるかなと思ふに、大

方の儀式も、これに劣る事あらじかし。これをわなめでた、いかなる人など、思ふ人も聞く人も、いふせほきくぞいと、いものは覺えけむかし。さる心ちなからむ人に引かれて、又く^{特如院}のわたりにもものする日、大夫も引き續けてあるに、車どもかへるほどに、よろしきさまに見えける、女車のしりに續きそめにければ、後れずおも^鳴ひきければ、家を見せじとにやあらむ、とく紛れいきにけるを、追ひて尋ねはじめ、又の日かくいひやるめる、

「思ひそめ物をこそおもへ今日よりはわふひ遙になりやしぬらむ」とてやりたるに、さらにおほえすなどいひけむかし。されど、又、

「わりなくもすぎ立ちにける心かな三輪の山もとたづねはじめ」といひやりけり。大和^伊立つ人なるべし。かへし、

「三輪の山まち見る事のゆゑしさに杉立てりともえこそ知らせぬ」となむ。かくてつごもりになりぬれば、人は卯の花の蔭にも見えず、音だになくてはてぬ。廿八日にぞ例のひもろぎのたよりに「なやましき事ありて」などありき。五月になりぬ。「さうぶの根長さ」などこゝなる若き人騒げば、徒然なるに取り寄せてつらぬきなどす。「これかしこに、同じほどなる人に奉り仕^仕などいひて、

「かくれぬに生ひそめにけるわやめ草知る人なしに深きした根を」^草と書きて、なかにむすびつけて、大夫の参るにつけてものす。かへりごと、

「菖蒲草根に顯る、今日だに^ははいつかと待ちしかひもわりけれ」^草。

大夫に、今ひとつ、とかくしてかの所に、

「我が袖は引くとぬらしつわやめ草人のたもとに掛けてかわかせ」。御返り事、

「引きつらむ袂はしらすわやめ草わやなき袖にかけずもあらなむ」といひたなり。六日のつとめてより、わやめはじまりて三四日降る。川とまさりて人流るといふ。それもよろづをながめ思ふに、いといふぞ限にもあらねど今はおも馴れにたる事などは

いかにもいかにも思はぬに、この石山に逢ひたりし法師の許より、「御いのりをなむする」といひたる。返り事に「今は限に思ひはてにたる身をば佛もいかゞ給はむ。唯今はこの大夫を人々しくてあらせ給へなどばかりを申し給へ」とかくにぞ何とをりあらむ。かきくらしして涙こぼる。十日になりぬ。今日ぞ大夫につけてふみある。「惱ましき事のみありつゝ、覺束なき程になりけるを、いかに」などぞある。返り事、又の日物するにぞつくる。「昨日は立ちかへり聞ゆべく思ひ給へしを、このたよりならでは聞えむ事もびなき心ちになりければなむ。いかにとのたまはせたるは何かよろづことわりと思ひ給ふる^言べき。こゝろら伝ねば、なかなかいと心やすくなむなりにたる。風だにさむくと聞えさすれば、ゆゑしや」と書きけり。「引かれて賀茂でいづみにおはしつれば、御かへりも聞えで歸りぬ」といふ。「めでたの事や」とぞ心にもあらでうちいはれける。この頃、雲のたゝすまひ、しづ心なくて、ともすれば田子のもすそ思ひやらる。郭公の聲鳴き^鳴かす。物思はしき人は、いこそ寝られざなれ。

あやしう心よう寝らるゝけなるべし、これもかれも「一夜聞き」。この曉にも鳴きつる」といふを、人しもこそあれ、我しもまだしといはむも、いと耻しければ、物はいはで心の中におぼゆるやう、

「我ぞげにとけてぬらめや郭公もおもひまさる聲となるらむ」

とぞ忍びていはれける。』かくて、つれづれと六月になしつ。ひんがしおもての朝日の影いと苦しければ、みな^の禰廂に出でたるに、つゝましき人のけ近くおぼゆれば、やをらかたれ^がらふして聞けば、蟬の聲いと繁うなりにたるを、覺束なうてまだ耳を養はぬ翁ありき^り。庭掃くとして、はき、^を持ちてきの下に立てる程に、俄にいちはやうなきたれば驚きてふり仰ぎていふやう、「よひぞよひぞというなは^は蟬來にけるは、蟲だにときせちを知りたるよ」と、ひとりごつに合せて、しかしかと鳴きみちたるに、をかしうもあはれにもありけむ心ちぞあり^きなきなりける。大夫そばの紅葉のうちまじりたる枝につけて、例の處にやる、

「夏山の木のしたつゆのふかければかつぞなげきの色もえにける」。

返り事、

「露にのみいろもえぬれば言の葉をいくしほとかは知るべかるらむ」

などいふ程に、宵になりて珍しき文こまやかにてあり。二十よ日、いとたまさかなりけり。おさましき事と目馴れにたれば、いふかひなくて、中頃なきさまにもてなすも、侘びぬればなめりかすと、かつ思へば、いみじうなむ、あはれにありしよりけにいそぐ。その頃縣ありきの

家なくなりしかば、こゝにうつろひて、ない^は多く事騒がしくて明け暮るゝも、人めいか^にと思ふ心あるまで音なし。』七月十よ日になりて、まらうどかへりぬれば、名残なうつれづれにて、ぼにの事のふうなど、^ささまさまに歎く。人々のいきざしをさく^もあはれにもあり、安からずもあり。三日例のごと調じて、^まて^まどころの贈文添へてあり。いつまでかこゝにと物はいはで思ふ。さながら八月になりぬ。ついたちの日雨降り暮す。時雨だちたるに、未の時ばかりに晴れて、くつくつぼうしいとかしがしきまで鳴くを聞くにも「^は後ものは」といはる。如何なるにかあらむ、あやしうも心細う涙浮ぶ日なり。たゞ心^はつきに、^まぬべしといふさとしも^またれば、この月にやともおもふ。すまひの會あるべしなどものゝしるをばよそに聞く。十一日になりて、いと覺えぬ夢見たりとて、かうてなど、例のまことにしもあるまじき事も多かれど、ちりにもの^はで、物もいはれぬば、「^などか物もいはれぬ」とあり。「なに事をかは」といらへたれば「^などかこぬと^はぬ」にくし、^あからしとてうちもつみも^ま給へかし」といひ續けらるれば、聞ゆべき限のたまふめれば、「^何かは」とて止みぬ。つとめて「今このけいめいすぐして^まらむよ」とて歸る。十七日にぞ、かへりあるじと^まつ^もつ^もりになりぬれば、契りしけいめい多く過ぎぬれど、今は何事もおほえず、慎めといふ月日、近うなりにける事をあはれとばかり思ひつゝ、^大夫、例の所に文やる。^まの^かへり事どもみづからのとは見えざりければ、恨みなどして、

「夕されの寢屋のつまづま詠むればてづからのみぞ蜘蛛もかきぬる」

とあるをいかゞ思ひけむ、白い紙に物のさきにして書きたり、

「蜘蛛のかくいとぞあやしき風吹けば空に亂るゝものと云る云る」。
立ちかへり、

「露にてもいのちかけたる蜘蛛のいにわらき風をば誰かふせがむ」。

「暗し」とて返り事なし。又の日、昨日の云ら紙思ひ出でゝにやあらむ、かくいふめり、

「たじろほのやくやくひ火のあとを今日見れば雪の白濱白くては見し」

とて、やりたるを「物へなむ」とて、かへりごとなし。又の日歸りにたりや、かへりごと、言葉にてこひにやりたれば、「昨日のはいとふるめかしき心ちすれば聞えず」といはせたり。又の日「和はふるめかしとか、いとことわりなり」とて、

「ことわりやいはでなげし年月もふるのやしるのかみさびにけむ」

とあれば、「今日明日は、物忌」とかへりごとなし。明くらむと思ふ日のまだしきに、

「夢ばかり見てしばかりに惑ひつゝ、明くるを遅きあまの戸ざしは」。

この度も、とかういひ紛らはせば、又、

「さもこそは葛城山になれたらめ唯ひとことやかぎりなりける也」。

誰かはならはせる」となむ。若き人こそかやうにいふめれ。我は春の夜のつね、秋のつれづれいとあはれ深き詠めをするよりは残らむ人の思ひ出でにも見よとて、繪をぞ書く。さるうちにも今や今日やと待たるゝ命やうやう月立ちて日も行けば、さればよ、よも死なじ物を、幸

ひある人こそ命はつゞむれと思ふにそはへもなく、九月も立ちぬ。二十七日の程に、つちをかすとして、ほほかなる侍よしも珍しき事ありけるを、人告げに來たるもなめこといひもおぼえぬばうといひてやみぬ。『神無月、例の年よりも時雨がちなる心なり。十よりの程に例の物する山寺に、紅葉も見がてらと、これかれいざなはれば物す。今日しも時雨、降りみ降らずみひねもすに、この山いみじう面白きほどなり。ついたちの日、一條の太政のおといひうせ給ひぬとのゝしる。例の「あないみじ」などいひて聞きあへる夜、初雪七八寸の程たまれ。あはれあはれいかで君達歩み給はむなど、我がする事もなきまゝに思ひをれば、例の世の中、いよいよさかえのゝ云る。云はすの二十日あまりに見えたり。さて年暮ればてぬれば、例のことしてのゝ云り明して、三四日もなりにためれど、こゝには改れる心ちもせず。鶯ばかりぞいつしかとおと云たるをわはれと聞く。五日ばかりの程に晝見え、又十よ日廿日ばかりに、人寐亂れたる程見え、この月ぞ少しあやしと見えたる。この頃、つかさめしとて、例の暇なげにのゝしる。二月になりぬ。紅梅の常の年よりも色こく、めでたう匂ひたり。我がこゝちにのみあはれと見なれど何と見たる人なし。大夫を折りて例の所にやる、

「かひなくて年へにけりとながむればたもとあま花の色にこそしめ」。

かへりごと、

「年を経てなどかあやなく空にしも花のあたりを立ちば染めけむ」といへり。猶ありのごとやと待ち見る。さてついたち三日の程に、午の時ばかりに見えたり。

おつて耻しうなりにたるにいと苦しけれどいかはせむ。とばかりありて、「方ふたがりたり」とて、我が染めたるともいはじ、匂ふばかりの櫻がさねの綾、文はこぼれぬばかりして、かたもんのうへの袴つやつやとして遙におひちらして歸るを聞きつゝ、あな苦し、いみじうもうち解けたりつるかな、と思ひて、なりをうち見れば、いたうしをれたり。鏡を見れば三三三三といとくげにはあり。又こたびうじはてぬらむと思ふ事限なし。かゝる事を盡きせず眺むる程に、朔日より雨がちになりたれば、いとなげにめを三三三三やすとのみなむありける。五日、夜中ばかりに、世の中騒ぐを聞けば、され待に焼けにしにくき所、こたみはおしなぶるなりけり。十日ばかりに、又晝つ方見えて、「春日へなむ詣づべき程の覺束なさに」とあるも例ならねばあやしう覺ゆ。二月十五日に、院の小弓始まりて出でぬなどの、しる。前しりへわきてさうぞけば、その事大夫により、とかう物す。その日になりて、上達部あまた「今年やんごとなかりけり。小弓思ひあなくけりて念せざりけるを、いかならむと思ひたれば、さいそには出で、もろ矢しつ。つぎつぎあまたの數この矢になむさして勝ちぬる」などの、しる。さて又二三日過ぎて、大夫「後の諸矢は悲しかりしかな」などあれば、まして我も。おほやけには、例のその頃、八幡の祭になりぬ。つれづれなるをとて忍びやかに立てれば、とにはなやかにて、いみじう追ひ散らすものく。誰ならむと見れば、御せんどもの中に、例見ゆる人などあり。さなりけりと思ひて見るにも、まして我が身いとほしき心ちす。すだれ巻きあげ、したすだれおしはさみたれば、おぼつかなき事もなし。この車を見つけて、ふと扇をさしかくして

渡りぬ。御文ある。かへり事のはしに、「昨日はいとまばゆくて渡り給ひにき」とか三三三三たるは「などかは。さはせでぞなかりけむ。わかわかしう」と書きたりけり。返り事には「老い耻かしさにこそありけり。まばゆきさまに見なしけむ人こそ、にくけれ」などぞある。又かき絶えて、十よ日になりぬ。日頃の絶えまよりは久しき心ちすれば、又いかになりぬらむとぞおもひける。大夫例の所に文ものする。ことついつ三三三三けてもあらず。これよりもいと幼きほどの事をのみいひければ、かうものしけり、

「みがくれのほど、いふとてわあやめ草なほしたからむ思ひあふやと」。

かへりごと、なほなほし。

「したからむ程をもしらずまこも草世に生ひそは他じ人はかるとては」。

かくて又二十よ日の程に見えたり。さて三四日のほどに、近う火のさわぎす。驚き騒ぎするほどに、いととく見えたり。風吹きて久しう移り行くほどに、とり過ぎぬ。さらなればとて、歸る。こゝにと見聞きける人等は、まゐりたりつるよしきこえよとて、かへりぬと聞くも、おもだ、しげなりつるなどかたるも、くしはてにたる所につけて見ゆるならむかし。又つごもりの又の日ばかりにあり。「這ひ入るまゝに、火など近き夜こそきに三三三三は、しけれ」とあれば、「衛士のたく三三三三は、いつも」とみえたり。五月の初めの日になりぬれば、例の大夫、

「うちとけて今日だに聞かむ時鳥まのびもあへぬときは來にけり」。

かへり事、

「時鳥かくれなき音を聞かせてはかけはなれぬる身とやなるらむ」。

五日、
「物おもふに年経けりとしてあやめ草今日にたたびたびすぐしてぞしる」。

かへり事、
「つもりける年のあやめもおもほえず今日も過ぎぬる心見ゆれば」

とぞある。いかに恨みたるにかあらむとぞあしかりける。さてれいもの思ひは、この月も時々同じやうなり。二十日の程に「遠うものする人にとくかせむ。この餌袋の内に袋結びて」とあれば、結ぶほどに出で來にたりや。「歌を一重袋に入れ給へ。こゝにいとなやましうて、え讀むまじ」とあれば、いとをかしうて「のたまへる物ある限り讀み入れて奉るをもしもりやうせむ。にいとふくるをぞ給はまし」とものしつ。二日ばかりありて、心ちのいと苦しうても、事久しければなむ、ひとへ袋といひたりしものを、わびてかくなむものしたりし。返しかうかうなどあまた書きつけて、「いとようさだめて給へ」とて、雨もよにあれば、少し情ある心ちして待ち見る。劣り優れり見ゆれど、さかしうことわらむもあいなくてかうものしけり。

「うちとのみ風の心をよすめれば返しは吹くも劣るらむかし」

とばかりぞものしける。六七月、同じ程にありつゝはてぬ。つごもり二十八日に「すまひの事により内に侍ひつれどせうちちものせむとてなむ急ぎ出でぬるな御」とて見えたりし人、その

まゝに八月廿日餘まで見えず。聞けば例の所に繁くなむと聞く。移りにけりと思ふ。からけうつし心もなくてのみあるに、住む所はいよいよ荒れ行くを、いとすくなにもありしかば、人にもものして、我がすて所にあらせむといふ事を、我が頼む人定めて、今日明日ひえはた中川の程に渡りぬべし、さべしとは、ささぎはのめかしたれど、今日などもなくてやはとて、聞えさすべきことものしたれど「つゝしむとありてなむ」とてつれもければ、なにかはとて、音もせで渡りぬ。山近う河原かたかきなる所に、今は心のほしきに入りたれば、いとあはれなる住ひと覺ゆ。二三日になりぬれど、知りげもなし。五六日ばかり、「さりけるを告げざりける」とばかりあり。かへりどに「さなむとは告げ聞ゆなむおもひし。いとびなき所にはたかたう四文字覺えしかばなむ、見給ひなれにし所にて今一たび聞ゆべくは思ひし」など絶えたるさまにものしつ。「さもこそはあらめ、びなかなればなむ」とて、跡を斷ちたり。九月になりて、まだしきに、格子を上げて見出したれば、内なるにも、となるにも、川霧立ち渡りて、麓も見えぬ山の見やられたるもいと物悲しうて、

「流れてのとは頼みてこしかども我が中川はあせにけらしも」

とぞいはれける。ひんがしのかどの前なる田ども蒔りてゆひわたしてかけたり。たまさかにも見え聞ふひとには、青稻蒔らせて馬に飼ひ、やいどめさせなどするわざにおりたちてあり。こだかの人もあれば、たかどもとに立ち出で、遊ぶ。例の所に驚かしにやるめり。

「さころものつまも結ばぬ玉の緒の絶えみ絶えずみ世をや結ばむ」。

かへり事なし。又ほど過ぎて、

「露深き袖にひえつゝ、あかすかなたれ長き夜のかたきなるらむ」。

返りごとありとも、よしかゝじ。さて二十餘日にこの月もなりぬれど、跡絶えたり。あさましさは「これして」とて冬の物あり。「御文ありつるは、はや落ちにけり」といへば愚なるやうなり。返事せぬにてあらむとて、何事とも知らずやみぬ。ありしものどもは、してふみもなくともものしつ。その後は夢の通ひ路絶えて年暮れはてぬ。晦に又「これしてとなむ」とてはては文だにもなうてぞ下襲ある。いかにせましと思ひやすらひて、これかれにいひ合すれば、猶この度ばかり試にせよ。いと思みたるやうにのみあればか」と定むる事ありて、留めてき。さるけなくして、朔の日大夫に持せてものしたれば、「いと清くなりぬとてなむありつる」とてやみぬ。あさましといへばおろかなり。さてこの霜月に縣ありきの所に、うぶやの事ありしを、え問はで過してしを、いかになりにけむ。これにだにと思ひしかど、ことごとしきわざはえものせず、ことはた^た様^ををどさまさまにしたる、例の事なり。白う調じたるこ梅の枝につけたるに、

「冬ぞもり雪にまどひしをり過ぎて今日ぞ垣根のうめを尋ぬる」

とて、たちはさの^をを^をそれがしなどいふ人、使にて夜に入りてものしけり。使つとめてぞ歸りたる。薄色のうちさひとかさねかづけたり。

「枝若み雪まに咲ける初花はいかにとゝふに匂ひますかな」

などいふほどに、行ひのほども過ぎぬ。忍びたる方にいざとさそふ人もあり。何かはともものしたれば、人おほう詣でたり。誰とあるべきにもあらなくに、我一人苦しうかたはらいたし。はらへなどいふ所にたるひいふかたなうしたり。をかしうもあるかなと見つゝ、歸るに、おとなゝるものゝ、わらはさうぞくして髪をかしげにて行くあり。見ればありつる氷を一重の袖に包みもたりて、くひゆく。故あるものにやあらむと思ふほどに、我が諸共なる人、物をいひかけたれば、ひくゝみたる聲にて、「丸をのたまふか」といふを聞くにぞ、なほものなりけりと思ひぬる。頭ついで「これ食はぬ人は、思ふ事ならざるか」といふ。まがまがしう「さいふものゝ袖ぞぬらすめる」とひとりごちて、又思ふやう、

「我が袖のこほりは春も知らなくにこゝろとけても人の行くかな」。

歸りて三日ばかりありて賀茂に詣でたり。雪風いふかたなう降りくらがりてわびしかりしに、風おこりて臥しなやみつるほどに、まもつきにもなりぬ。しはすも過ぎにけり。十五日なかひあり。大夫の雑色のをのこともなびすとて騒ぐを聞けば、やうやうゑはひ過ぎて、「あなかまや」などいふ聲聞ゆる。をかしさに、やをら端の方に立ち出で、見出したれば、月いとかしかりけり。ひんがしぎまにうち見やりたれば、山霞み渡りて、いとほのかに心すごし。柱により立ちて思はぬ山など思ひ立てれば、八月より絶えにし人はかなくてむつきにぞなりぬるかしと覺ゆるまゝに、涙をさくりもよゝにこぼるゝまで、

「もろ聲に鳴くべきものを鶯はむつきともまだ知らずやあるらむ」

とおぼえたり。十五日に大夫しもにかしなどにも思はひ行ひなどす。などに思はずらむと思ふ程につかさまの事あり。珍しき文にて「うまの佐になむ」と告げたり。こゝかしこに喜びものするに、その司のかみ、をぢおぢさまへものしたまへば参うでたりける。いとかしこ喜ぶて、事のついでに殿にもし給ふなる。「姫君はいかゞものし給ふ。いくつにか御年などは」と問ひけり。歸りてさなむと語れば、いかで聞き給ひけむ、なと心もなく思ひかくべき程にしあらねばやみぬ。その頃、院いんののししりゆみあべしとて騒ぐ。かみも佐さも同じ方に出でぬのに、日々にはいきあひつゝ、同じ事をのみたまへば「いかなるにかあらむ」など語るに二月廿日にじふにちの程に夢に見る、平たいらある所に、忍びて思ひ立つ。何ばかり深くもあらずといふべき所なり。野焼きなどする頃の花はあやしう進しん頃なれば、をかしかるべき道なれどまだし。いと奥山は鳥の聲もせぬものなりければ、鶯ういだに音せずと休のみぞ珍うらかなるさまに涌きかへり流れたる。いみじう苦しまゝに、辛うじてある人もありかし。うき身一つをもて煩ふにこそはあめれと思ふ思ふ、いりあひ告ぐるほどにぞ至りあひたる。みあかしなど奉りて、人すくばかり待ちぬるほど、いと苦しうて夜あけぬと聞く程に雨降り出でぬ。いとわりなしと思ひつゝ、法師の坊に至りて、「いかゞすべき」などいふほどに、ことごと明けはて、簀笠すしかさやと人は騒ぐ。我はのどかにて眺むれば、前なる谷より雲しづしづと昇るに、いとも悲しうて、

「思ひきや天つそらなるあま雲を袖して分くる山踏まむとは」

とぞ覺えけらし。ありゆいふ方なければ、さしてあるまじければとかうたばかりで出でぬ。哀なる人の身にそひて見るぞ我が苦しきまぎはるばかり悲しう覺えける。からうじて歸りて、又の日いでぬの所より夜更けて歸り來て臥したる所より歸りていふやう「殿なむさんちが、司のかみのこぞよりいとせちこ任のたうぶ事のあるを、そこにあらむ子は、いかゞなりたる、大きなりや、心ちづきにたりやなどのたまひつるを、又かのかみも、殿は仰せられつるとやわづつなどなむのたまひつれば、さりつとなむ申しつれば、あさてばかり、よき日なるを御文奉らむとなむのたまひつる」と語る。いとあやしきことかな、まだ思ひかくべきにもあらぬをと思ひつゝ、寝ぬ。こゝにその日になりてまたあり。いと返りしにとうち解けしにくげなるさましたり。内は、詞は「月頃は思ふる事ありて殿に傳へ申さ、せ侍りしかば、事のさまばかり聞き召しつ。今はやがて聞えさせよとなむ仰せ給ふと承りにしこと、いとおほけなき心の侍りけると思し咎めさせ給はむを、つゝみ侍りつるになむ。ついでなくてとさへ思ひ給へしに、つかさめし見給へしになむ、この佐の君のかうおはしませば参り侍らむと人見とがむまじう思ひ給ふるに」など、いとあるべかしうに、端に「武藏といひ侍る人の御曹司に、いかで侍はむ」とあり。返りごと聞ゆべきを「まづこれはいかなる事ぞと、物してこそは」とてあるに「物忌や何やと折悪しとて、え御覽せさせず」とて歸る程に五六日になりぬ。覺束あきなうもやありけむ、すけの許に「せちに聞えさせべき事なむある」とて呼び給ふ。いよはいよとてある程に、よろこひは歸しつ。その程に雨降ればいとほしとて出て出づる程

に文とりて歸りたるを見れば紅の薄葉一かさねにて紅梅につけたり。詞は「いそのかみといふことは知らしめしたらむかし。

春雨にぬれたる花の枝よりも人知れぬ身のそでぞわりなき。

あが君あが君猶おはしませ」と書きて、などにかあらむ、あが君とあるうへは、かいけちたり。佐「いかいせむ」といへば、「あなむづかしや。道になむ逢ひたるとて、参うでられね」とて出しつ。かへりて、「なか御せうとく聞えさせ給ふあひだにても、御返りのなかるべきといみじう恨み聞え給へ侍る」など語るを、今日三日ばかりありて、からうじて見せ奉りつ。「のたまひつるやうは、何かは、今思ひ定めて」となむいひてしかば、「返り事は早うおし量りてものせよ。まだきに来むとあるとなむびんなかめる。そこにむすめありといふ事は、なべて知る人もあらじ。人ことやうにもこそ聞けとなむのたまふ」と聞くに、あな腹立し、そのいはむ人を知るは、なぞと思はむかし。さて返り事今日ぞものする。「この覺えぬ御せうそこはこの除目の徳にやと思ひたまへしかば、即ちも聞えさすべかりしを、殿はなどのたまはせたる事のいとわやしう覺束なきを、尋ね侍るほどのもろこしばかりになりければなむ。されど猶心えはべらぬは、いと聞えさせむ方なく」とて、ものしつ。はしに「曹司にとのたまはせたる武藏は、みだりに人をとこそ聞えさすめれ」となむ。さて後同じやうなるとどもあり。かへりごと、たびごとにしもあらぬに、いたうはかりたり。「二月になりぬ。むかしこにも、女房につけて申しつかせければ、その人の返りごと見せにあたり、「おほめかせ給ふめればな

む。これかくなむ殿の仰せはべめる」とあり。見れば、「この月日悪しかりけり。月立ちてとなむ。こよみ御覽じて、たゞ今ものたまはする」などを書いたる、いと怪しういち早き曆にもあるかな、なでふ事なかりよかけ侍る、あらじ、この文書く人のそらごとならむと思ふ。朔七八日のほどの晝つ方、「うまの頭おはしたり」といふ。「あなかま、こゝになしと答へよ。ものいはむとあらむに、まだしきにびなし」などいふ程に、入りてあらはなる籬の前に立ちやすらひ、例も清げなる人のねはを言侍したるにて、なよ、かなる直衣、太刀ひき佩き例の事なれどあか色の扇すこしみだれたるをもてまさぐりて、風早き程に纓吹き侍られつゝ、立てるさま、繪に書きたるやうなり。清らの人ありとて、おくまりたる女らの裳などうち解け姿にて出で、見るに、時しもあれ、この風のすかたを侍をとへ吹き内へ吹き感はせば、すだれをたのみたるものども、我か人かにておさへひかへ騒ぐまに、何かあやしの袖口も皆見つらむと思ふに、死ぬばかりいとほし。よべいでぬの所より、夜更けて歸りてぬふしたる人を、起す程にかゝるなりけり。からうじて起き出で、こゝには人もなきよし。風の心ちあり侍たしさに、格子みはかかぬてよりおろしたる程になれば、何事いふも宜しきなりけり。強ひて簀子にのぼりて、「今日よき日なり。わらふだかひ言給へ。ぬそめむ」など言ばかり語ひて、「いとかなひなきわざかな」と、うち歎きて歸りぬ。二日ばかりありて、唯詞にて、侍らぬほどにものし給へりけるかしこまりなどいひて奉れて後、「いと覺束なくてまかでにしを、いかで」と常にあり。にげない事故に、あやしの聲さばやなどあるは、ゆるしなきを、「佐にも聞えむ」

といひがてら暮にもものしたり。「いかゞはせむ」とて格子二まばかりわけて、簀子に火ともして、廂にもものしたり。佐たいめして早くとてえんにのぼりぬ。妻戸を引きわけて、「これより」といふめれば、あゆみ寄るもの、又立ちのきて、「まづ御せうそこ聞えさせ給へかし」と、忍びやかにいふなれば、入りてさなむと物するに「思しかはらむ所に聞えよかし」など人は言ひ、少しうち笑ひて、よき程にうちそよめきて入りぬ。佐と物語忍びやかにして、さくら扇に扇のうちあたる音ばかり、時々してゐたり。内に音なうてや、久しければ、「佐に一日かひなくてまかでのしかば、心もとなきになむと聞え給へ」とて入れたり。「早う」といへば、ゐざりよりてあれど、とみに物もいはず。内よりはた、まして音なし。とばかりわりて「覺東なうおん信ふみにやあらむ」とて、いさゝかしかはぶきの氣色をたるにつけて「時しもわれ、悪しかりける折に侍ひあひ侍りて」といふを初めにて、思ひはじめけるよりの事いと多かり。内には唯いとまがまがしき程なれば「かうのたまふも、夢の心ちなむする。ちひさきよりも、世にいふなる鼠追ひの程にだにあらぬを、いとわりなき事になむ」などやうに言ふ。蛙の聲いと高し。夜更け行けば内より「いとかくむくつけいなるあたりは内なる人だにまづ心なく侍るを」といひ出したれば、「何か、これよりまると思ひ給へ。むかひしは怖ろしきと侍らじ」といひつゝ、いたう更けぬれば、「佐の君の御いなき時、も近うなりにたらむを、その程の雑役をだに仕うまつらむ。殿にかうなむ仰せられしと、御けしき給はりて、又のたまはせむ事聞えさせに、あすあさての

程にも侍ふべしとあれば、立つなゝり」とて、几帳のはころびよりかきわけて見出せば、簀子にともしたりつる火は、早う消えにけり。内には物のしりへにともしたれば、光ありて、との消えぬるも知られぬなりけり。影もや見えつらむと思ふにあさましうて、「腹黒う、きえぬともものたまはせで」といへば「何かは、侍ふ人も、答へで立ちにけり、來そめぬれば、まばしばものしつゝ、同じ事をものすれど、こゝには御ゆるされあらむ所よりさぞあらむときこそは、わびてもあべかめれと思ふ人言はば、せんとなき許されはなりにたるを」とて、かしかましう責む。「この程こそは殿にも仰せは給ひし。二十よ日のほどなむよき日はあなる」とてせめらるれど、佐、司儀にとて祭にもものすべければその事をのみ思ふに、人はいにき言のはつるを待ちけり。みそぎの日犬の死にたるを見つけて、いふかひなくとまりぬ。さて猶こゝにはいといちはやき心ちすれば思ひかくる事もなきを「これをよりかくなむ仰せありき」とて「せむると聞えよ」とのみあれば、いかでさはのたまはせるにあらむ、いとかしかましかければ見せ奉りつゝて御返りこといひたれば「さは思ひしかども、佐の急ぎしつる程にて、いとさはかになむなりにける。おもへば御心變らずば、八月ばかりになむ、なりに給へものし給へかし」とあれば、いとめやき心ちして「かくなむはべめる。いちはやかりけるこよみは、ふぢやうなりとは、さればこそ聞えさせしか」と物したれば、返り事もなくて、とばかりありて「みづからいと腹立しき事聞えさせになむ参りつる」とあれば「何事にか、いとおどろおどろしく侍らむ。さらばこなたに」といはせられたれば、「よしよしかう夜盡参りつるとあれば何ごと

か^つつ^りき^てはいと^と遙になりなむ」とて、いらへてとばかり佐と物語して、立ちて硯紙とこひたり。出したれば、書きておしひねりて入れていぬ。見れば、

「契りおきし卯月はいかに時鳥我が身のうきにかけ離れつゝ。」

いかにし侍らまし。くしいたくこそ。暮にを」と書きたり。手もいとほり^ほしげなりや。返りごとやがて追ひて書く、

「なほ忍べ花橋の枝やなきあふひ過ぎぬる卯月なれども」。

さてその日頃えらび設けつる、廿二日の夜ものしたり。こたみは、ささぎのさまにもあらず、いとつゞやかになりまさりたるものから、責むるさまいとわりなし。「殿の御許されは道なくなりにたり。その程はるかに覺え侍るを、御かへりみにて^いい^いでとなむ」とあれば「いかに思ひてかうはのたまふ。その遙なりとの給ふ程にや、うひごと^ももせむとなむ見ゆる」といへば「かひなきほども、物語はするは」といふ。「これはいとさにはあらず。あやにくにおもざらひするほどなればこそ」などいふも、聞き分かぬやうにいとわびしく見えたり。「むね走るまで覺え侍るを、このみすの内になにさぶらふと思ひ給へてまかぢむ。一つ一つをだに、爲すことにま侍らむ。かへりみさせ給へ」といひて、すだれに手をかくれば、いとけうとけれど聞きも入れぬやうにて、「いたう更けぬらむを、例はさしも覺え給ふ夜になむある」と、つれもなういへば、「いとかうは思ひきこえさせずこそありつれ。あさましう、いみじう、限りなうられ^いしと思ひ給ふべし。御曆もちて^い元になりぬ。あまく聞えさする御氣色も

か^いり^りなどおり立ちてわびいらたれば、いとなつかしさに、「猶いとわりなきことなりや。院にうちになど侍ひ給ふらむ。晝間のやうに思しなせ」などいへば、その事の心は苦しうこそはあれ。とにすわりてこたふるにいとふかひなし。いらへわづらひて、はては物もいはねば「あなかしこ、御けしきも悪しうはめり。さらば今は仰事なからむには聞えさせじ。いとかしこく」とて、つまはじきうちして、ものもいはで暫しありて起ちぬ。出づるに「まつ」などいはずれど、「更にとら^いせで」などと聞くに、いとほしくなりて、又つとめて「いとあやにくに、まつともたまはせで、歸らせ給ひ^いめりしは、たひらかにや」と聞えさせになむ。「ほととぎすまた問ふべくも語らばでかへる山路のこぐらかりけむこそいとほしう」と書きて物したり。さし置きてなれば、かれより、

「問ふこそはいつとなけれど郭公あけてくやしきものをこそ思へ

といたうかしこまりうけ給はりぬ」とのみあり。さ^い行^いねりても、又の日、「佐の君今日人々のがりものせむとするを、もろともにつかさにと聞えになむ」としとし^いを^いとにものしたり。例の硯こへば紙おきて出したり。入れて^いた^いるを見れば、惟しうわな^いきたる手にて「昔の世に如何なる罪を作り侍りて、かう妨げさせ給ふ身となり侍りけむ。あやしきさまにのみなりまどひ侍るは、なり侍らむことも、いと難し。さらさら聞えさせじ。今は高き峰になむのぼり侍るべき」などふさに書きたり。かへりごと「あな怖ろしや。などかうはのたまはすらむ。恨み聞え給ふべき人はことにこそはめめれ。峰は知り侍らず。谷のしるべはし

も」と書きて出したれば、佐、一つに乗りて物しぬ。佐の賜はり馬、いと美しくしげなるを、とりて歸りたり。その暮に又ものして「一夜のいとかしこきまで聞えさせ侍りしをおもひ給ふれば、更にいとかしこし。今はたゞ殿より仰せあらむほどを、侍らふはむなど聞えさせになむ今宵はおひ直りして参り侍りつる。な死にそと仰せ侍りしは、千歳の命堪ふまじき心ちなむ侍る。手を折り侍るは、および三つばかりはいとようふしおきし侍ると、思ひ三つ侍るやりのはるかに侍れば、つれづれとすこし侍らむ月日を殿居ばかりを簀のはしわたり許され侍りなむや」といとたとしへなくけざやかにいへば、それに従ひたる。かへりごとなど物して、今宵はいととく歸りぬ。佐を、明暮呼びまとはせるつばまに物す。女繪をかしくかけりけるがわりければ、取りて懷に入れてもて來たり。見れば釣殿と思しき高欄におしかゝりて、中鳥の松をまはりたる女あり。そこもとに紙の端に書きてかくおしへて三行。

「いかにせむ池のみづ波さわぎてはこゝろのうちのまつにかゝらば」。

またやもめすみしたる男の、文書ささして、つらづるつきて、ものおもふさましたる所に、

「さゝがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも」

とものして、もて歸り置きけり。かくて猶同じごと「絶えず殿にもよほし聞えよ」など常にあれば返りごとも見せむとて、かくのみあるを「こゝには答へなむ煩ひぬる」とものしたれば、「三行程はさ物してしを、などか、かくはあらむ。八月待つ程は、そこにびゞしうもてなし給ふとか、世にいふめる。それはしも、うめさも聞えてむかし」などあり。たはぶれと思ふ程に、た

びたびかゝれば、三行やしう思ひて、「こゝにはもよほし聞ゆるにはあらず。いとうるさく侍れば、すべてこゝにはの給ふまじきことなりと、物し侍るを、なほうやあめれば、見給へ餘りてなむ。さてなでふとも侍るかな。

今更にいかなるこまかなつくべきさすめぬ草とのがれせぬ身を。

あなまばゆ」とものしけり。かうの君、猶この月の内には頼みをかけて責む。この頃例の年にも似ず。郭公たちおとをしてといふばかりに鳴くと聞くにもかく文の端つかたに、例ならぬ郭公の音なひにも、安き空なく思ふべかめれ舞、かしくまりを、甚だしうおきたれば、つや、かなることとはものせざりけり。すけ、うまぶねまばしと借りけるを、例の文のはしに、「佐の君に異ならずば、うまぶねなしと聞えさせ給へ」とあり。かへりごとにも「うまぶねはたてたる所ありて覺えずなれば、給ふらむに煩し舞はか三行」など物したれば、立ち歸りて「たてたる所はべなるふねは、今日明日の程に埒ふすべき所はしげになむ」とぞある。かくて月果てぬれば、遙になり果てぬるに、おもひうじぬるにやあらむ、音なうて月立ちぬ。四日に雨いといたう降るほどに、すけの許に、「あま、侍らば立ち寄せ給へ。聞えさすべき事なむある。うへには身の宿世の思ひ知られ侍りて、聞えさせすと執り申させ給へ」とあり。かくのみ呼びつるは、何ごと、いふこともなくて、戯れつゝぞ歸しける。今日かゝる雨にもさは、らで、同じ所なる人三行ものへまうでつ。障ることもなきにと思ひて出でたれば、ある者「女かみには、さぬ縫ひて奉るこそよかなれ。さま給へ」と、寄り來てさゝめけば、「いで試みむかし」と

て、かとりひのひなきぬ三つ縫ひたり。したがひどもにかうぞ書きたりけるは、如何なる心ばへにかかりけむ、かみぞ知るらむかし、

「白妙のころもは神にゆづりてむへだてぬ中にかへしなすべく」。

たまはるま、

「唐衣なれにしつまをうちかへしわがまたがひになすよしもがな」。

又、

「夏ごろもたつやとぞ見る千早ふる神をひとへにたのむ身なれば」。

暮るれば歸りぬ。明くれば五日の曉にせうとたる人はかより来て「いつら、今日のさそうは、上などか遅うは仕うまつる。よる下はしつるこそよけれ」などいふに驚きてしやうぶふくなれば、皆人も起きて、格子放ちなどすれば「暫し格子はな参りそ。たゆくかまへてせむ。御覽せんにもともなりけり」などいへど、みな起き果てぬれば、事行ひてつはかす。昨日の雲返す風うち吹きたれば、あやめの香は、やうかへていとをかし。簀子に佐と二人ゐて「天下の木草を取り集めて、めづらしげなる薬玉せむ」などいひて、そくくりゐたる程に、「この頃はめづらしげなう、郭公のむらとがりてそふくにおり居たる」などいひのゝしる聲なれど、空をうちかけりて、二聲三聲聞えたるは、身にしみてをかしうおぼえたれば、「山郭公今日とてや」など、いはぬ人なうぞうち遊ぶめり。少し日たけてかんの君「さてつがひに物し給は、諸共に」とあり。「さぶらはむ」といひつるを、しきりに「遅し」などいひて人くれば物しぬ。又の

日もまだしきに、「昨日はうそ言ふかせ給ふことしげかぬめりしかば、え物も聞えずなりにき。今のわひだも御いとまわらばおはしませ。うへ言のつらくおはしますと、下更にいほむかたなし。さりととも命侍らば、世の中は見給へてむ。死なば思ひ較べてもいかゝあらむ。よしよしこれは忍びごと」とて、みづからはものせず。又二日ばかりありて、「まだしきよりよくさせむ。そなたにや参りつべき」などあれば「早う物せよ。こゝには何せむ」とて出し立つ。「例の言事もなかりつ」とて、歸りきたりぬ。「今二日はかりありて、とり聞ゆべきことあり。おはしませ」とのみ書きて、まだしきにあり。「唯今さぶらふ」といはせて、しばしある程に、雨いたう降りぬ。夜さへかとりて止まぬ御は、えものせでなさけなし。せうそこをだにとて、「いとわりなき雨に障りてわび侍り。かばかり、

「絶えず行くわがな河の水まさりをちなる人ぞこひしかりける」。

かへりごと、

「おはぬせを戀しとおもは、思ふどちへむ中川にわれをすませよ」。

などあるほどに、暮れはて、雨やみたるにみづからな言たり。例の心もとなきすぢをのみあれば「なにかみつとのたまひし。および一つは折りあへぬほどに、過ぐめるものを」といへば「それもいかゝ侍らむ。ふじやうなる事ども、はべめれば、くじはから言またおんらす程にもやなり侍らむ。などいいかでおと、の御こと例のみ、なか切りて續くわぎもま侍りにしがな」とあれば、いとをかしうて、「歸る雁を鳴かせて」など答へたれば、いとほがらかにうち笑

ふ。さてかの美々しうもてなすとありしことをおもひて、「いとまめやかには心一つにも侍らず。そのかし侍らむことは難き心ちなむある」と物すれば、「いかなることにか侍らむ。いかでこれをだにうけ給はらむ」とて、あまたたび責めらるれば、げにとも知らせむ。詞にいへば出でにくきをと思ひて、「御覽せさするにも、びなき心ちすれど、たゞこれ催し聞えむとの苦しきを見たまへとてなむ」とてかたはなつに言はせたり。そはやりとてさし出でたれば簀子にすべり出で、おぼるなる月にあて、久しう見て入りぬ。「紙の色にさへまぎれて、更に見給へず。晝侍ひて見給へむ」とて、さしいれぬ。「御や今はやりてむ」といへば「猶しばしやらせ給はむ」などいひて、これなるとはのかにも見たり顔にもいはで、たゞ「こゝにわづらひ侍りし程の力なれば慎むべき物なり」と人もいへば、「心細う物の覺え侍る事」とて、をりをりにそのことゝも聞えぬ程に、まのびてうちすてに解することある。「つとめてつかさに物すべきと侍るも、佐の君に聞えにやりてさふらはむ」とて、立ちぬ。うはへ見せし文、枕上にあるを見れば、われげやると思ひしところはことにて、又やれたる所あるはあやしとに思はくの返り事せしに、いかなる駒かとありし事のとかく書き付けたりしを、やりとりと作るなべし。まだしきに、すけのもとに「みだり風起りてなむ聞えしやうにはえ參らぬ。こゝに午時ばかりにおはしませ」とあり。例の何事にもあらじとて物せぬ程に文あり。それには「例よりもいそぎ聞えさせむとしつるを、いとつゝみ思ひ給ふることありてなむ。よべの御文をわりなく見給へ難くてなむ。わざと聞えさせ給はむ事こそ難からめ。をりをりには、よろしかへ

いさまにと頼み聞えさせながら、はかなき身のほどをいかにと、あはれに思う給ふる」など例よりもひきつくりひて、らうたげに書いたり。返り事は、やうなく常にしもと思ひてせずなりぬ。又の日猶いとほしく若やかなるさまにもありと思ひて、「昨日は人の物忌侍りしに、日暮れてなむ。心あるとやといふらむやうに、おき給へしをりをりにはいかでと思ひ給ふるを、ついでなき身になり侍りてこそ、心しなげなる御はしがきをなむげにと思ひ聞えさせそげや、紙の色は晝もやおぼつかなら思さるらめ」とて、これよりぞものしたりけるをりに、法師ばらあまたありてさわがしげなりければさしおきて來にけり。まだしきにこれより、さまかはりたる人々ものし侍りしに、日も暮れてなむ使もまゐりにける。

「なげきつゝあかしくらせば郭公この卵のはなのかげに鳴きつゝ」。

いかにし侍らむ。今宵はかしこまり」とさへあり。返り事は「昨日のかへりにこそ歸侍りけめ。何かさまではとあやし。

かげにしもなどか鳴くらむ卵の花のえだにまのぶの心とぞ聞く」

とて、うへ書きけちてはしに、「かたはなる心ちし侍りや」と書いたり。その程に左京の官うせ給ひぬと物すべかめる。内にも慎み深うて山寺になどしげうて、時々驚かしてみなつきもはてぬ。七月になりぬ。八月近き心ちするに、見る人は猶いとうら若く、いかならむと思ふとまげきにまぎれて、わが思ふとは今は絶え果てにならぬ。七月中の十日ばかりになりぬ。かうの君いとあさり、かれは我を頼みたるかなと思ふ程に、或人のいふやう「こいまのかんの君は

も世とのめを盗みとりてなむあるとそにろに隠れる給へる。いみじうをこなる事になむ世にもいひ騒ぐなる」と聞きつれば、我は限なくめやすい事をも聞くかな、月の過ぐるにいかにいひやらむと思ひつるにと思ふものから、怪しの心やとは思ひなむかし。さて又文あり。見れば人しも問ひたらむやうに「いであなわさましや。心にもあらぬ事を聞えさせはつべきにもすまじ。かゝらぬすぢにてもとり聞えさせる事侍りしかば、さりとも」などぞある。かへりごと「心にもあらぬことのたまはせたるは、何にかあらむ。かゝらぬさまにて、とりもの忘れをせさせ給はざりけると見給ふるなむいとうしろやすき」とものしけり。『八月になりぬ。この世のなかはもがさおこりてのゝある。二十日のほどに、このわたりにも來にたり。佐いふかたなく重く煩ふ。いかゞはせむとて事絶えたる人にもつぐばかりあるに、我が穢うちは、まいてせむかた知らず。さいひてやはとてふもほして告げたれば、かへりごといとあらゝかにてあり。さては詞にてぞいかにといはせたる。さるまじき人だにぞきとぶらふめると見る心ちぞそへてたゞならざりける。うまの頭もなくまはまはとひ給ふ。九月ついたちをこたりぬ。八月二十よりふけりせめにし雨、この月もやまず降りくらがりて、この中河も大路も、一つに行きあひぬべく見ゆれば、今や流るゝとさへおほゆ。世の中いとあはれなり。かどのわさだもいまだ刈り集めず。たまさかなるあまゝに、やいぞめばかりぞわかほにしたる。もがさせりの難いかにもさかりにて、この一條の大政の大との、子體二人ながら、その月の十六日になくなりぬといひ騒ぐ。思ひやるもいみじき事限なし。これを聞くもをこたりに

たる人ぞゆゝしき。かくてあれどことなる事なければまだありきもせず。廿日あまりにいと珍しき文にて「佐はいかにぞ。こゝなる人は皆をこたりにたるに、いかなれば見えざらむとおぼつかなさになむ。いとくゝし給ふめれば、うとむとはなくて、いとみなむ過ぎにける。忘れぬ事はありながら」と、こまやかなるを、あやしとぞ思ふ。かへりごと、問ひたる人人のうへばかりきく二文字はしに「まこと忘るゝは、さもや侍らむ」と書きてものしつ。佐ありきしはじむる日、道に、かの文やりし所行きあひたりけるを、いかゞまけむ、車のとうかゝりてわづらひけりとして、あくる日、よべはさらになむ知らざりける。さても、

年月のめぐりくるまのわになりて思へばかゝるをももありけり」

といひたりけるを取り入れて見て、その文のはしに、なほなほしき手して、あかす。「こゝにはこゝには」とどうてんがちにかへしたりけむこそ、なほああかくて神無月になりぬ。二十日あまりのほどに、忌み違ふとて、わななたりたるところにて聞けば、かのはは縁かの忌の所には、子産みたなりと人いふ。なほあらむよりはあなにくとも聞き思ふべけれどつれなうて、ある宵のほどはもじだいななどものしたるほどに、せうと、おぼしき人、近う追ひよりて、ふところよりみちのくに紙にて、引き結びたる文の、枯れたる薄にさしたるをとり出でたり。「あやし。たがぞ」といへば、「なほ御覽せよ」といふ。あけてひかげに見れば、心つきなき人の手のすぢにいとよう似たり。書いたる事は、「かのいかなるこまかとありけむはいかに。霜がれの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな。」

あな心苦し」とぞある。我が人にいひやりて、くやしと思ひし事のな、もじなればいとあやし。こは^{あな}がぞと^{あな}後堀河殿のこととや」と問へば「おほきおとこの御文なり。御隨身におるそれがしなむ殿にもて來たりけるを、おはせずといひけりゆと、なほぞたしかにとてなむ、おきてけり^ゆといふ。いかにして聞き給ひけることにかあらむと、思へども思へどもいとあやし。又人ごとにいひ合はせなどすれば、ふるめかしき人^ゆ、聞く^ゆけて、「いと忝し。はや御返りして、かのもて來たりけむ御隨身に取らすべきものなり」とかしこまる。されば、かくおろかには思はざりけめど、いとなほざりなりや。

「さ、わけばあれこそまさま草枯のこまなつくべきもりの下かは^ゆ」
とぞ聞えける。ある人のいふやう、「これがかへし今一度せむとて、なからまではあそばしたなるを、未あむまだしきとのたまふなる」と聞きて久しうなりぬるなむをかし^ゆけり。臨時の祭あさてとて佐俄に舞ひ人にめされたり。これにつけてぞ珍しき文ある。「いかする」などゝているべきもの皆ものしたり。試樂の日待あるやう「けがらひの暇なる所なれば内にもえ参るまじきを、参り來て見出したてむとするを、寄せ給ふまじかなればいか^ゆすつ^ゆらむ。いとおほつかなき事」とあり。胸つぶれて今さらになにせむにかと思ふ事^ゆげれば」とくさうぞきて、かしこへを参れ」とていそがしやりたりければ、まづぞうち泣かれける。諸共に立ちて舞ひ人わたりならせて参らせてけり。祭の日いかは見えらむとて出でたれば、またのつらになでふこともなきびりやうせしわくちうちおろして立てり。口の方、すだれの下

より清げなるかいぬりに、紫の織物重なりたる袖を^ゆ出でためるを女車なりけりと見る所に、車のしりの方にあたりたる人の家の門より六位なるもの、たちはきたるふるまひ出で來て、前の方にひざまづきて、ものをいふに、驚きて目をとめて見れば、かれが出で來つる車のもとには、あかき人黒き人多うて數もしらぬほどに立てりけり。よく見もていけば、見し人々のあたりなりけりと思ふ。例の年よりはことどうなりて、上達部の車かいつれてくるもの皆かれを見てなべし。そことにもとまりて、おほ^ゆじ所に口をつとへて立ちたり。我が思ふ人にはかに出でたる程よりは、供人などもきらきらしう見えたり。上達部手毎に菓物などさし出でつゝものいひなどし給へばおもた、しき心ちす。又ふるめかしき人も、例のゆるされぬとにて山吹のなかにあるを、うち散りたる中にさし分きてとらへさせて、かのうちより酒などとり出でたれば、かはらけさしかけられなどするを見れば、唯そのかた時ばかりや、行く心もありけむ。さて佐^ゆに^ゆかくてやなどさかしらがる人のありてもいひ續く人あり。八橋の程にやありけむ、始めて、

「かづらきや神代のしるし深からばたゞ一ことにうちもとけなむ」。

「葛城の蜘蛛はいづこやつはしのふみ見てけむとたのむかひなく」。

こたびぞかへりごと、

と書きて去て書いたり。又、

「なにかその通はむ道のかたからむふみ始めたるあとをたのめる世」
又かへりごと、

「尋ねらむ信かひやなからむ大空のくもぢは通ふあとはかもあらじ」
まけじと思ひ顔なれば、又、

「おほ空も雲のかけはしなくばこそかよふはかなき歎きをもせめ」
かへし、

「ふみれど雲のかけはしあやふしと思ひしらすもたのむなるかな」
又やる、

「なほをらむ心たのもしあしたづのくもぢおりくるつばさやはなき」
こたみはくらしとてやみぬ。しはずになりたり。又、

「かたしきしはとてかへり事なし。又の日はかり返りごと、こひにやりたれば、」そばの木に見
「ものへなむ」とてかへり事なし。又の日はかり返りごと、こひにやりたれば、」そばの木に見
き」とのみ書きておこせたり。やがて、

「我がなるはそばのぬるかと思ふまで見きとばかりも氣色ばむかな」
かへりごと、

「天雲の山のはるけきまろくなればそばぬるいろはときはなりけり」。

「ふる年にせち分するを、こなたに」などいひせて、

「いとせめて思ふ心を年のうちにはるくとも老らせてしがな」
かへり事なし。又ほどなき事をすくせなどやありけむ、

「かひなくて年暮れはつる物ならば春にもあはぬ身ともこそなれ」
こたみもなし。いかなるにかあらむと思ふほどに、かういふ人あまたあなりと聞く。さてな
るべし、

「我ならぬ人まつならば待つといはでいたくな越しそ沖つ白浪」。
返り事、

「越しもせずこさずもあらず浪よせの濱はかけつゝ年をこそ経れ」。
年せめ二字一かへり、

「さもこそは浪の心はつらからめとしさへ越ゆるまつもありけり」
かへりごと、

「千歳経るまつもこそあれほどもなく越えては歸る程やとほかほかず」
とぞある。あやし、なでふ事ぞと思ふ。風風さわるゝほどにやる、

「吹く風につけてもものを思ふかな大海の浪のしづこゝろなく」
とてやりたるに、「聞ゆべき人は今日のことを知りてなむ」と、異手してひと葉ついたる枝に
つけたる。たちかへり「いとほしう」などいひて、

「我が思ふ人はたそとは見なせどもなげきのえだにやすまらぬかな」
 などぞいふめる。今年いたうあるとなくて、はたら雪ふた、びばかりを降りつる。佐の朔
 日のものものども（四ノ月）白馬にも（四ノ月）のすべきなどのしつるほどに、暮れはつる日にはなりに
 けり。明日のものをりまかせつゝ、人にまかせなどして思へば、かうながらこにひけふになり
 にけるもあさましう、みたまなど見るにも、例の盡させぬことにおほゝれてぞはてにける。
 年のはてなれば、夜いたう更けてぞたゝきくなる。今に平に（源平本）

以下後人所撰歌
 佛名のあしたに雪の降りければ、

「年の内に積み消す庭にふる雪はつとめてのちはつもらざらなむ」。

殿かな（八ノ月）給ひて久しうありて、七月十五日ぼと（八ノ月）のこ（八ノ月）な（八ノ月）き（八ノ月）こ（八ノ月）え（八ノ月）のたまへるつかそつかそ

「かゝりけるこの世も知らず今とてやあはれはちすの露をまつらむ」。
 四の宮（四ノ月）の御ねの日に、殿にかはり奉りて、

「峰の松おのがよはひの敷よりもいまいく千世ぞきみにひかれて」。

ぞの子の日の日記を宮に侍ふ人に、借り給へりけるを、その年は后宮（後宮）うせさせ給へ
 るほどに暮れはてぬれば、又の年の春かへし給ふとて、はしに、

「袖の色かはれる春を知らずしてこぞにならへる野邊のまつらむ」。

内侍のかんの殿、「天の羽衣といふ題をよみて」と聞えさせ給へりければ、

「ぬれぎぬに天の羽衣むすびけりかつはもしほの火をし消たねば」。

みちの國にをかしかりける所々を繪に書きて、もてのぼりて見せ給ひければ、

「みちのくのちがの鳥にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし」。

ある人加茂の祭の日婿とりせむとするに、男のもとよりあふひ嬉しきよしいひおこせたり
 けるかへりごととに、人にかはりて、

「たのみはずな御垣をせばみあふひは、ほまめのほかにはありといふなり」。

親の御忌にて、一つ所にはらか（八ノ月）た（八ノ月）ち（八ノ月）あ（八ノ月）つ（八ノ月）り（八ノ月）て（八ノ月）お（八ノ月）は（八ノ月）する（八ノ月）を（八ノ月）、こと人々は忌みはて、家に歸り
 ぬる（八ノ月）一人（八ノ月）とまりて、

「深草のやほとなりぬるやどもなどとまれるつゆのたのもしげなき」。

かへし、ためまさの朝臣、

「深草の誰もこゝろにまげりつゝ、あさちがはらのつゆにけぬべし」。

當代の御いかに、ゐのこのかたを作りたりけるに、

「よろづ世をよばふ山への猪の子こそきみがつはかふゆるよはひなるべし」。

殿より八重山吹を奉らせ給へりけるに、

「誰かこの敷は定めしわれはたゞとへとぞおもふやまぶきのほな」。

はらからの、みちのくにの守にて下るを長雨しける頃、その下る日、晴れたりければ、かの國

にかはく河といふ神あり。

「我が國の神のまもりや添へりけむかはくげかりしあまつ空かな」。

かへし、
「今ぞ知るかはくと聞けば君がため天照る神の名にこそはわれ」。

鶯、柳の枝にありといふ題を、
「我が宿のやなぎの糸は細くとも来るうぐひすは絶えずもあらなむ」。

傳の殿、始めて女のがりやり給ふにかはりて、
「今日ぞとやつらく待ち見むわが戀は物始もなきかこなたなるらむべし」。

度々のかへり事なかりければ、時鳥のかたをつくりて、
「飛びちがふ鳥のつばさをいかなればすだつ歎きに返さるらむ」。

猶返り事せざりければ、
「さゝがにのいかになるらむ今日だにも知らばや風の亂る氣色を」。

又、
「絶えてなほすみのえになき中ならばさしに生ふなるくさもがなきか」。

かへし、
「すみよしの岸に生ふとは知りにけりつまむ摘まじはきみがまにまに」。

さねかたの兵衛の佐にあはすべしと聞きたまひて、少將にぞはおはしけるほどのことなるべし、

「かしはぎの森だにしげく聞くものをなどか三笠の山のかひなき」。

かへし、
「かしはぎの三笠のやまも夏なればおげりかどはあやな人の知らなく」。

かへりごとするを、親かからはから制すと聞きて、まろ小菅にさして、
「うちそばみ君一人見よまろこそすげまろは一すげなしといふなり」。

わづらひ給ひて、
「うつせがは淺さの程も知らはれと思ひしわれやまづ渡りなむ」。

かへし、
「みつせ川われよりさきに渡りなばみぎはにわぶる身とやなりなむ」。

かへりごと、するをりせぬをりのありければ、
「かくめりと見れば絶えぬるさゝがにの糸ゆる風をつらくもあるかな」。

七月七日、
「七夕にけさひく糸の露を^かに^みもみたわむけしきも見でややみなむ」。

これはあしたの、
「わづらよりあしたのそでぬれにけるなにを畫まの慰めにせむ」。

ば、それにかはりて、

「かけて見し末も絶えにし日陰草なに、よそへて今日結ぶらむ」。女院睦いまだ位におはしまし、をり入講行はせ給ひける棒げ物にはちすの珠數たまり參らせ給ふとて、

「となふなる波の敷にはあらねどもはちすのうへの露にかゝらたまりむ」。同じ頃、傳の殿、橋を參らせ給へりければ、

「かばかりもとひやはしつるほとゝぎすはな橋のこゝたまりにこそありけたまりれ」。かへし、

「橋のもなりものならぬ身を去れば去づえなくてはとはぬとぞ聞く」。

小一條の大將頼朝、ひつにおはしけるに、傳の殿頼朝を「必ずおはせ」とて、待ち聞え給ひけるに、雨いたう降りければ、えおはせぬ程に、隨身雨いたうふりければえおはせぬほどにするじん種種「したくらをおほみ」と聞え給へりける、かへり事に、

「ぬれつゝも戀しきみちはより信なくにまだきこへたまりずると思はざらむ」。

中將の、尼に家を借り給ふに、借し奉らざりければ、

「蓮葉の浮葉をせばみこの世にもやどらぬつゆと身をぞ知りぬる」。かへし、

「はちすにもたまるよとこそむすびしか露は心を置きたがへけり」。

粟田野見て歸り給ふとて、

「花薄招きもやまぬやまざとにこゝろのかぎりとゞめつるかな」。

故爲雅朝臣、普門寺に千部の經供養するにおはして歸り給ふに、小野殿の花いとおもしろかりければ、車引き入れて歸り給ふに、

「たきこころことは昨日につきにしをいざをのゝえはこゝにくたさむ」。

駒くらべのまけわざとおぼしくて白銀のこりわりかたまりをして院に奉らむとし給ふに、このけに歌たまりむとて攝政殿頼朝より歌聞えさせ給へりければ、

「千代もへよたちかへりつゝ山城のこまにくらべしこりの末なり」。

繪の所に、山里にながめたる女あり。時鳥鳴くに、

「都びとねてまつらめやはとゝぎすいまぞ山べを鳴きて過ぐなりたまり」。

この歌は寛和二年の歌合にあり。法師舟に乗りたる所、

「渡つ海はあまの舟こそありと聞け乗りたがへても漕ぎてけるかな」。

殿たまりかれ給ひて後、「通ふ人あべし」など聞え給ひければ、

「いざはさらは仕いかなることまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」。

歌合に卵の花、

「卵の花の盛るるべしやまざとのころもさぼせるをりと見ゆるは」。

時鳥、

「ほととぎす今ぞさわたる聲すなるわが告げなくに人や聞くらむ」
あやめ草、

「菖蒲草今日のみぎはを尋ねればねをしりてこそかたよりにけれ」
螢、

「五月雨やこぐらき宿の夕されはおもてるまでもてらすほたるか」
とこなつ、

「咲きにける枝なかりせばとこなつものどけき名をや残さゝらまし」
蚊遣火、

「あやなしや宿の蚊やり火つけそめてかたらふ虫の聲をさけつる」
蟬、

「おくるといふ蟬の初聲聞くよりぞいまかと萩のあきを知りぬる」
夏草、

「こまやくる人や別くると待つほどに繁りのみます宿のなつくさ」
戀、

「思ひつゝ戀ひつゝはねじ宿逢ふと見る夢を信ざめてはくやしかりけり」
いはひ、

「數知らぬ眞砂にたづの程よりはちぎりそめけむ千代ぞすくなき」。

人聲後心得ぬ所々は本のまゝに書けり。賀の歌は日記にあれば書かず。

蜻蛉日記 終

枕草紙

春は曙、やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏はよる、月のころはさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山ぎはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるいとをかし。日入りはて、風のおと蟲のねなどいとあはれなり。冬は雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さうでもいと寒き、火などいそぎおこして炭もてわたるもいとつきづきし。ひるになりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝ、ひとゝせながらをかし。正月一日はまいてそらのけしきうらうらとめづらしくかすみこめたるに、世にあるやとある人は、すがたかたち心ことにつくろひ、君をも我が身をも祝ひなどしたるさま殊にをかし。七日は雪まの若菜青やかに摘み出でつゝ、例はさしもさる物めぢかゝらぬ所にもてさわぎ、白馬見むとて里人は車清げに去たて、見にゆく。中の御門のとじきみひきいるゝ

程かしらども一ところにまろびあひて、さしぐしも落ち、用意せねば折れなどして笑ふも又をか。左衛門の陣などに殿上人あまた立ちなどして、舍人の馬どもをとて驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、たて姿とみななどの見ゆるに、とのりづかさ、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝうちにも見るはいとせばきほどにて、舍人がかほのきぬもあらはれ、白きものゝゆきつかぬ所はまことに黒き庭に雪のむら消えたる心ちしていと見ぐるし。馬のあがり騒ぎたるもおそろしく覺ゆれば、引きいられてよくも見やられず。

八日、人々よろこび遊ばしてはしりさわぎ、車のおともつねよりは殊に聞えてをか。十五日はもちかゆのせくまゐる。かゆの木ひさかくしていへのだち、女房などのうかひを、うたれじとよいして、つねにうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、打ちあてたるはいみじうけらありとうちわらひたるもいとほええし。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年よりあたらしうかよふむこの君などのうちへ参るほどを、こゝろもなくなるところにつけて我はとおもひたる女房ののぞき、おくのかたにたゞまふを、まへに居たる人はこゝろえてわらふを「あなかまあなかま」とまねきかくれど、君見知らずがほにておほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らむ」などいひ寄り、はしりうちて逃ぐればあるかぎり笑ふ。男君もにくからず、あいぎやうづきてゑみたる。ことにおどろかず、顔すこしあかみて居たるもをか。又かたみに打ちて男などをさへぞうつめる。いか

なる心にかあらむ、なきはらだち、打ちつる人をのろひ、まがまがしくいふもをか。うちわたりなどやんごとなきも今日はみな亂れてかしこまりなし。除目のほどなどうちわたりはいとをか。雪降りこほりなどしたるに申しぶみもてありく。四位五位わかやかにこゝちよげなるはいとたのもしげなり。老いてかしら白きなどが人にとかくあんないいひ、女房のつばねによりておのが身のかしこき由など心をやりて説き聞かするを、若き人々はまねを玄笑へどいかでか知らむ。「よきにそうし給へ、けいし給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬることいとあはれなれ。

三月三日、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳などいとをかしきこそ更なれ。それもまたまゆにこもりたるこそをかしけれ。ひろどりたるはにくし。花も散りたるのちはうたてを見ゆる。

おもしろく咲きたる櫻を長く折りて、大きな花がめにさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣に出し袷してまらうどもあわれ、御せうとの君達にもあわれ、そこ近く居て物などうち言ひたるいとをか。そのわたりに鳥蟲のひたひつきいと美しくうてとびありくいとをか。

祭のころはいみじうをかしき。木々のこの葉まだしげうはなうてわかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空の景色のなにとなくそゞろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、よるなど忍びたる杜鴈のとはうそら耳かと思ゆるまでたどしきを聞きつけたらむ、何ぞうちかはせむ。祭近くなりて青朽葉、藪などのものどもおしまきつゝ、細櫃のふたに入れ、紙な

どにけしきばかり包みて行きちがひもてわりくこそをかしけれ。すそぞ、むらど、まさぞめなど常よりもをかしう見ゆ。わらはべのかしらばかり洗ひつくるひて、なりは皆なえほころび、うち亂れかゝりたるもあるが、けいし、くつなどの緒すげさせ、裏をさせなどもてさわぎいつしかその日にならむと急ぎ走りわりくもをかし。あやしう踊りてわりくものどもさうぞきたてつれば、いみじくちやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほどほどにつけて親をばの女姉などのともして、つくるひわりくもをかし。

こととなるもの

法師の詞、男女の詞。げすの詞にはかならず文字あまりしたり。

おもはむ子を法師になしたらむこそはいと心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、たい木のはしなどのやうに思ひたらむこそいとほしけれ。さうじもの、あしきをくひ、いぬるをも、若きは物もゆかしからむ。女などのある所をもなどか忌みたるやうにさしのぞかずもあらむ。それをも安からずいふ。まして驗者などのかたはいと苦しげなり。み嶽、くまの、かゝらぬ山なくありく程に、おそろしき目も見、まるしあるきこえ出できぬれば、こゝかしこによはれ時めくにつけてやすげもなし。いたく煩ふ人にかゝりて、もの、けてうするもいと苦しければ、こうじてうちねぶれば「ねぶりなどのみして」と答むるもいと所せく、いかに思はむと、これは昔のことなり。いまやうはやすげなり。

大進なりまさか家に宮裡の出でさせ給ふに、ひんがしのかどはよつあしになしてそれより御

輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども陣屋の居ねば入りなむやと思ひて、かしらつきわろき人もいたくもつくるはず、よせておるべきものと思ひあなづりたるに、びらうげの車などは門ちひさければさはりてえ入らねば、例の筵道まきておるゝに、いとにく、腹だ、しけれどいかはせむ。殿上人地下なるも陣に立ちそひ見るもねたし。御前に参りてありつるやうけいすれば「こゝにも人は見るまじくやけ。などかはさしもうちとけつる」と笑はせ給ふ。「されどそれは皆めなれて侍ればよくゑたて、侍らむにしこそ驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に車入らぬ門やはあらむ。見えば笑はむ」などいふ程にしも「これまるらせむ」とて御視などさしいる。「いで、いとわろくこそおはしけれ。などてかその門せばくつくりて住み給ひけるぞ」といへば、笑ひて「家のほど身の程に合せて侍るなり」といらふ。「されど門のかざりを高くつくりける人も聞ゆるは」といへば「あなおそろし」と驚きて「それはうていこ五字く五字がことにこそ侍るなれ。ふるきまじなどに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たまたま此の道にまかり入りにければ、かうだにわきまへられ侍る」といふ。「その御道もかしてからざめり。筵道まきたれば皆おち入りてさわぎつるは」といへば「雨の降り侍ればげにさも侍らむ。よしよし、また仰せかくべき事も侍る。罷り立ち侍りなむ」といぬ。「何事ぞ、なりまさがいみじうおぢつるは」と問はせ給ふ。「あらず、車の入らざりつるといひ侍る」と申しておりぬ。おなじ局に住む若き人々などしてよろづの事も知らず、ねぶたければ皆ねぬ。東のたいの西の廂かけてある北のさうじにはかけがねもなかりけるを、それも尋ねず家

ぬしなれば案内をよく知りてあけてけり。あやしうかればみたるもの、聲にて「侍はむにはいか」とあまたたびいふ聲に、驚きて見れば几帳のうしろに立てたる燈臺の光もあらはなり。さうじを五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきずきさわざゆめに三つせぬもの、家におはしましたりとしてむげに心にまかするなめりと思ふもいとをかし。我が傍なる人を起して「かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるを」といへば、頭をもたげて見やりていみじう笑ふ。「あれはたぞ、けそうに」といへば「あらず。家あると局あると定め申すべき事の侍るなり」といへば「門の事をこそ申しつれ。さうじわけ給へとやはいふ」。「なほその事申し侍らむ。そこに侍はむはいかにいかに」といへば「いと見苦しきこと、更にあおはせじ」とて笑ふめれば、「若き人々おはしけり」とてひきたて、いぬるのちに笑ふこといみじ。わけぬとならば唯まづ入りぬかし。せうそこをすするによかなりとは誰かはいはむと、げにをかしきに、つとめておまへ七に参りて啓すれば「さる事も聞えざりつるを、よべのことため、入りたりけるなめり。あはれわれをはしたなくいひけむこそいとほしけれ」と笑はせ給ふ。

姫宮瑞の御かたのわらはべのさうぞくせさすべきよし仰せらるゝに「わらはのあこめうはおそひは何色に仕うまつるべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「姫宮のおまへのものはれのやうにてはにくげに候はむ。ちうせいをしき、ちうせい高つきにてこそよく候はめ」と申すを「さてこそはうはおそひ着たるわらはべもまゐりよからめ」といふを「猶れいの人

のやうにかくな言ひ八笑ひそ。いとさすくなるものを、いとほしげに」とせいし給ふもをか。ちゆうげんなるをりに、「大進物聞えむとあり」と人の告ぐるを聞しめして「又なでふこといひてわらははれむとならむ」と仰せらるゝもいとをかし。「ゆきて聞け」とのたまはすれば、わざと出でたれば「一夜の門のことを、中納言九に語り侍りしかばいみじう感じ申されて、いかでさるべからむをりに對面して申し承らむとなむ申されつる」とて又こともなし。一夜の事やいはむと心ときめきえつれど、「今まづかに御局にさぶらはむ」と辭していぬれば、歸り参りたるに、「さて何事ぞ」とのたまはすれば、申しつる事をさなむとまねび啓して、「わざとせうそし呼び出づべきことにもあらぬを、おのづからまづかに局などにあらむにもいへかし」とて笑へば、「おのが心ちにかしこしとおもふ人の譽めたるを嬉しと思ふとて告げ知らするならむ」とのたまはする御氣色もいとをかし。

うへに侍ふ御猫はかうぶり給はりて、命婦のおと一〇とていとをかしければ、かしづかせ給ふが、はしに出でたるを、乳母の馬の命婦一〇あなまなや、入り給へ」とよぶに、きかで口のさしあたりたるにうちねぶりに居たるをおどすとて「おきなまろいづら。命婦のおと一〇くへ」といふに、まことかとしてえれもの走りかゝりたれば、おびえ惑ひてみすの内に入りぬ。あさがれひのまにうへはおはします。御覽じていみじう驚かせ給ふ。猫は御ふところに入れさせ給ひてをのこども召せば藏人忠隆参りたるに、「このおきなまろうちちようじて犬島にかはせ。唯今」と仰せらるればあつまりて狩りさわぐ。うまの命婦もさいなみて「乳母かへて

む。いとうしろへかたし」と仰せらるれば、かしこまりて御前にも出でず。犬は狩り出で、瀧口などして追ひつかはしつゝ「あはれいみじくゆるぎありきつるものを、三月三日に頭の辨、柳のかづらをせさせ桃の花かざしにさゝせ、櫻こしにさゝせなどしてありかせ給ひしをり、かゝる目見むとはおもひかけ、むや」とあはれがる。「おももの、折はかならず向ひさぶらふに、さうざうしくこそあれ」などいひて三四口になりぬ。ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、なにぞの犬のかく久しくなくにかあらむと聞くに、萬の犬どもはしり騒ぎとぶらひに行き、みかはやうとなるもの走り来て「あないみじ。犬を藏人二人して打ちたまひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸り参りたるとちようじ給ふ」といふ。「心うのとや。おきなまろなり。忠隆さねふさなむ打つ」といへば、せいしに遣るほどに辛うじてなき止みぬ。「死にければ門のはかにひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする。夕つかたいみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるがわなゝきありければ「あはれまろか。かゝる犬やはこのごろは見ゆる」などいふに、「おきなまろ」と呼べど、みゝにも聞き入れず。「それぞ」といひ、「あらず」といひ、口々申せば「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて、まもなるをまづとみのことゝて召せば参りたり。「これはおきなまろか」と見せさせ給ふに、「似て侍れどもこれはゆゝしげにこそ侍るめれ。又おきなまろと呼べば悦びてまうでくるものを、呼べど寄りこず。あらぬなめり。それは打ち殺して棄て侍りぬとこそ申しつれ。さるものどもの二人して打たむには生きなむや」と申せば、心うがらせ給ふ。暗うなりて物くはせたれどくはねば、あらぬものにいひな

して止みぬる。つとめて御けづりぐしに参り御てうづまゐりて御鏡もたせて御覽すれば、侍ふに、犬の柱のもとにツイ居たるを「あはれきのふおきなまろをいみじう打ちしかな。死にけむこそ悲しけれ。何の身にかこのたびはなりぬらむ。いかにわびしき心ちまけむ」とうちいふほどに、このねたる犬ふるひわなゝきて涙をたゞ落しにおとす。いとあさまし。さはこれおきなまろにこそありけれ、よべは隠れ忍びてあるなりけりと、あはれにてをかききことかぎりなし。御鏡をもちおきて「さはおきなまろ」といふに、ひれ伏していみじくなく。御前にもうち笑はせ給ふ。人々参り集りて、右近内侍めして、かくなど仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへ一階にもきこしめして、渡らせおはしまして「あさましう犬などもかゝる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども聞きに参り集りて呼ぶにも今ぞ立ちうごく。猶かほなど腫れためり。「物てうせさせばや」といへば「つひにいひあらはしつる」など笑はせ給ふに、忠隆聞きて臺盤所のかたより「まことにや侍らむ。かれ見侍らむ」といひたれば「あなゆゝし。さるものなし」といはすれば、「さりとも終に見つくるをりも侍らむ、さのみもえかくさせ給はじ」といふなり。さてのちかしこまりからじゆるされてもとのやうになりなき。猶あはれがられて、ふるひなき出でたりし程こそ世にまらずをかくあはれなりしか。人々にもいはれてなきなどす。

正月一日、三月三日はいとうらゝかなる。五月五日はくもりくらしたる。七月七日はくもり、夕がたは晴れたる空に月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日はあかつきがたより雨

すこし降りて菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめてはやみにたれどなほ曇りてや、もすれば降り落ちぬべく見えたるもをかし。

よろこび奏することをかしかけれ。うしろをまかせてまやくとりて、御前の方に向ひてたてるを拜し舞踏しさわぐよ。

今内裏のひんがしをば北の陣とぞいふ。ならの木の遙にたかきか立てるを常に見て「いくひるかあらむ」などいふに、權中將の「もとより打ちきりて、定證僧都の枝扇にせさせばや」とのたまひしを、山階寺の別當になりてよろこび申すの日、近衛づかさにてこの君の出で給へるに、高きけいしをさへはきたればゆしく高し。出でぬるのちこそ「などその枝扇はまたせ給はぬ」といへば、「ものわすれせず」と笑ひ給ふ。

山は

小倉山、三笠山、このくれ山、わすれ山、いりたち山、かせ山、ひはの山。かたさり山こそ誰に所おきけるにかとたすけをかしかけれ。いつはた山、のちせの山、笠取山、ひらの山。とこの山は「わが名もらすな」とみかどのよませ給ひけむいとをかし。伊吹山。朝倉山、よそに見るらむいと見るかをかしき。岩田山。大比禮山もをかし。臨時の祭の使など思ひ出でらるべし。たむけ山。三輪の山いとをかし。音羽山、待かね山、玉坂山、耳無山、末の松山、葛城山、美濃のお山、は、そ山、位山、吉備の中山、嵐山、さらしな山、姨捨山、小鹽山、淺間山、かたゝめ山、かへる

山、妹背山。

峰は

ゆづるはの峰、阿彌陀の峰、いやたかの峰。

原は

たか原、みかの原、あしたの原、その原、萩原、粟津原、奈志原、うなぬこが原、あべの原、篠原。

市は

辰の市。つばいちは大和にあまたあるなかに、長谷寺にまうづる人のかならずそこにとまれば、観音の御えんあるにやと心ことなるなり。おふさの市、まかまの市、飛鳥の市。

淵は

かしか淵、いかなる底の心を見えてさる名をつきけむいとをかし。ないりその淵、誰にかなる人の教へしならむ。青色の淵こそまたをかしけれ。藏人などの身にしつべくて。いな淵、かくれの淵、のぞきの淵、玉淵。

海は

水うみ、よさの海、かはくちの海、伊勢の海。

わたりは

まかすがのわたり、みつはしのわたり、こりすまのわたり。

みさゝきは

うぐひすのみさゝぎ、かしはらのみさゝぎ、あめのみさゝぎ。

家は

近衛御門。二條、一條もよし。染殿の宮、せかる院、菅原の院、れんせい院、朱雀院、とうる、小野宮、紅梅、縣のゐど、東三條、小六條、小一條。

清涼殿のうしとらのすみの北のへだてなる御さうじには荒海のかた、いきたるものどものおそろしげなる、手ながあしながをぞかゝれたる。うへのみつばねの戸押しあけたれば常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふ程に、高欄のもとに、青きかめの大きな据ゑて、櫻のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば、高欄のもとまでこぼれ咲きたるに、ひるつかた大納言殿櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御ぞども、うへに濃き綾のいとあざやかなるを出して参り給へり。うへのこなたにおはしませば、戸口のまへなる細き板敷に給ひてものなど奏し給ふ。みすのうちには、房、櫻のからぎぬどもくつろかにぬぎ垂れつゝ、藤山吹などいろいろにこのもしく、あまたこはじとみのみすよりおし出でたるほど、ひのおましかたにおもの変わる。足音高し。けはひなどおしおしといふ聲聞ゆ。うらうらとのどかなる日の景色いとをかしきに、はてのこはんもたる藏人参りておもの奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。御供に大納言参らせ給うて、ありつる花のもとにかへり給へり。宮中の御まへの御几帳押しやりて、なげしのもとに出でさせ給へるなど、唯何事もなくよろづにめでたきを、侍ふ人も思ふことなき心ちするに、「月も日もかはりゆ

けどもひさにふる三室の山の」といふふることをゆるゝかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。げにぞちとせもあらまほしげなる御ありさまなるや。

はいせんつかうまつる人のをのこともなど召す。ほどもなくわたらせ給ひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるゝに、目はそらにのみにて唯おはしますをのみ見奉れば、ほど遠き目も放ちつゝし。白きまきしおしたゝみて「これに唯今覺えむふること一つづゝ書け」と仰せらるゝ。とに居給へるに「これはいかに」と申せば「とく書きて参らせ給へ。をのこはことくはへ候ふべきにもわらず」とて御硯とりおろして「とくとく、たゞ思ひめぐらさで、なにはづも何もふと覺えむ事を」と責めさせ給ふに、などさは臆せしにか、すべておもてさへ赤みてぞ思ひみだるゝや。春の歌花の心などさいふいふも上臈二つ三つ書きて「これに」とあるに、

年経れば齡は老いぬまかはあれど花を見れば物おもひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたるを御覽じて、「唯この心ばへどもものゆかしかりつるぞ」と仰せらるゝついでに「圓融院の御時御前にて、さうしに歌一つ書けと殿上人に仰せられけるを、いみじう書きにくゝすまひ申す人々ありける。更に手のわしきよき、歌の折にわはざらむをも知じらと仰せられければ、わびて皆書きける中に唯今の關白殿の三位の中將と聞えける時、

まほのみつづもの浦のいつもいつも君をばふかくおもふはやわが

といふ歌の末をたのむはやわがと書き給へりけるをなむいみじくめでさせたまひける」と

仰せらるゝも、すゞろに汗あゆる心ちを去ける。若からむ人はさもえ書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。れいぜいとよく書く人もあひなく皆つゝまれて書き汚しなど去たるもあり。古今のさうしを御まへに置かせ給ひて、歌どものもとを仰せられて「これが末はいか」と仰せらるゝに、すべて夜盡心にかゝりて覺ゆるもあり。げによく覺えず、申し出でられぬことはいかなるとぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それも覺ゆるかは。まいて五つ六つなどは唯覺えぬよしをぞけいすべけれど、さやはけにく、仰せ事はえなくもてなすべき」といひ、口をしがるもをかし。知ると申す人なきをばやがて詠み續けさせ給ふを「さてこれは皆知りたることぞかし。などかくつたなくはあるぞ」といひ歎く。「中にも古今あまた書き寫しなどする人は皆覺えぬべきとぞかし。村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御むすめにおはしましければ、誰かは知り聞えざらむ。まだ姫君におはしける時、ちゝおとゝの教へ聞えさせ給ひけるは、一つには御手を習ひ給へ。次にはきんの御琴を、いかで人にひきまむとおぼせ。さて古今の歌二十卷を皆うかべさせ給はむを、御學問にはせさせ給へとなむ聞えさせ給ひけると、きこしめしおかせ給ひて御ものいみなりける日、古今をかくしてもて渡らせ給ひて、例ならず御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御草紙をひろげさせたまひて、その年その月、なにのをりその人の詠みたる歌はいかにと問ひきこえさせたまふに、かうなりと心得させたまふをかしきものゝひがおぼえもし、忘れたるなどもあらばいみじかるべき事とわりなくおぼし亂れぬべし。そのかたおぼめ

かしからぬ人二三ばかり召し出で、ごいしえてかすを置かせ給はむとて聞えさせ給ひけむ程、いかにめでたくをかしかりけむ。御前に侍ひけむ人さへこそうもやましけれ。せめて申させ給ひければ、さかしうやがて末までなどはあらねど、すべてつゆたがふ事なかりけり。いかで猶少しおぼめかしくひがごと見つけてをやまむとねたきまでおぼしける。十巻にもなりぬ。更に不用なりけりとて、御草紙にけうさんしてみとのごもりぬるもいとめでたしかし。いと久しうありて起きさせ給へるに、猶この事さうなくてやまむ、いとわるかるべしとて、下の十卷をあすにもならばことをもど見給ひ合するとて、今宵定めむとおぼとなぶら近く参りて夜ふくるまでなむよませ給ひける。されど終にまけ聞えさせ給はずなりにけり。うへ登渡らせ給うてのち、かゝる事なむと人々殿に申し奉りければ、いみじうおぼし騒ぎて御誦經などあまたせさせ給うてそなたに向ひてなむ念じくらさせ給ひけるもすきすきしくあはれなる事なり」など語り出させ給ふ。うへ登も聞しめしてめでさせ給ひ、「いかでさ多くよませ給ひけむ、我は三まき四まきだにもえよみはてじ」と仰せらる。昔はえせものも皆すきをかしうこそありけれ。この頃かやうなる事は聞ゆる」など御まへに侍ふ人々、うへの女房のこなた許されたるなど参りて、口々いひ出でなどしたる程はまことに思ふ事なくこそ覺ゆれ。おひさきなくまめやかにえせざいはひなど見て居たらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、猶ざりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世の中の有様も見せならはさまほしう、内侍などにてもまばしあらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をば

わはあはしうわろきとに思ひ居たる男こそいとにくけれ。げにそも又さる事ぞかし。かけま
くも畏きおまへを始め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人
はすくなくこそはあらめ。女房のすんざどもその里よりくるものども、をさめ、みかはやう
ど、たびしかはらといふまでいつかはそれを耻ぢかくれたりし。とのばらなどはいとさしも
あらずやあらむ。それもある限はさぞあらむ。うへなどいひてかしづきすゑたるに、心にく
からず覺えむことわりなれど、内侍のすけなどいひて折々うちへ参り、祭の使などに出でた
るもおもだ、しからずやはある。さて籠り居たる人はいとよし。ずりやうの五せちなど出す
をり、さりともしたらひなび、見知らぬこと人に問ひ聞きなどはせじと心にくきものなり。

すさまじきもの

晝はゆる犬、春の網代、三四月の紅梅のきぬ、ちごのなくなりたる産屋、火おこさぬ火桶すび
つ、牛にくみ釋たる牛飼。はかせのうちつゞきによしうませたる。かたがへにゆきたるに
あるじせぬ所。ましてせちぶんはすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさ
こそは思ふらめども、されどそれはゆかしき事をも書き集め、世にある事を聞けばよし。人
のもとにわざと清げに書きたて、やりつる文の返事見む、今はきぬらむかしと、あやしく遅
きと待つほどに、ありつる文の結びたるもたて文も、いときたなげにもちなしふくだめて、
うへにひきたりつる墨さへ消えたるをおこせたりけり。「坐しまさゝりけり」とも若しは「物
忌とて取り入れず」などいひてもて歸りたるいとわびしくすさまじ。又かならず來べき人の

許に車を遣りて待つに入り來る音すれば、さなかりと人々出で、見るに、車やどりに入りて
ながえほうとうちおろすを、「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず。渡り給はず」と
て牛の限りひき出で、いぬる。又家ゆすりてとりたる聲の來ずなりぬるいとすさまじ。さる
べき人の宮仕するがりやりて、いつしかと思ふもいとほいなし。ちごの乳母の唯あからさま
と、いぬるをもとむれば、とかくあそばし慰めて「疾くこ」といひ遣りたるに、「今宵はえ參
るまじ」とて返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。女などむかふる
男ましていかならむ。待つ人ある所に夜すこし更けて、忍びやかに門を叩けば胸すこしつぶ
れて人出してとはするに、あらぬよしなきもの、名のりしてきたることすさまじといふ中
にもかへすがへすすさまじけれ。驗者のもの、けてうすといみじうまたりがほにとこや
ずいなどもたせて、せみ聲にまばり出し讀み居たれど、いさゝかさりげもなく、護法もつか
ねば集めて念じ居たるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまで讀みこうじて更につか
ず。「たちね」とてすゝとり返してあれど「けんなしや」とうちいひて、ひたひよりかみさまに
かしらさぐりわけて、あくびをおのれうちしてよりふしぬる。ちもくにつかさ得ぬ人の家、
今年はかならずと聞きてはやらありしものどもの外々なりつる、片田舎に住むものどもな
ど皆集り來て、出で入る車のながえもひまなく見え、物まうでする供にも我も我もと参り仕
うまつり、物くひ酒飲み、しりあへるに、はつる曉までかど叩く音もせず、あやしなど耳
立て、聞けば、ささおふ聲して上達部など皆出で給ふ。ものきゝに宵より寒がりわなゝ居

りつるげすをのこなどいと物うげに歩みくるを、をるものどもはとひだにもえ間はす。外よりきたるものどもなど「殿は何にかならせ給へる」などとふ。いらへには「なにのせんじにこそは」とかならずいらふる。まことに頼みけるものはいみじうなげかしと思ひたり。つとめてになりてひまなく居りつるものもやうやう一人二人づゝすべり出でぬ。ふるきものゝさもえゆき離るまじきは、來年の國々を手を折りてかぞへなどしてゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさまじげなり。よろしう詠みたりと思ふ歌を人のもとに遣りたるに返しせぬ。けさう文はいかゞせむ。それだにをりをかしうなどある返り事せぬは心おとりす。又さわがしう時めかしき處にうちふるめきたる人の、おのがつれづれといとまあるまゝに、昔覺えて殊なる事なき歌よみしておこせたる物のをりの扇いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけ懸けたるに、その日になりて思はずなる繪など書きてえたる。うぶやしなひ、うまのはなむけなどの使に祿などとらせぬ。はかなきくすたま、うづちななどもてありくものなどにも猶かならずとらすべし。思ひかけぬ事にえたるをばいと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと心ときめき去てきたるに、たゞなるはまことにすさまじきぞかし。

むことりて四五年までうぶやのさわぎせぬ所。おとななる子どもあまた、ようせずはうまごなどもはひありきぬべき人の親どちのひるねしたる。傍なる子ども心の心ちにも、親のひるねしたるはよりどころなくすさまじくぞありし。ねおきてあぶる湯は腹だゝしくさへこそ覺ゆれ。まはすのつごもりのなが雨。一日ばかりの精進の懈怠とやいふべからむ。八月のまら

がさね。ちあえずなりぬる乳母。

たゆまるゝもの

さうじの日のおこなひ、日遠さいそぎ、寺に久しくこもりたる。

人にあなづらるゝもの

家の北おもて簾、あまり心よきと人に知られたる人、年老いたるおきな八尋、又あははしき女、ついでづのくづれ。

にくきもの

急ぐ事あるをりにながごとするまらうど。あなづらはしき人ならばのちになどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いとにくし。硯に髪の入りにすられたる。又墨のなかに石こもりてきしきしときしきみたる。俄かに煩ふ人のあるにけんざもとむるに、例ある所にはあらでほかにある。尋ねありく程に待遠に久しきを辛うじて待ちつけて悦びながら加持せさするに、この頃ものゝけにこうじにけるにや、ぬるまゝにすなはちぬぶり磔になりたるいとにくし。なんでふことなき人のすゝろにえがちに物いたういひたる。火桶すびつなどに手のうらうちかへし、皺おしのべなどしてあぶりをるもの。いつかは若やかなる人などのさはまたりし。老いはみうたてあるものこそ火桶のはたに足をさへもたげて、物いふまゝにおしすりなどもするらめ。さやうのものは人のもとに來てぬむとする所を、まづ扇してちり拂ひすてゝぬも定まらずひろめきて、狩衣の前下ぎまにまくり入れてもぬるかし。か

ゝるとはいひかひなきものゝきはにやと思へど、すこしよろしきものゝ式部大夫、駿河のせんとなどいひしがさせしなり。又酒のみて赤き口をさぐり、髯あるものはそれを撫で、盃人に取らす程のけしき、いみじくにくしと見ゆ。又のめなどいふなるべし。身ぶるひをし、かしらふり、口わきをさへひきたれて「わらはべのこうどのに参りて」など謠ふやうにする、それはしもまことによき人のさし給ひしより心づきなしと思ふなり。物うちやみし、身のうへなげき人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりていひ知らぬをばえんじそしり、又わづかに聞きわたる事をば我もとより知りたる事のやうに、ことびにも語りまらべいふもいとにくし。物聞かむと思ふ程に泣くちご、鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。忍びてくる人見たりて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に隠し伏せたる人のいびきしたる。又ひそかに忍びてくる所に長鳥帽子してさすがに人に見えじと感ひ出づる程に、物につきさはりてそよろといはせたる、いみじうにくし。いよすなど懸けたるをうちかつぎて、さらさらとならしたるもいとにくし。もかうのすはましてこはき物のうちおかるゝいとゑるし。それもやをら引きあげて出入するは更にならず。又やり戸など荒くわくるもいとにくし。すこしもたぐるやうにてわくるは鳴りやはする。あしうわくればさうじなどもたをめかし、ごほめくこそゑるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに蚊のはそ聲になのりて、かほのもとに飛びありく羽風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ。さしめく車に乗りてありくもの、耳も聞かぬにやあらむといとにくし。我が乗りたるはその車のぬしさへ

にくし。物語などするにさし出で、我ひとりさいまくるもの、凡てさし出は童もおとなもいとにくし。昔物語などするに、我が知りたりけるはふと出で、いひくたしなどするいとにくし。鼠の走りありくいとにくし。あからさまにきたる子どもわらはべをらうたがりて、をかしきものなど取らすならひて常に來て居入りて、てうどやうち散らしぬるにくし。家にも宮仕ひ所にも逢はでありなむと思ふ人のきたるに、そらねをゑたるを我が許にあるものどものおこしよりきては、いぎたなしと思ひ顔にひきゆるがしたるいとにくし。今まゐりのさしこえて物たり顔に、をしへやうなる事いひうしろみたるいとにくし。わが知る人にてあるほどはやう見し女の事譽めいひ出だしなどするも、過ぎてほどへにけれど猶にくし。ましてさしあたりたらむこそ思ひや、らるれ。されどそれはさしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文する人。大かた家の男しうならでは高くはなひたるものいとにくし。のみもいとにくし。きぬの下にをどりありきてもたぐるやうにするも。又犬のもろ聲に長々となきわけたる、まがまがしくにくし。乳母の男こそあれ、女はされど近くも寄らねばよし。をのこをば唯我が物にして、立ちそひりやうじてうしろみ、いさゝかもこの御事にたがふものをばざんし、人をば人とも思ひたらず、わやしけれどこれがとがを心に任せていふ人もなければ、所えいみじきおもゝちして事を行ひなどするに。

小一條院をば今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東はわたどのにて渡らせ給ふ。常にまうのぼらせ給ふおまへはつばなれば、前裁などうゑ、

ませゆひていとをかし。二月十日の日のうらうらと長閑に照り渡るに、わたどの、西の廂にてうへ^一の御笛ふかせ給ふ。高遠の大貳御笛の師にて物し給ふを、ことふえ二つして高砂ををりかへし吹かせ給へば、なほいみじうめでたしといふもよのつねなり。御笛の師にてそのこといもなど申し給ふいとめでたし。みすのもとに集り出で、見奉るをりなどは、我が身にせりつみしなど、覺ゆる事こそなけれ。すけたいは木工のぞうにて藏人にはなりにける。いみじう荒々しうあれば、殿上人女房はあらはにとぞつけたるを、歌につくりて「さうなしのぬし、をほりうとのたねにぞありける」とうたふは、尾張のかねときがむすめの腹なりけり。これを笛に吹かせ給ふを添ひ侍ひて「猶たかう吹かせおはしませ。え聞きさぶらはじ」と申せば「いかでか、さりととも聞き知りなむ」とてみそかにのみ吹かせ給ふを、おなたより渡らせおはしまして、「このものなかりけり。唯今こそふかめ」と仰せられて吹かせたまふ、いみじうをかし。

文ことばなめき人こそいとくけれ。世をなのめに書きなしたる詞のにくきこそ。さるまじき人のもとにあまりかしこまりたるも、げにわろきことぞ。されど我がえたらむはことわり、人のもとなるさへにく、こそあれ。大かたさし向ひてもなめきはなどかくいふらむとかたはらいたし。ましてよき人などをさ申すものは、さるはをこにていとにくし。男老うなどわろくいふいとわろし。我がつかふものなど、おはする、のたまふなどいひたるいとにくし。こゝもとに、侍るといふもじをあらせばやと聞くことこそ多かめれ。あいぎやうなくと詞老

なめきなどいへば、いはる、人も聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまり嘲哂するなどはる、まで、ある人もわろきなるべし。殿上人宰相などを唯なのる名をいさ、かつ、ましげならすいふは、いとかたはなるを、げによくさいはず。女房の局なる人をさへ、あのおもと君などいへば、めづらかに嬉しと思ひてほむる事ぞいみじき。殿上人さんだちを御まへよりほかにてはつかさをいふ。又御前にて物をいふとも、きこしめさむにはなどてかは、まろがなどいはむ。さいはざらむにくし。かくいはむにわろかるべき事は。ことなる事なき男のひきいれ聲してえんだちたる。墨つかぬ硯。女房の物ゆかしうする、たいなるだにいとしも思はしからぬ人にくげごとしたる。一人車に乗りて物見る男、いかなるものにかあらむ、やんごとなからずともわかき男どもの物ゆかしう思ひたるなどひきのせても見よかし。すきがけに唯一人かくよひて心一つにまもり居たらむよ。曉に歸るひとの、よべおきし扇ふところがみもとむとて、暗ければさぐりあてむさぐりあてむとた、きもわたし、「あやし」などうちいひもとめ出で、そよそよとふところさし入れて、扇ひきひろげてふたふたとうちつかひてまかり申しきたる、にくしとはよの常いとあいぎやうなし。おなしごと夜深く出づる人の烏帽子の緒強くゆひたる、さしもかためずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも人のとがむべきことかは。いみじうまどけなうかたくなく、直衣狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせむ。とする人はなほ曉のありさまこそをかしくもあるべけれ。わりなくまぶしぶに起きがたげなるをまひてそ、のかし、「あけすぎぬ、あな見苦

し」などいはれてうち歎くけしきも、げにあかず物うきにしもあらむかしと覺ゆ。指貫なども居ながら着もやらす、まづさしよりてよひと夜いひつることの残りや女の耳にいひ入れ、何わざすとなければと帯などをばゆふやうなりかし。格子わけ、妻戸あるところはやがてもろともに出で行き、晝の程のおぼつかならむ事などもいひいでにすべり出でなむは、見送られて名残もをかしかりぬべし。なごりも出所あり。いときはやかに起きてひろめきたちて指貫の腰つよくひきゆひ、直衣、うへのきぬ、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帯強くゆふにくし。明けて出でぬる所たてぬ人いとにくし。

心ときめきするもの

雀のこがひ。ちごあそびする所の前わたりたる。よきたきものたきて一人臥したる。唐の鏡のすこしくらき見たる、よき男の車といめて物いひあないせさせたる。かしらあらひけさうじて、かうにしみたるきぬ着たる、殊に見る人なき所にて心のうちにはなほをかし。待つ人などある夜、雨のあし風の吹きゆるがすもふとぞおどろかる。

すぎにしかたこひしきもの

枯れたる葵、ひゝなあそびのてうと。ふたあゐるゑびぞめなどのさいでのおしへされて、さうしのなかにありけるを見つけたる。又をりから哀なりし人の文、雨などの降りてつれづれなる日さがし出でたる。こぞのかはほり、月のあかさ夜。

こゝろゆくもの

よくかいたる女繪の詞をかしうつゞけておほかる。物見のかへさに乗りこぼれて、をのこともいと多く牛よくやるもの、車走らせたる。白く清げなるみちのくがみにいとほそ書くべくはあらぬ筆して文書きたる。川舟のくだりさま。はぐるめのよくつきたる。てうばみにてう多くうちたる。うるはしき糸のねりあはせぐりきたる。物よくいふおんやうとて河原に出で、すそのはらへしたる。よるねおきて飲む水。徒然なるをりにいとあまり睦しくはあらず、疎くもあらぬまらうとのきて、世の中の物がたりこの頃あることをかしきもにくきも、怪しきも、これにかゝり、かれにかゝり、おほやけわたくしおぼつかながら聞きよき程に語りたるいと心ゆくこゝちす。社寺などに詣で、物申さするに、寺には法師、社にてねぎなどやうのもの、思ふ程よりも過ぎて、とこほりなく聞きよく申したる。びらうげはのどやかにやりたる。急ぎたるはかるかるしく見ゆ。網代は走らせたる。人の門より渡りたるをふと見る程もなく過ぎて、供の人ばかり走るを誰ならむと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しく行けばいとわろし。牛はひたひいと小さく白みたるが腹のまた足のまも尾のすそ白き。馬は紫の斑づきたる、蘆毛、いみじく黒きが足肩のわたりなどに白きところ、薄紅梅の毛にて髪尾などいともろき、げにゆふかみともいひつべき。牛飼は大きにて、かみあかまらがにて顔の赤みてかどかどしげなる。ぎうしきずるじんはほそやかなる。よきをのこも猶わかき程はさるかたなるぞよき。いたく肥えたるはねぶたからむ人とおもはれる。小舎人はちひさくて髪ゆるはしきがすそさはらかに聲をかしうて、かしてまりて物などいひたるぞり

やうりやうじき。猫はうへのかぎり黒くてことは皆白からむ。説經師は顔よきつとまもらへたるこそその説く事のためとさも覺ゆれ。ほかめまつればふと忘るゝに、にくげなるは罪やうらむと覺ゆ。この詞はとゞむべし。すこし年などのよろしき程こそかやうの罪はえがたの詞かき出でけめ。今は罪いとおそろし。又たふとき事、だうしんおほかりとて、説經すといふ所にさいそにいさぬる人こそ猶この罪の心にはさしもあらで見ゆれ。藏人おりたる人、昔は御せんなどいふ事もせず、その年ばかりうちわたりにはまして影も見えざりける。今はさしもあらざめる。藏人の五位とてそれをしもぞいそがしうつか。ど、猶名残つれづれにて心一つはいとまある心ちぞすべかめれば、さやうの所に急ぎ行くを、一たび二たび聞きそめつれば、常にまうでまほしくなりて、夏などのいとわつきにもかたびらいとあざやかに、うすふたある、あをにぶの指貫などふみちらして居ためり。おぼしにものみつけたるはけふさるべき日なれど、くどくのかたにはさはらずと見えむとにや、急ぎ來てその事するひじりと物語して車たつるさへぞ見いれ、ことにつきたるけしきなる。久しく逢はざりける人などのまうで逢ひたるめづらしがりて近くぬより物語し、うなづき、をかしき事など語り出で、扇ひろうひろげて口にあて、笑ひさうぞくきたるすいかいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして車のよしあしほめそしり、なにがしにてその人のせし八講、經、供養などいひくらべ居たるほどに、この説經の事もき、入れず。なにかは、常にきくことなれば耳なれてめづらしう覺えぬにこそはあらめ。さはあらで講師みてまばしあるほどに、さ

きすこしおはする車とめておるゝ人。蟬のはよりもかるげなる直衣、指貫、すゞしのひとへなどきたるも狩衣姿にても、さやうにてはわかほそやかなる三四人ばかり、さぶらひのもの又さばかりして入れば、もとぬたりつる人もすこしうち身じろきくつろぎて、かうざのものと近き柱のもとなどにすゑたれば、さすがにすゞおしもみなどして伏し拜み居たるを、講師もはええしう思ふなるべし。いかで語り傳ふばかりと説き出でたる。聽問すると立ち騒ぎぬかづく程にもなくて、よきほどにて立ち出づとて、車どものかたなど見おこせて、われどちいふ事も何事ならむとおぼゆ。見知りたる人をばをかしと思ひ、見知らぬは誰ならむそれによかれにやと目をつけて思ひやらるゝこそをかしけれ。「説經しつ。八講まけり」など人いひ傳ふるに「その人はありつや、いかゞは」などさだまりていはれたるあまりなり。などかはむげにさしのぞかではあらむ。あやしき女だにのみじく聞くものば、さればとて始めつ方はかちありきする人はなかりき。たまさかにはつぼさうぞくなどばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物まうでをせし。説經などは殊に多くもきかざりき。このころその折さし出でたる人の命長くて見ましかば、いかばかりをしりひばうせまし。菩提といふ寺にけちえん八かうせしが、き、にまうでたるに、人のもとより」とく歸り給へ、いとさうざうし」といひたれば、はちすのはなびらに、

「もとめてもかゝるはちすの露をおきてうき世にまたは歸るものかは」と書きてやりつ。まことにいとたふとく哀なれば、やがてとまりぬべくぞ覺ゆる。さうちう